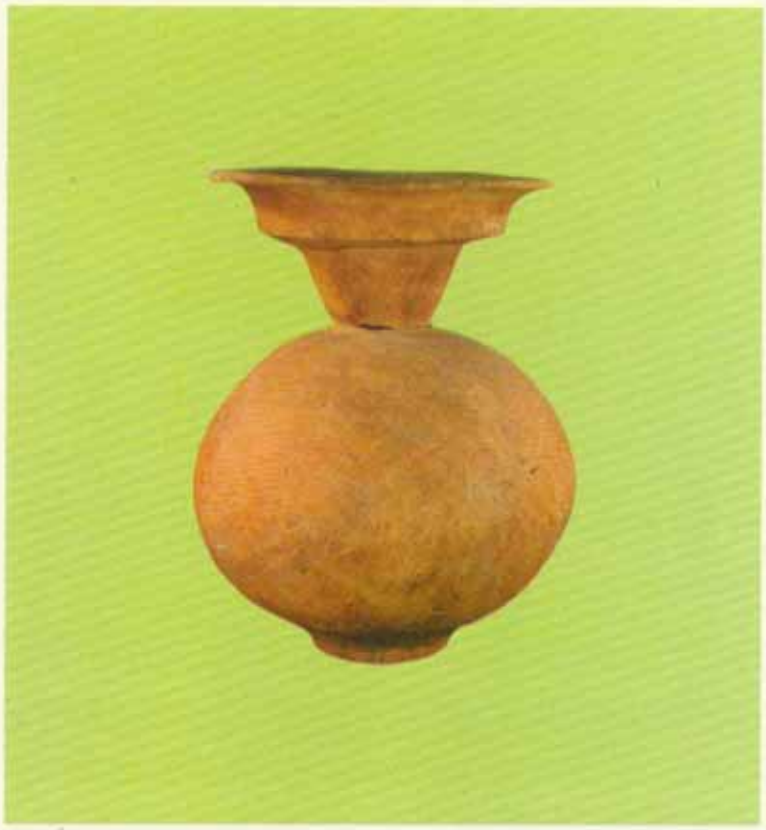
宮城県文化財調査報告書　第72集

東北新幹線関係遺跡調査報告書

－Ⅳ－

昭和55年9月

宮　城　県　教　育　委　員　会
日本国有鉄道仙台新幹線工事局



安久東遺跡方形周溝墓出土（第12図３）

序　　文

本県には私達の祖先が、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、伝えてきた貴重な文化遺産が数多く存在しています。この遺産を保護、保存すると共に新たな文化創造の基礎とすることが現代の私達の重要な責務でもあります。

全国新幹線鉄道整備法にもとづき建設が急ピッチで進められている東北新幹線は、仙台平野を南北に縦貫する大規模な事業で、関係した遺跡は28遺跡を数えます。これらについては、日本国有鉄道新幹線工事局からの委託により宮城県教育委員会が昭和47年以来発掘調査を実施し、路線敷および関連施設ともに昭和54年度で完了して大きな成果を得ております。

本報告書は、東北新幹線関係遺跡調査報告書の第4冊目として「安久東遺跡・木ノ下遺跡・観音沢遺跡・八沢要害遺跡」の各遺跡の調査成果をとりまとめたものであります。

本書を刊行するにあたり、調査以来長い間にわたって御理解と御協力をいただきました関係各位に対し心から感謝の意を表するとともに、本書が皆様方のお役に立つことを切に念願いたします。

昭和55年9月

宮 城 県 教 育 委 員 会

教 育 長　北 村　潮

目　　次

序　文

調査に至る経過 …… 1

１．安久東遺跡 …… 3

２．木ノ下遺跡 …… 113

３．観音沢遺跡 …… 131

４．八沢要害遺跡 …… 351

例　　言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡の発掘調査報告書第４分冊として４遺跡について作成したものである。
2. 遺跡の記載は南から順に行った。
3. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課（昭和47年度分は文化財保護室）が担当し、関係各市町村教育委員会、各学校職員、学生補助員の協力をいただいた。
4. 調査および整理において、次の方々および機関から多くの指導・助言を賜わった。

　　楢崎彰一氏（名古屋大学教授）
　　芹沢長介氏（東北大学教授）
　　早坂正治氏（宮城町在住陶芸家）
　　斉藤鋭雄氏（宮城県農業短期大学講師）
　　藤沼邦彦氏（東北歴史資料館考古研究科長）
　　東北歴史資料館
　　宮城県多賀城跡調査研究所

5. 石製品の材質同定は東北大学助教授蟹沢聡史氏にお願いした。
6. 各遺跡報文中、土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を利用した。
7. 各遺跡報文中、建設省国土地理発行の地形図を使用したものは図中に示した。
8. 整理・報告書の作成は、発掘調査時の調査員および現文化財保護課員の協議を得て行った。各遺跡の整理・執筆担当者は次の通りである。

　　安久東遺跡……土岐山武
　　木ノ下遺跡……加藤道男
　　観音沢遺跡……加藤道男・阿部博志
　　八沢要害遺跡……小井川和夫

9. 各遺跡については、すでに現地説明会資料、調査略報などにその内容の一部が紹介されているものがあるが、本書の記載内容がそれらに優先するものである。
10. 各遺跡の調査、整理に関する諸記録および出土遺物は宮城県教育委員会が保管しており、今後東北歴史資料館において保存、公開の予定である。

調査に至る経過

東北新幹線の建設事業は、昭和46年10月に予定路線の発表があった。

宮城県教育委員会では、「日本国有鉄道の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」等にもとづき、新幹線建設計画予定路線内の遺跡の分布調査を計画し、関係市町村教育委員会の協力を得て、昭和47年3月までの間に調査を終えた。

その結果、路線敷内に含まれ事前調査が必要とみなした遺跡は30遺跡を数えたが、その後実質係りのない4遺跡を除外し、代って新発見の2遺跡を追加、最終的には28遺跡を発掘調査の対象とした。

昭和47年度に入り、日本国有鉄道から発掘調査促進の要望があり、5月に基本事項の協議を行ない、7月に発掘調査の委託契約を結んだ。

こうした発掘調査は昭和47年8月から開始し昭和54年5月栗原郡高清水町の観音沢遺跡第3次調査をもって、路線敷内の関係遺跡の全遺跡について終了した。その後、東北新幹線関連事業として乗務員養成所等の建設に伴う遺跡が追加されたが、これらも昭和54年12月で完了した。

遺物整理については、昭和53年度から昭和55年度までの3年間で行なう計画で実施しており本報告書の次に東北新幹線関係遺跡調査報告書の最終版として第5冊目を引続き刊行する予定である。

なお、報告書刊行後は、遺物・写真・実測図等の資料は、東北歴史資料館へ移管し、保存と活用をはかることにしている。

東北新幹線関係遺跡位置図

（1）安久東遺跡

調　査　要　項

遺　跡　名：安久東遺跡

宮城県遺跡地名表登載番号：01037

所　在　地：仙台市中田町字安久東52の1、52の5、55の1、55の2、58の1、72の1

遺 跡 記 号：ＡＴ

調査対象面積：約6224㎡（１次約544㎡、2次約1680㎡、3次約4000㎡）

発 掘 面 積：約2039㎡（１次約305㎡、2次約234㎡、3次約1500㎡）

調 査 期 間：第1次調査　昭和47年8月23日～10月28日

第2次調査　昭和51年12月7日～12月16日

第3次調査　昭和52年4月17日～8月30日

調　査　員：第１次調査　宮城県教育庁文化財保護室

志間泰治　氏家和典　田中則和

第2・3次調査　宮城県教育庁文化財保護課

早坂春一　佐々木安彦　加藤道男　高橋守克　佐藤好一

真山　悟　中島　直

協力・参加者：安田喜憲（東北大学理学部大学院学生）

第3次調査　佐藤　成（仙台市立上杉通小学校教諭）

佐藤　隆（仙台市立七郷中学校教諭）

太田昭夫（仙台市立金剛沢小学校教諭）

株式会社　株木建設

※発掘調査時点と調査終了後における遺溝名称の変更

（発掘調査時）　　（調査終了後）

９号 溝 ⟶ 台状部　西側周溝

11号溝 ⟶ 台状部　東側周溝

1号竪穴 ⟶ 台状部南側周溝および張り出し部東側周溝

2号竪穴 ⟶ 台状部南側周溝および張り出し部西側周溝

目　　次

Ⅰ、遺跡の位置と周辺の遺跡 7

1、遺跡の位置 7
2、周辺の遺跡 7

Ⅱ、調査の方法と経過 13

Ⅲ、発見された遺構と遺物 19

1、基本層位 19
2、方形周溝墓とその出土遺物 24
3、古墳石室とその出土遺物 33
4、竪穴住居跡とその出土遺物 41
5、溝とその出土遺物 55
6、表土および出土地点不明の遺物 63

Ⅳ　考　　察 65

1、方形周溝墓 65
2、古墳石室 72
3、竪穴住居跡 75
4、溝 81

Ⅴ、まとめ 82

Ⅰ、遺跡の位置と周辺の遺跡

1、遺跡の位置

安久東遺跡は東北本線南仙台駅西方約100m、仙台市中田町字安久東52の1、52の5、55の1、55の2、58の1、72の1番地に所在する。安久東遺跡付近は仙台市の南端にあたり、名取市と接している。

宮城県南部の地形を本遺跡周辺を中心に概観してみると、西部には奥羽山脈が縦走しておりこれから東側に向かって青葉山丘陵（最高標高222m）、高館丘陵（標高200m前後）が延び、名取平野に東面している。高館丘陵からはさらに小丘陵が派生しており、名取市南部を中心として、箕輪、野田山、飯野坂、小豆島等の小丘陵群（愛島丘陵、標高30～50m）が東側に向かって延びている。また、北部には名取川（途中で広瀬川を合流）が東流し、南部には阿部隈川が槻木付近で流れを東にかえ、いずれも名取平野の東に位置する太平洋に注ぎ込んでいる。（第2図）

名取川は名取郡秋保町の二口峠を源とし、高館、青葉山丘陵間を流れ落ち、これら丘陵が名取平野と接する熊野神社付近で大きくその川幅を広げ、付近に扇状地性沖積地を形成するに至っている。これら沖積地には氾濫による旧河道が網状流をなしており、自然堤防や潟湖性低地等が複雑に作り出されている（第3図）。本遺跡はこのような自然堤防上に位置している。この自然堤防は西から東側に緩やかに標高を減じながら延びており、本遺跡付近の標高は9～10mである。比高は東側で約１mで僅かに高く上面は平坦である。現状は宅地と畑地である。

2、周辺の遺跡

本遺跡は名取川によって形成された自然堤防（標高9～10mの微高地）上に立地している。遺跡付近は微高地、潟湖性低地が複雑にいりくんでいるが、周辺の丘陵端部も含めた名取平野のこの地域には数多くの遺跡が存在している。

第１図は本遺跡が立地する周辺の遺跡群を宮城県遺跡地図及び宮城県遺跡地名表（宮城県教委：1976）に基づいて示したもので、これによると、本遺跡周辺には縄文時代から近世までの遺跡が分布していることが知られる。以下、各時代ごとにみてみると、

縄文時代の遺跡としては六反田遺跡がある。名取川左岸の標高約12mの自然堤防上にあるこの遺跡は昭和51～53年に発掘調査が行なわれ、その結果、表土下約２mから縄文時代中期～後期の竪穴住居跡が計４軒検出され縄文時代の集落の存在が確認されたのである。その他、縄文時代の遺跡としては上野遺跡、鍛冶屋敷Ｂ遺跡、船渡前遺跡などが知られており、これらはいずれも名取川左岸に位置している。また、高館山丘陵から派生した小丘陵の東部には上町遺跡、

真坂遺跡、川上遺跡、金剛寺貝塚などがある。このように、縄文時代の遺跡は丘陵部や青葉山丘陵を背負った名取川左岸の自然堤防上などに多くみられ、本遺跡のある名取川右岸自然堤防上にはほとんど存在していない。

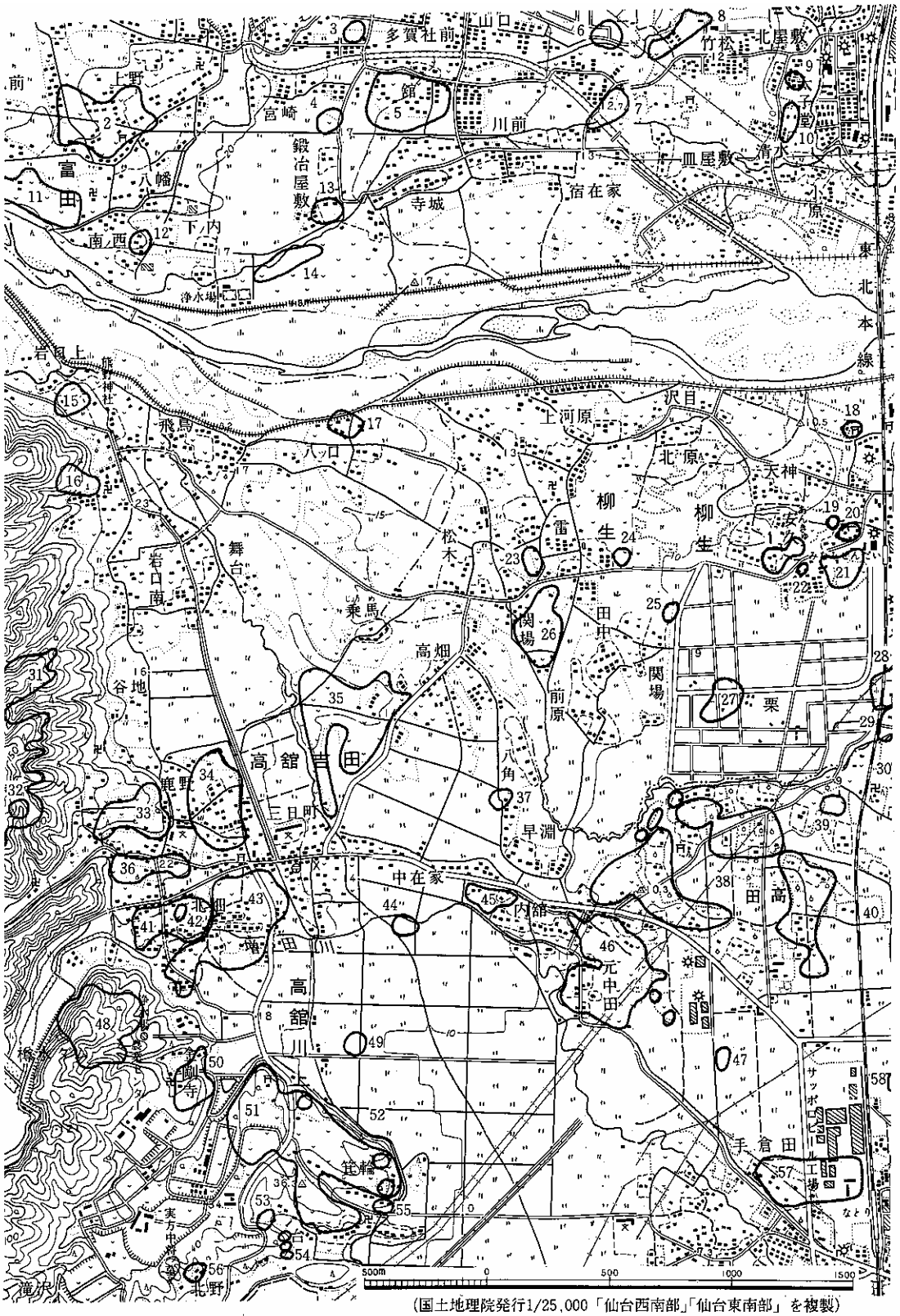
本遺跡のある名取川右岸自然堤防上に確実に遺跡が営なまれるようになるのは次の弥生時代からであり、高畑遺跡、清水遺跡などが知られている。特に清水遺跡からは石包丁が数点出土しており、当時この地域で米作りが行なわれていたことを窮い知ることができるのである。

4世紀頃になると、畿内を中心として古墳文化が発達するが、やがてこの文化は東北地方にも波及し、名取地方に雷神山古墳やその他の大古墳を出現せしめるに至る。比較的初期に造られたと考えられている古墳には高館山古墳（前方後方墳）、宇賀崎１号墳（方墳）などがあり、前述した雷神山古墳（前方後円墳）もあわせて、種々の形態の古墳が周辺にはみられる。また、今熊野遺跡や本遺跡からは弥生時代から存在する埋葬形態である方形周溝墓が発見されている。

７世紀頃になると畿内では古墳はしだいに作られなくなるが、この時期、本遺跡周辺には小古墳が群集するようになる。遺跡としては安久諏訪古墳、伊豆野権現古墳、中田神社遺跡などがある。古墳の築造はこの時期だけにとどまらず、新しくは平安時代まで作られている。また、現在は墳丘が失なわれていても、仙台市教育委員会発掘の安久東遺跡の石室などのように、主体部だけが地表下から発見される例があることから、後世に破壊されてしまった遺跡も数多くあるものと思われる。それらも考え合わせると、本遺跡周辺は一大群集墳地帯であったものと思われる。

奈良、平安時代になると、本遺跡周辺での遺跡数が多くなり、仙台市教育委員会調査の安久東遺跡からは平安時代の住居跡が発見されている。主な遺跡には雷東遺跡、谷地田遺跡、壇腰遺跡などがある。

鎌倉時代になると名取、広瀬川をはさんで、頼朝側と平泉勢力との戦いが行なわれており、当時、この地が平泉勢力の防衛線として重要な位置にあったと思われる。また、熊野堂地区には熊野神社が作られ、平安時代から中世にかけて大きな信仰を集めていたといわれる。他に中世の遺跡としては高館城跡や熊野経塚などが、近世の遺跡としては遠藤屋敷跡などがある。



（国土地理院発行1/25,000「仙台西南部」「仙台東南部」を複製）

第１図　周辺の遺跡

安久東周辺遺跡一覧表

縄文時代

No	遺跡名	立地	種別	他の時代
2	上野遺跡	台地	包含地	奈良、平安
8	六反田遺跡	沖積平野	〃	古墳、奈良、平安
13	鍛冶屋敷B遺跡	自然堤防	〃	奈良、平安
11	船渡前遺跡	〃	〃	弥生、奈良、平安
33	上町遺跡	台地	〃	奈良、平安
34	鹿野東遺跡	沖積平野	〃	弥生、古墳、奈良、平安
36	真坂遺跡	〃	〃	弥生、古墳、奈良、平安
43	川上遺跡	〃	〃	弥生、奈良、平安
46	田高遺跡	自然堤防	〃	弥生、古墳、奈良、平安
47	原遺跡	沖積平野	〃	弥生、古墳、奈良、平安
50	金剛寺貝塚	丘陵	貝塚	
59	来光囲遺跡	沖積平野	〃	奈良、平安

弥生時代

1	安久東遺跡			古墳、奈良、平安、中世、近世
35	高畑遺跡	沖積平野	包含地	古墳、奈良、平安
38	清水遺跡	自然堤防	集落跡	古墳、奈良、平安
49	八反田遺跡	沖積平野	包含地	

古墳時代

10	長町清水遺跡	自然堤防	古墳	
15	岩口上遺跡	台地	包含地	奈良、平安
18	上古川古墳	自然堤防	円墳	
19	中田神社裏遺跡	自然堤防	包含地古墳群	平安
20	伊豆野権現遺跡	〃	円墳	
21	前沖遺跡			
22	安久諏訪古墳	自然堤防	円墳	
25	谷地田遺跡	〃	包含地	奈良、平安
26	関場遺跡	〃	〃	奈良、平安
27	栗遺跡	〃	集落跡	奈良
30	天神社古墳	〃	古墳	
32	高館山古墳	丘陵中腹	前方後方墳	
42	西北畑古墳	沖積平野	円墳	
45	東内館遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
52	笑輪A地区古墳群	台地	古墳	
56	北野横穴古墳群	丘陵麓	横穴古墳	
57	八幡遺跡	自然堤防	集落跡	奈良、平安

奈良・平安時代

No	遺跡名	立地	種別	他の時代
3	掘ノ内遺跡	自然堤防	包含地	
4	鍛冶屋敷A遺跡	〃	〃	
6	下ノ内北遺跡	〃	〃	
7	伊古田遺跡	〃	〃	
9	北屋敷遺跡	〃	〃	
12	富田南西遺跡	〃	〃	
14	六本松遺跡	〃	〃	
17	八ツ口遺跡	〃	〃	
29	壇腰遺跡	沖積平野	〃	
37	北宮神妙遺跡	〃	〃	
39	西田遺跡	自然堤防	〃	
40	上余田遺跡	〃	集落跡	
44	家館遺跡	沖積平野	包含地	
51	南台西遺跡	丘陵頂	〃	
53	南台窯跡	丘陵斜面	窯跡	
54	笠島廃寺跡	丘陵中腹	寺跡	
55	北野窯跡	丘陵斜面	窯跡	
58	下田高南遺跡	自然堤防	包含地	

平安時代

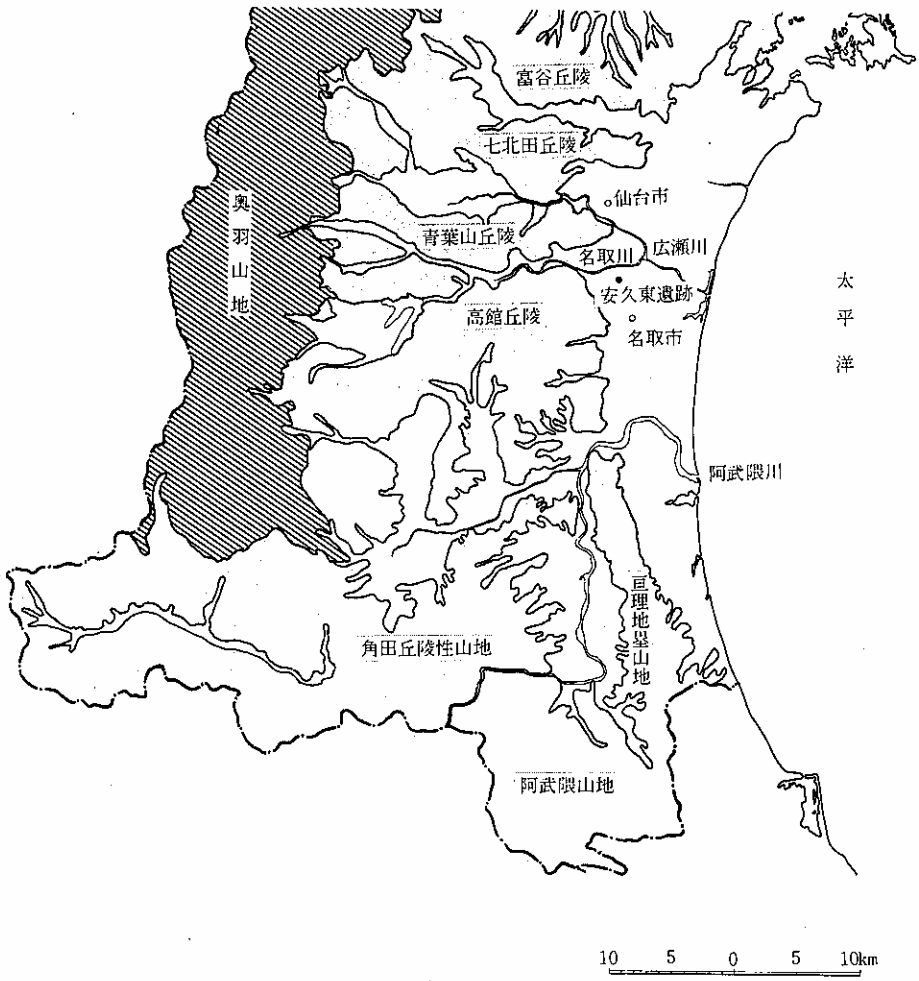
23	雷遺跡	自然堤防	包含地	
24	雷東遺跡	〃	〃	

中世

5	富沢城跡	自然堤防	城館	
16	熊野経塚	丘陵斜面	経塚	
28	前田館跡	自然堤防	城館	
31	高館城跡	丘陵	〃	
48	桑島館跡	〃	〃	

近世

41	遠藤屋敷跡	沖積平野	屋敷跡	



経済企画庁総合開発局国土調査課（1972）による。

第２図　宮城県南部の地形分類図

第３図　自然堤防、扇状地分布図

Ⅱ、調査の方法と経過

安久東遺跡の発掘調査は昭和47年（第１次調査）、51年（第2次調査）、昭和52年（第3次調査）の3度にわたって行なわれた。各調査ごとに順を追って方法と経過とに分けて記述する。

１、調査の方法

地区設定に際しては南北に走る東北新幹線の中心杭を基準線にし、第１次調査では中心杭319.9㎞から20m北を原点とした。調査区は東西16m、南北34mで、調査区全体に3m単位のグリッドを設定した。第2次調査では中心杭316㎞を原点とし、第１次調査区のすぐ北隣りから北方向に東西6m、南北39mの調査区を設定した。第3次調査では中心杭315.9㎞と316㎞の中心を原点とし、第2次調査時の調査区の東西幅を西に3m、東に6m拡張して計15mとし、長さは北側にある県道高館線と接する所までと、県道を越えて更に北へ48m延長して調査区を設け、調査区全体に3m単位のグリッドを設定した。第1～3次調査ともグリッド名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で示した。

遺構の発見された地区には、実測図作製のため原点に基づいて遺り方を設定し石室については10分の1、その他の遺構については20分の1の平面図、断面図を作製した。

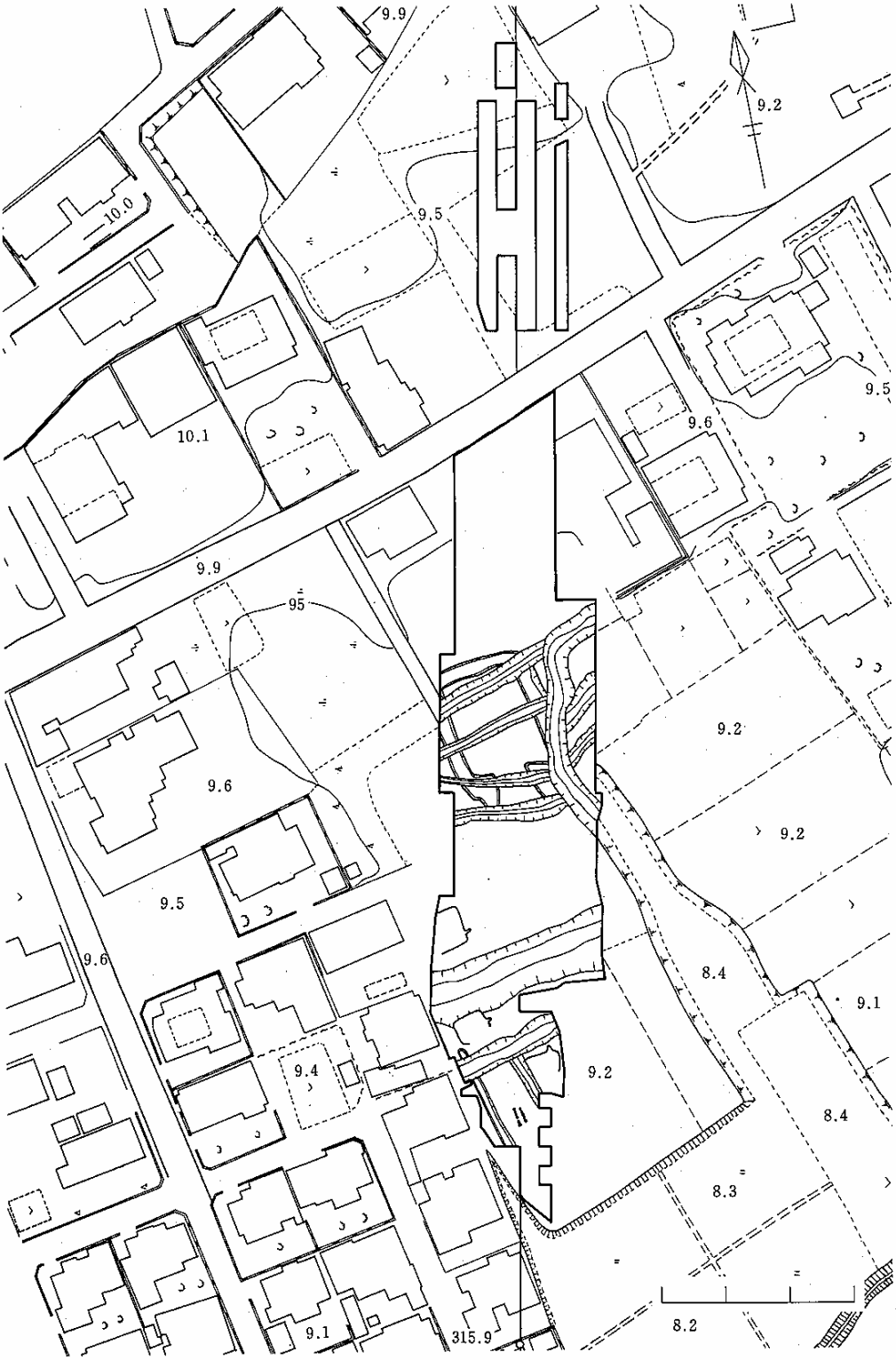
２、調査の経過

第１次調査は遺跡南部の畑地約544㎡を対象として、昭和47年8月23日から開始された。

全体を掘り進めていくと、地表下約20～30㎝で溝状の落ちこみが確認された。さらに輪郭検出作業を行なった所、この溝状のものはほぼ調査区全体にわたって幅約1.5mで南北方向に延びており、北側で東西方向に延びる別の溝によって切られている事が判明した。また、調査区東側からも南北方向に延びる別の溝が検出された。

また、調査区ほぼ中央部・地表下約35㎝の所からは、大中の石がほぼ南北方向に一直線に並んでいるのが確認された。この石列を中心に周囲をさらに掘り下げた所、長方形の平面形を有する河原石積遺構が検出され、これが古墳石室であることが判明した。さらに、調査区東部で焼土遺構状のものが検出されたが、その性格については明らかにできなかった。なお、調査区南西部には、地上物件が現存しており、その部分の調査はできなかった。

この結果１次調査では遺構として古墳石室１基（6－Ｂ・Ｃ区）、焼土遺構１基（10－Ｆ区）、溝3本が検出され出土遺物として石室床面から武器や馬具などの副葬品が、焼土遺構埋土中からは土師器、須恵器などが、溝埋土中からは土師器、須恵器、中世陶器、古銭などが遺構以外から古銭などが出土した。１次調査は10月28日終結した。



第４図　周辺の地形とグリッド配図

その後、昭和51年になって第１次調査の際、未撤去だった地上物件が撤去され、路線敷全域の調査可能となったため、第2次調査実施のはこびとなった。調査は昭和51年12月7日から開始された。発掘調査は表土剥離作業まで終了したが、厳寒のため調査の継続が困難となり、12月16日一時作業を中止することになった。この時点での遺構の発見はなく、出土遺物は土師器が数点出土しただけである。

調査は翌年4月17日から再開された。第3次調査である。

第3次調査では第１次調査時の焼土遺構の精査もあわせて行なわれた。発掘は県道南側調査区においては全面を層位ごとに調査し、県道北側では調査区内に3mごとにいれた南北に長いトレンチについて調査した。その結果、県道南側調査区においては第Ⅱ層上面から掘りこまれている溝が数本検出された。また、第１次調査で発見された焼土遺構は精査の結果住居跡であることが確認されたほか、調査区の南東隅付近からは新たに住居跡が一軒検出された。さらに15・16－Ｅ区から煙道状のものが検出されたため西側に拡張して調査したところこれも住居跡であることが確認された。住居跡は3軒ともすべて第Ⅲ層上面から掘りこまれていた。23～30－Ａ～Ｅ区において第Ⅲ層を剥離し第Ⅳ層上面に達すると数本の溝に切られてはいるが方形にめぐる溝が現れた。溝は南辺の中央部が切れており、そこから張り出すように竪穴状の遺構が両側にみられた。

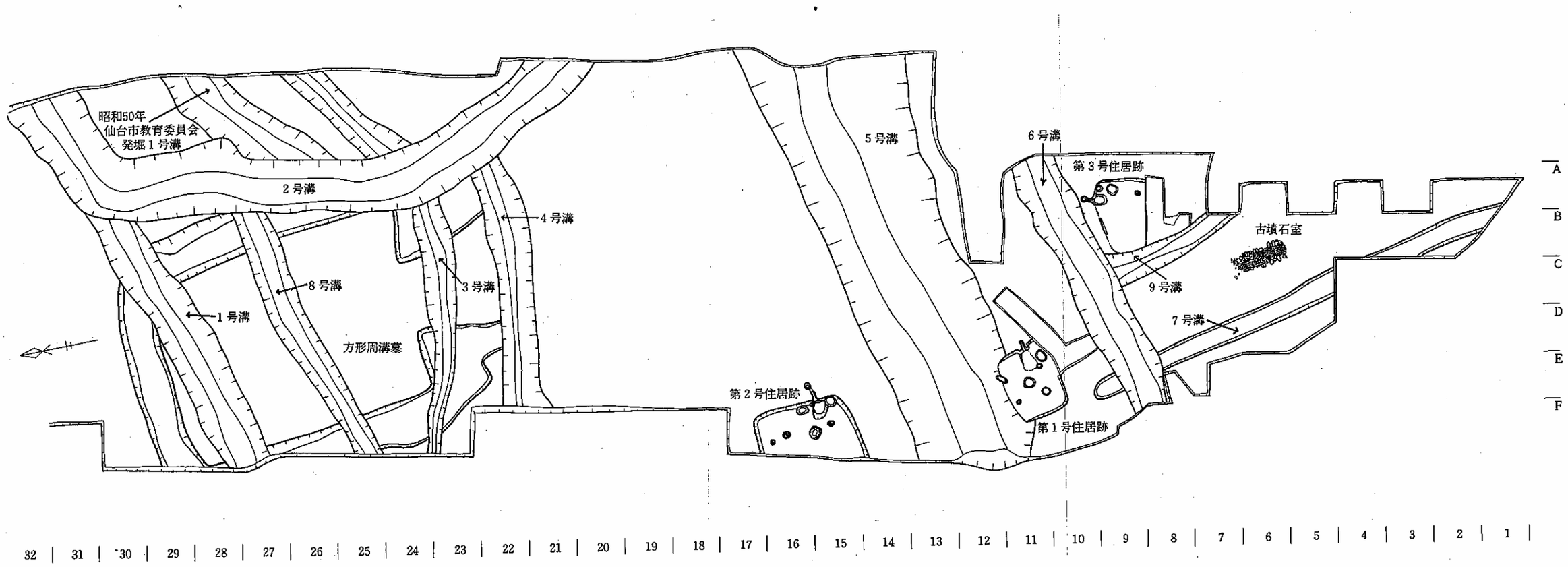
東側の遺構を１号竪穴、西側を２号竪穴とした。両竪穴とも溝によって切られているが、１号竪穴についてはほぼ方形、２号竪穴は方形を基調としながら、南側の輪郭線が内側にくびれ込んでおり不規則になっていることが判明した。その後、精査の結果これらは方形状の溝と切り合いが認められず、同一の遺構であることが確認され、その形状等よりこれが前方に張り出し部を有する形態の方形周溝墓であることが判明し、県内4番目の方形周溝墓の発見となった。また、Ⅳ層中からはＣ－22区を中心に弥生土器の壺が数個体まとまって発見された。

北側調査区においてはトレンチごとに調査を行なったが、遺構は検出されなかった。

この結果、県道南側調査区では遺構として方形周溝墓１基、竪穴住居跡3軒、溝数本が検出され、遺物としては方形周溝墓堆積土中から土師器（壺、甕、高坏など）が、竪穴住居跡の堆積土や床面からは土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器などほかに鉄製品が、溝堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器、赤焼土器、漆器、石製品、鉄製器などがその他遺構以外からも弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器、土製品、鉄製品などが出土している。

北側調査区からは遺物として弥生土器、土師器、赤焼土器などが出土している。

調査は8月30日に終了した。なお、第１次調査で発見された石室はその後現場近くに移築され、保存されている。



第５図　遺構・グリット配置図

Ⅲ、発見された遺構と遺物

1、基本層位（第6図）

安久東遺跡の調査区は、県道高館線の北側と南側に跨っているが、各地点とも、基本層位に大きな違いはみられない。基本的に5枚の層が認められた。

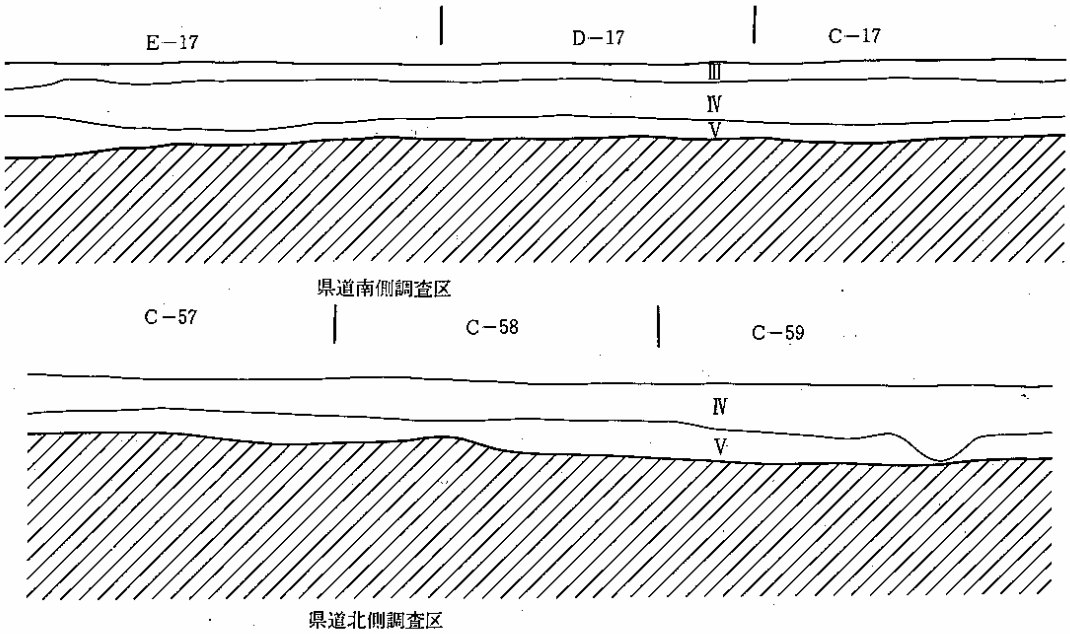
第Ⅰ層　明黄褐色土層で表土である。層の厚さはほぼ平均しており、約20cmである。

第Ⅱ層　黒色土層である。溝はすべてこの層の上面で確認されている。

第Ⅲ層　黄褐色土層である。層の厚さは15～20cmである。住居跡はすべてこの層の上面で確認されている。

第Ⅳ層　褐色もしくは黄褐色土層である。層の厚さは20～30cmである。方形周溝墓はこの層の上面で確認されている。またこの層からだけ弥生式土器がまとまって出土している。

第Ⅴ層　暗褐色土層である。層の厚さは10～20cmである。遺物は出土しなかった。



層　位	層No	土　　色	土　性	備　　考
第Ⅰ層	1	明黄褐色（10YR 5/6）	シルト	表　土
第Ⅱ層	2	黒　　色（10YR 3/1）	シルト	
第Ⅲ層	3	黄 褐 色（2.5YR 5/3）	シルト	
第Ⅳ層	4	褐　　色（10YR 5/4）	シルト	
第Ⅴ層	5	暗 褐 色（10YR 3/3）	シルト	無遺物層

第６図　基本層位

〔出土遺物〕

(1) 基本層位Ⅱ、Ⅲ層出土遺物（第7図）

Ⅱ、Ⅲ層から出土した遺物には土師器、赤焼土器、中世陶器がある。ほとんどが小破片である。ここでは図示遺物を中心に記述する。

土師器

壺（第7図1～3）　3点出土している。１点は口縁部と底部全部、体部半分欠損している。他は底部破片である。第7図1は体部は球形で、体部最大径は約39.8㎝である。器面調整は外面が刷毛目のちミガキ、内面刷毛目である。2・3は底部から体部にかけて丸みをもって外傾する。器面調整は内外面刷毛目である。なお、これは甕になるかもしれない。

坏（第7図4）製作に際しロクロを使用している。底部から口縁部にかけてわずかに丸みをもって外傾する。内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りである。

甕（第7図6・7）　製作に際しロクロを使用している。いずれも体部下半が欠損している。体部で膨らみ頸部でしまり口縁部外傾する。

赤焼土器

坏（第7図5）　製作に際しロクロを使用している。再調整はない。底部から口縁部にかけてわずかに丸みをもって外傾する。底部切り離し技法は回転糸切りである。

中世陶器

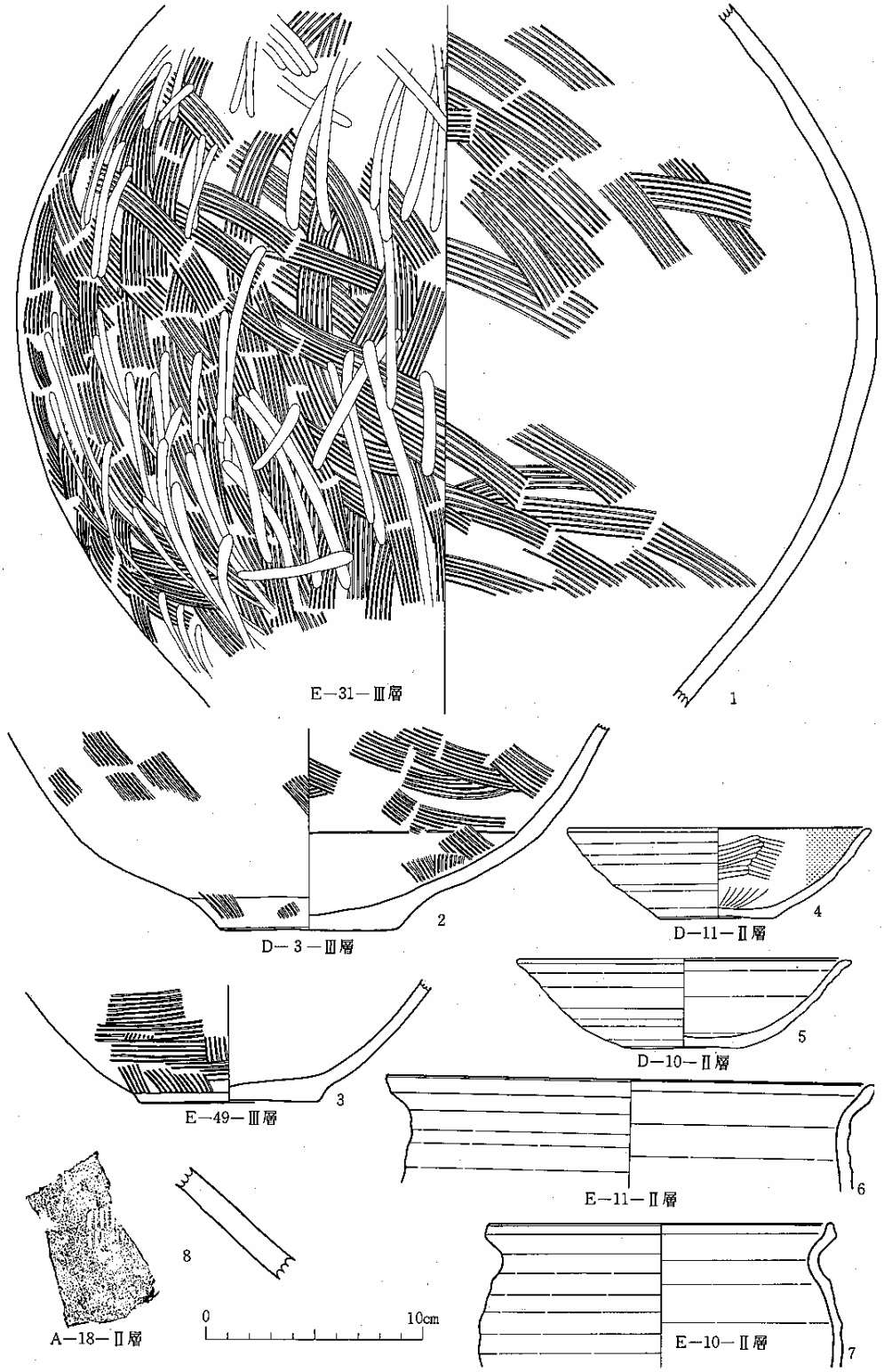
壺・甕類（第7図8）　１点だけ出土している。肩部の破片である。やや内傾する。簾状格子目の押印がみられる。

(2) 基本層位Ⅳ層出土遺物（第8・9図）

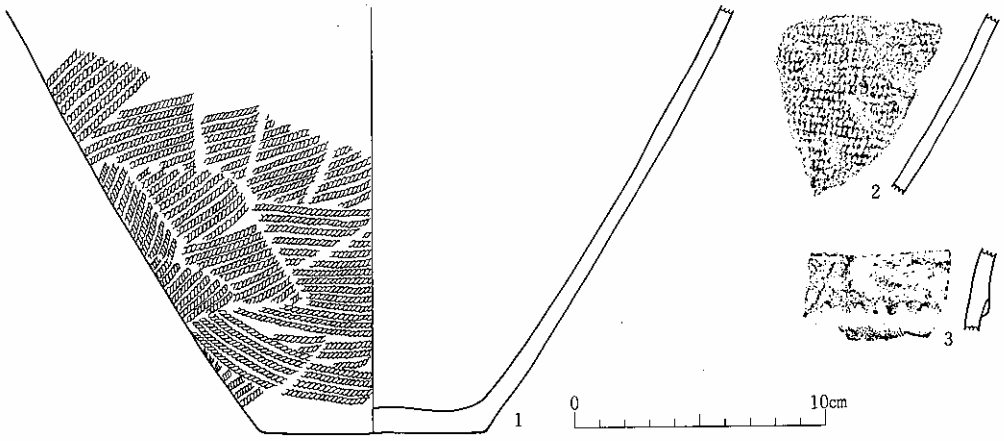
南側調査区Ｂ～Ｄ－15～22区、県道高館線をはさんで、北側調査区Ｄ～Ｅ－48～50区から出土している。出土層位は基本層位の第Ⅳ層にあたる。層はほぼ水平に堆積しており、層の厚さは最も厚い所で約30㎝である。出土遺物は弥生土器だけである。このことより、この面が当時の生活面である可能性がある。器種には壺と甕とがある。弥生土器は特にＣ－22区からまとまって出土しており、図示遺物中3点はこの区からの出土である。その他破片が18点出土している。

弥生土器

第9図1はほぼ完形の壺で最大径が体部上半にあり、器形は頸部でしまり、口縁部大きく外反する。底部は小さい。無文であり、器面は内外面とも平滑で、ヘラなどにより研磨が行なわれている。第9図5も壺で、口縁部と底部の一部を欠損している。胴部最大径は体部上半にあ



第7図　基本層位Ⅱ、Ⅲ層出土遺物

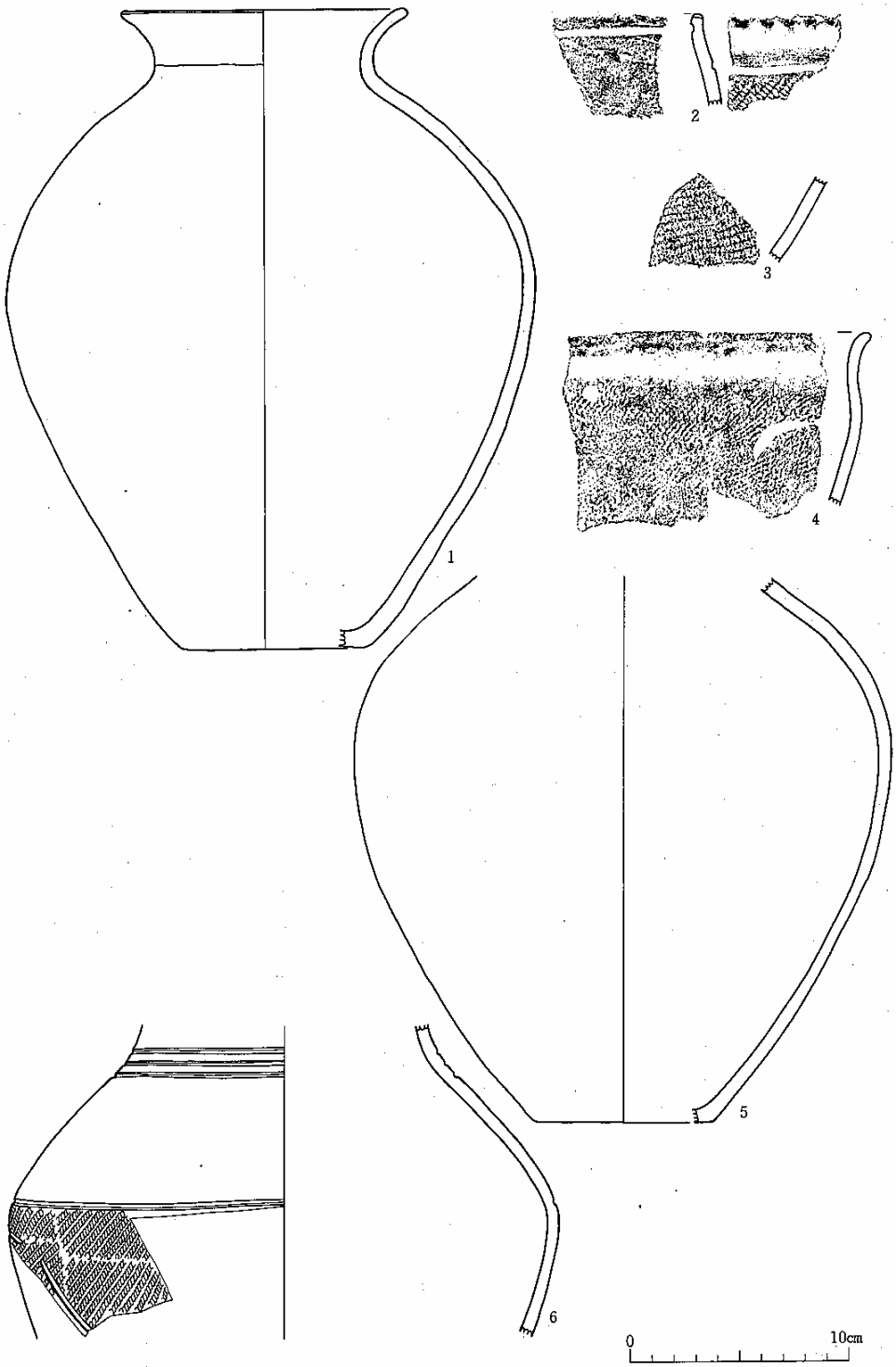


第８図　基本層位Ⅳ層出土遺物(1)

り、器形は頸部でしまるものと思われる。器面は内外面とも平滑で、ヘラなどにより研磨が行なわれている。第9図6も壺の体部破片である。上記の壺と比べると肩部のしまりが弱い。口縁部はゆるやかに外反するものと思われる。肩部に二条の太い沈線が平行に引かれており、それより下部に縄文（ＬＲ）が比較的雑に施文されている。沈線より上部や内面は平滑でヘラなどにより研磨が行なわれている。頸部にも三条の沈線が施文されている。第8図1は体部上半部が欠損しており器種は不明である。底部から体部にかけて直線的に外傾する。外面には縄文（ＬＲ）が比較的雑に施文されている。内面は平滑でヘラなどにより研磨が行なわれている。

第8図2、第9図2～4については小破片のため全体の器形、器種については不明である。第9図2は口縁部内湾する。口縁は小波状を呈する。一条の太い沈線がめぐり、沈線より上は研磨が行なわれ、下部には縄文（ＬＲ）が施文されている。内面にも太い沈線が一条施文されている。内面にはナデがみられる。第9図4は口縁部外反する。口唇部と体部に縄文（ＬＲ）が施文されている。さて、これらの特徴を有する土器は角田市鱸沼遺跡（志間：1971）からも出土しており大泉式に位置づけられている。

第8図3は磨耗が激しく、地文については不明だが、交互刺突文が施文されており、蔵王町大橋遺跡（藤沼：1971）出土の土器と類似しており天王山式に位置づけられるものと思われる。



第９図　基本層位Ⅳ層出土遺物(2)

2、方形周溝墓とその出土遺物

県道高館線の南側調査区ほぼ中央部、県道より約40m南の所で検出された。方形周溝墓は5本の溝と重複している。確認面は溝がすべて基本層位第Ⅱ層上面、方形周溝墓は第Ⅳ層上面である。なお、溝間には切り合いより1、8、3、4号溝→2号溝の新旧関係がみられる。

遺構は西側調査区外にも延びるものと思われるが、人家現存のため拡張不可能であった。このように今回発見の方形周溝墓は保存状態が悪い上に一部未調査部分もあり、特に3号溝によって半分近くが破壊されている東側周溝、5号溝によって破壊されている南側周溝付近、未調査の西側周溝半分については不明な点が多い。

(1) 方形周溝墓の形態と規模（第10図）

前述のように方形周溝墓は遺存状態があまり良好ではないが、周溝の隅が現存している西側周溝南端と北端の内側、また、溝によって切られてはいるが、周溝の位置関係からある程度推測可能な東側周溝南端と北端隅と、南側に張り出した二本の周溝から推定すると方形周溝墓の平面形は南北方向が長く隅がやや丸い長方形の部分と、南側周溝中央部付近から南方向に延びた東西二本の周溝の部分とからなり、全体的にみると前方後方形を呈している。周溝は台状部と張り出し部を形づくっているが、張り出し部東側、西側両周溝がどの程度延びるのか、及び、張り出し部南側にも周溝が存在するのかなどについては、これらの部分が5号溝によって切られているため不明である。周溝は内側は直線的であるが、外側は台状部北側周溝の形状より推測して、やや弧を描いた曲線と思われる。したがって、周溝は各周溝中央部があまり顕著ではないがわずかに膨らんだ、四隅がやや狭い形を呈している。

規模は周溝内側で台状部が南北約15.5m、東西12.2m、張り出し部が南北現存長約5m、東西長は台状部に近い方で約4.5m、南側の5号溝に切られている部分で現存長約7mである。周溝部も含めた全体の規模は南北長約24.5m（現存長）東西約18mである。

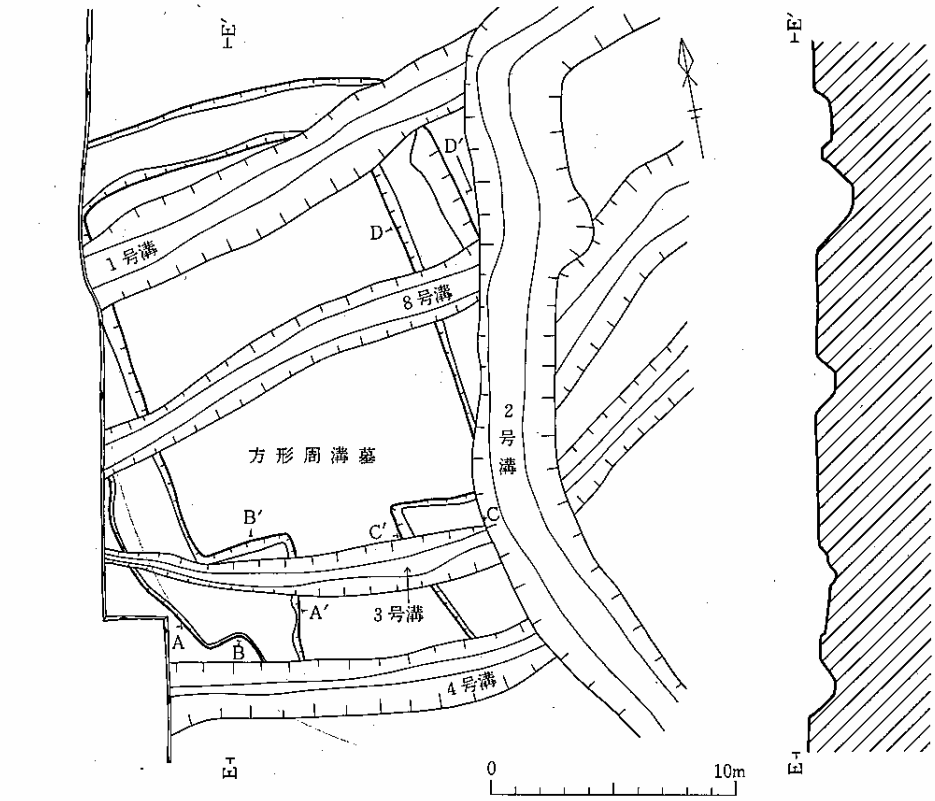
周溝の幅は台状部は北側周溝がやや細くて2m～2.2m、東側、西側周溝が2.8～3m、南側周溝が一番広く、約3.5mである。張り出し部は西側周溝が1.4～2.7m、東側周溝は不明である。

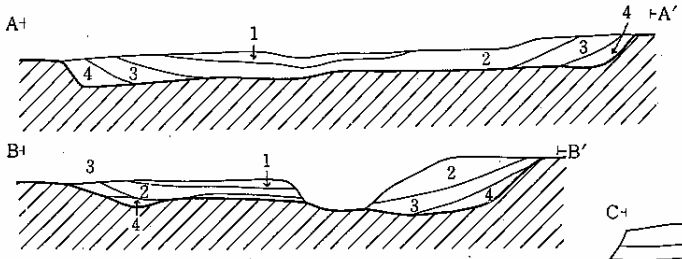
遺構確認面からの溝の深さは20～90cmである。台状部では南西から北東方向にかけて漸次20～90cmと深くなるが、北西隅だけが20～30cmと浅くなっている。張り出し部では北から南にかけて40～20cmと浅くなっている。全体的にみると台状部では深く、張り出し部では浅くなっているが、所々に浅い所もあり一様ではない。底面にテラス状の段がみられる所もある。

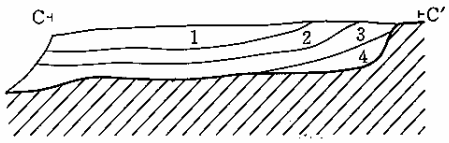
溝の壁面は台状部で周溝内側、外側とも約45°の角度でなだらかに立ち上がっている。

(2) 溝堆積土の状況

堆積土は台状部東側周溝においては8層、張り出し部東側周溝において4層、西側周溝において4層認められた。いずれも自然堆積状態を示している。台状部東側周溝についてみてみる

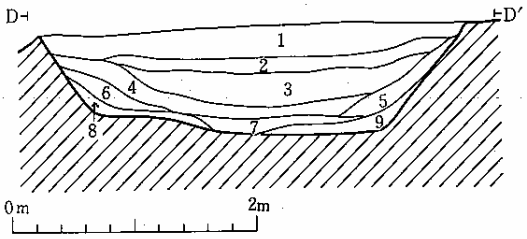






層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	シルト	鉄分を多く含む
第2層	2	褐色 (10YR 5/4)	シルト	-
第3層	3	褐色 (10YR 5/4)	シルト	鉄分を多く含む
第4層	4	褐色 (10YR 5/6)	シルト	鉄分を多く含む

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	褐色(10YR 5/4)	シルト	
第2層	2	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	シルト	
第3層	3	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	シルト	
第4層	4	黄褐色(2.5YR5/3)	シルト	



層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	オリーブ褐色 (2.5YR5/3)	シルト	底部穿孔土師器甕出土
第2層	2	褐色 (10YR 5/4)	シルト	
第3層	3	黄灰色 (2.5 Y 5/1)	シルト	
	4	黄灰色 (2.5 Y 5/1)	シルト	底部穿孔土師器甕出土
第4層	5	黄褐色 (10YR 5/6)	シルト	
第5層	6	灰黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	
第6層	7	褐灰色 (10YR 5/1)	シルト	
第7層	8	黄灰色 (2.5 Y 5/1)	シルト	
第8層	9	褐灰色 (10YR 5/1)	シルト	

第10図　方形周溝墓

と、堆積土はまず台状部内側から褐灰色土が、周溝外側から黄灰色土が壁面にそって流れ込み、中央の窪みに褐灰色土がほぼ平に堆積した。その後、台状部からは黄褐色土が周溝外側からは灰黄褐色土が壁面をすべるように順次流れ込み、その後、全体にわたって、黄灰色、褐色、オリーブ褐色土層がレンズ状に順次堆積している。張り出し部東側、西側周溝においても褐色やにぶい黄褐色土層が、それぞれの壁面から周溝の中心部に向かって順次堆積しており、土質、堆積状態において基本的に台状部のそれと違いは認められない。

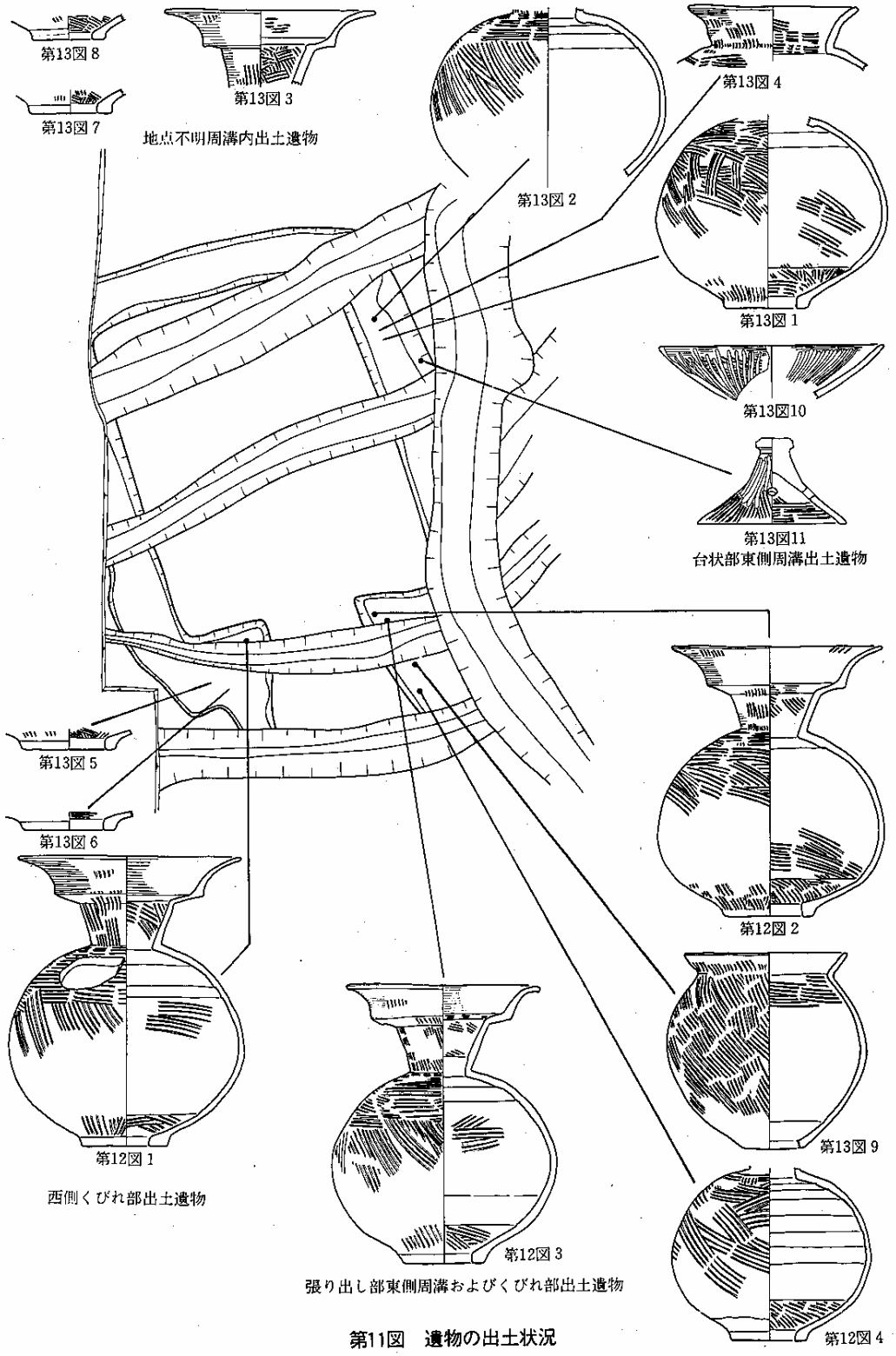
(3) 遺物の出土状況と出土遺物

遺物はすべて周溝内堆積土または底面から出土している。すべて土師器で、器種には壺、甕、高坏とがある。ここでは図示遺物を中心に記述する。

土師器

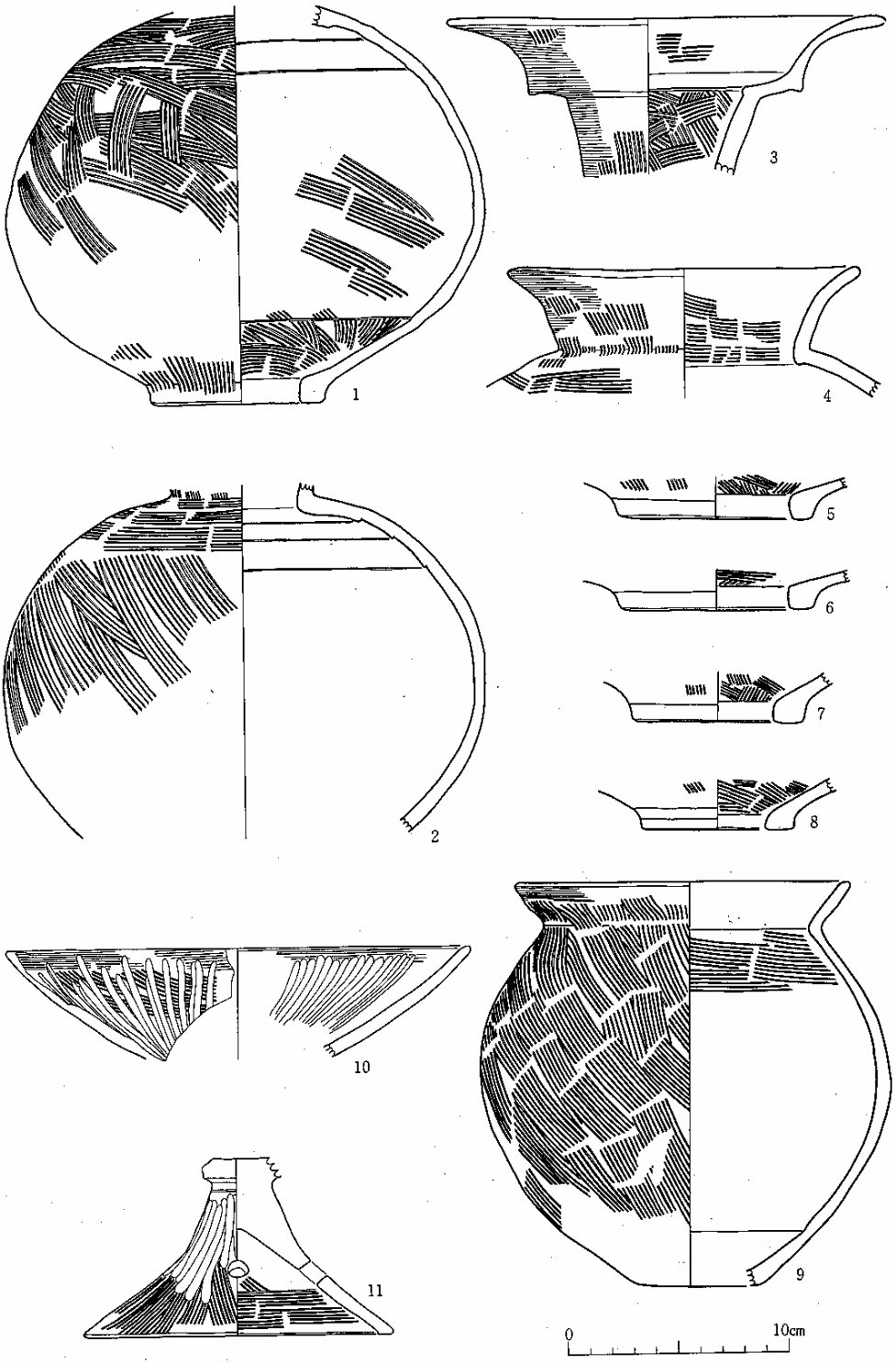
壺（第12図１）　西側くびれ部底面から出土している。くびれ部北壁から約80cmほど離れた所から口縁部を西に向け横位の状態で出土しており、底部がわずかに浮き上がっている。口縁部一部が欠損しているがほぼ完形の焼成前底部穿孔土器である。器高約27.5cm、口縁径約21.2cm底径約7.9cm、穿孔部径は約4.2cmである。口縁部は有段口縁で大きく外反する。体部は球形で、最大径は体部中央からわずかに下にあり、約22.1cmである。底部は穿孔部ややあげ底ぎみになっており、ここから体部との最初のつなぎ目まではゆるやかに外傾する。胎土は比較的緻密であり、小砂粒を含んでいる。焼成は良好である。器面調整は口縁部内外とも横ナデ、体部は外面が刷毛目のちナデ、内面が刷毛目である。刷毛目の方向は外面は頸部、体部中央部、底部付近が縦方向で、体部上半部が横方向である。内面は底部と体部との最初の接合部まで斜め方向の細かい刷毛目、のち体部と接合し、体部、頸部にも斜め方向の刷毛目調整が行なわれている。内面体部上半部には１～2cm幅の積み上げ痕が観察される。外面全部と口縁部内面に丹が塗られている。なお、体部上半部に6×4cmの方形の破損場所がある。これが人為的に行なわれたものかどうかは不明である。

（第12図2）　東側くびれ部から出土している。口縁部と体部が別々になり、口縁部は堆積土１層から、体部は堆積土3層から出土している。どちらも西壁のすぐ近くから出土している。１層から出土した口縁部はこわれていくつかの破片となっていたが、ほぼ複元可能であり3層から出土した体部はほぼ完形である。口縁部については出土状態は不明であるが体部は体部上半を斜め上方にむけ、底部がやや浮いた状態で出土している。ほぼ完形の焼成前底部穿孔土器である。器高約25.4cm、口縁径約19.5cm、底径約8cm、穿孔部径は約6cmである。口縁部は有段口縁で大きく外反する。体部は球形で、最大径は体部下半部にあり、約21.2cmである。底部は穿孔部ややあげ底ぎみになっており、ここから体部との最初のつなぎ目までゆるやかに外傾する。胎土は比較的緻密であり、小砂粒を含んでいる。焼成は良好である。器面調整は口縁部



第11図　遺物の出土状況

第12図　方形周溝墓出土遺物



第13図　方形周溝墓出土遺物

内外とも横ナデ、体部は外面が刷毛目のちナデ、内面が刷毛目である。刷毛目の方向は外面は底部と頸部が縦方向、体部上半部が横または斜め方向である。内面は底部と体部との最初の接合部まで斜め方向の細かい刷毛目、のち体部と接合し、体部、頸部にも斜め方向の刷毛目調整が行なわれている。内面体部上半部には幅約1cmの積み上げ痕が観察される。外面全部と口縁部内面に丹が塗られている。

（第12図3）　東側くびれ部堆積土１層中の西壁からやや離れた所から口縁部と体部が別々になり、わずかに離れて出土している。口縁部は口唇部を斜め上方にむけ斜位の状態で、体部は頸部をわずかに斜め上方にむけ、底部が半分浮いた状態で堆積土とほぼ同じ傾きで出土している。完形の焼成前底部穿孔土器である。器高約26.3cm、口縁径18.1cm、底部約7.5cm、穿孔部径は約5.2cmである。口縁部は有段口縁で外反する。体部は球形で、最大径は体部中央からわずかに下にあり、約21.1cmである。底部は穿孔部ややあげ底ぎみになっており、ここから体部との最初のつなぎ目まではゆるやかに外傾する。胎土は比較的緻密であり、小砂粒を含んでいる。焼成は良好である。器面調整は口縁部内外とも横ナデ、体部は外面が刷毛目のち体部下半ナデ、内面が刷毛目である。刷毛目の方向は外面底部、頸部、体部中央部が縦方向、体部上半部が横方向である。内面は底部と体部との最初の接合部まで斜め方向の細かい刷毛目、のち体部と接合し体部には横および斜め方向、頸部には斜め方向に刷毛目調整が行なわれている。体部上半部内面には幅1～1.3cmの積み上げ痕が観察される。外面全部と口縁部内面に丹が塗られている。

（第12図4）　張り出し部東側周溝堆積土3層中南側からほぼ周溝西壁と接して、底部は、斜め上方を向き、やや倒立に近い状態で出土している。口縁部が欠損している。焼成前底部穿孔土器である。底径約7cm、穿孔部径は約4.8cmである。体部は球形で体部最大径は体部下半部にあり、約19cmである。底部は穿孔部ややあげ底ぎみになっており、ここから体部との最初のつなぎ目まではゆるやかに外傾する。胎土は比較的緻密であり、小砂粒を含んでいる。器面調整は体部外面が刷毛目のちナデ、内面刷毛目である。刷毛目の方向は外面体部上半部が横または斜め方向である。内面は底部と体部との最初の接合部まで斜め方向の細かい刷毛目、のち体部と接合し、体部に斜め方向の刷毛目がみられる。外面には丹が塗られている。

（第13図1）　台状部東側周溝北側の西壁近く堆積土１層中から出土している。出土状態については不明である。口縁部を欠損した体部の破片である。焼成前底部穿孔土器である。底径約7cm、穿孔部径は約4.8cmである。体部は球形で体部最大径は体部下半部にあり、約21.6cmである。底部は穿孔部ややあげ底ぎみになっており、ここから体部との最初のつなぎ目まではゆるやかに外傾する。胎土は比較的緻密であり、小砂粒を含んでいる。焼成は良好である。器面調整は体部外面が刷毛目のちナデ、内面刷毛目である。刷毛目の方向は外面上半部が横または斜

め方向である。内面は底部と体部との最初の接合部まで斜め方向の細かい刷毛目、のち体部と接合し、体部に斜め方向の刷毛目がみられる。外面には丹が塗られている。

（第13図2）　台状部東側周溝中央部西壁下堆積土4層中から、体部上半を東壁にむけて横位の状態で出土している。口縁部、底部と体部半分以上で欠損している。焼成前底部穿孔土器である。体部は球形で体部最大径は体部ほぼ中央部にあり、約21.9㎝である。胎土は比較的緻密であり、小砂粒を含んでいる。焼成は良好である。器面調整は体部外面が刷毛目のちナデ、内面刷毛目である。刷毛目の方向は外面頸部近くが横、その他が斜め方向である。内面も斜め方向である。外面には丹が塗られている。

（第13図3）　台状部周溝内堆積土1層中から出土している。出土状態は不明である。体部を欠損した口縁部破片である。焼成前底部穿孔土器と思われる。口縁部径約19.6㎝である。口縁部は有段口縁で外反する。器面調整は外面が口縁部横ナデ、頸部横ナデのち一部刷毛目、内面は刷毛目である。器面に黒色の斑点が多数みられる。内外面丹塗りである。

（第13図5～8）　5、6は西くびれ部から出土している。6は堆積土１層中からの出土であり、5は出土層位不明である。7、8は台状部周溝内から出土している。7は堆積土4層中からの出土であり、8は出土層位不明である。いずれも出土状態については不明である。いずれも底部破片で底部穿孔されている。底径は推定で6.7～8.6㎝、穿孔部径は4.4～7㎝である。底部はやや上げ底ぎみになっており、体部にかけてゆるやかに外傾する。調整は内外面とも刷毛目である。

甕

（第13図9）　張り出し部東側周溝西壁中央付近から約1m離れた底面から出土した。出土時においてはこわれていくつかの破片となっていたが、散乱しておらずまとまっており底部の一部を欠損しているだけで、ほぼ完形である。器高約18.5㎝、口縁部径約15.2㎝、底径約5.8㎝である。口縁は単純口縁で外傾する。体部は球形で、最大径は体部中央部にあり約18.5㎝である。器面調整は口縁部内外とも横ナデ、体部内外とも刷毛目である。

（第13図4）　台状部東側周溝から出土している。出土層位、出土状態については不明である。口縁部破片である。口縁径約16㎝である。単純口縁で頸部でくびれて口縁部で外反する。調整は外面横ナデ、一部に刷毛目がみられる。内面刷毛目である。

高坏

（第13図10、11）　台状部東側周溝中央付近堆積土4層中からはほぼ東壁に接して出土している。溝中央部にむかって傾斜している堆積土にそって脚部が壁に近い方から坏部がその斜め下から出土している。坏部破片と脚部破片とがあり、同一場所から出土している。10は坏部破片である。体部から口縁部にかけてゆるやかに外傾する。調整は内外面とも縦方向のヘラミガキ

が入念に施され、口縁部には前段階の調整である横ナデが残っている。11は脚部破片である。脚部柱状部が直立ぎみ裾部はやや外に開いている。器面調整は、外面は裾部が縦方向の刷毛目、柱状部から裾部付近にかけてが縦位のヘラミガキである。内面は横方向の刷毛目がみられる。脚部には孔を有する。

第１表　周溝内出土図示遺物一覧表

（単位はcm）

No	器種	出土場所	出土層位	出土部位	出土状態	器高	口縁径	底径	最大径	穿孔径	備考	図版番号
1	壺	西側くびれ部	底面	ほぼ完形	横位	27.5	21.2	7.9	22.1	4.2	口縁部一部欠損	第12図 1
2	壺	西側くびれ部	堆積土１層	底部穿孔部破片	不明					7.0	器面調整外面に荒い刷毛目	第13図 6
3	壺	西側くびれ部	不明	底部穿孔部破片	不明					6.6		第13図 5
4	壺	東側くびれ部	堆積土１層	完形	斜位	26.3	18.1	7.5	21.1	5.2		第12図 3
5	壺	東側くびれ部	口縁部堆積土１層 体部　堆積土３層	ほぼ完形	斜位	25.4	19.5	8.0	21.2	6.0	口縁部一部欠損	第12図 2
6	壺	張り出し部東側周溝	堆積土３層	体部	斜位			7.0	19.0	4.8	口縁部欠損	第12図 4
7	壺	台状部東側周溝	堆積土１層	体部	不明			7.0	21.6	4.8	口縁部欠損	第13図 1
8	壺	台状部東側周溝	堆積土４層	体部破片	横位				21.9		口縁部全部、体部半部欠損	第13図 2
9	壺	周溝内（台状部）	堆積土１層	口縁部破片	不明		19.6				体部欠損	第13図 3
10	壺	周溝内（台状部）	堆積土４層	底部穿孔部破片	不明					5.0		第13図 7
11	壺	周溝内（台状部）	不明	底部穿孔部破片	不明					4.4		第13図 8
12	甕	張り出し部東側周溝	底面	ほぼ完形	不明	18.5	15.2	5.8	18.5			第13図 9
13	甕	台状部東側周溝	不明	口縁部破片	不明		16.0				体部欠損	第13図 4
14	高坏	台状部東側周溝	堆積土４層	坏部破片、脚部破片	斜位		21.1					第13図10、11

3、古墳石室とその出土遺物

（1）石室の構造と規模（第15図）

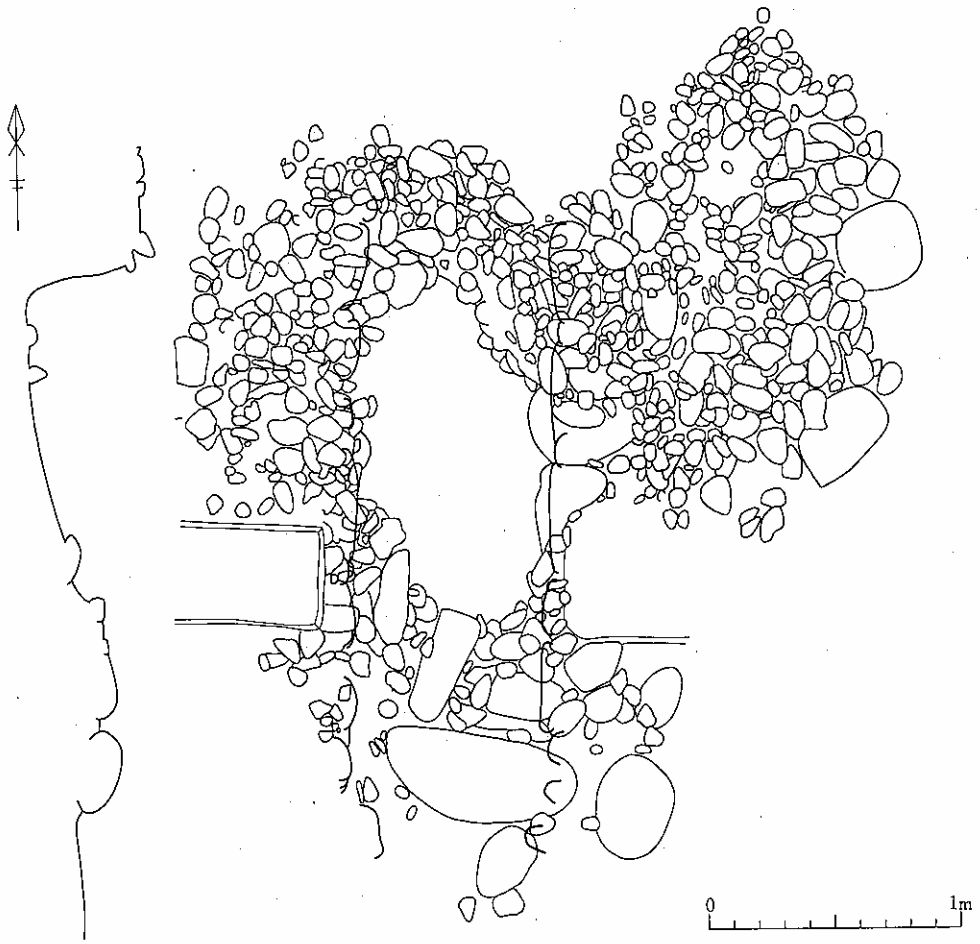
表土下20～30cmから石室が検出された。

石室の平面形は南北に長い長方形である。

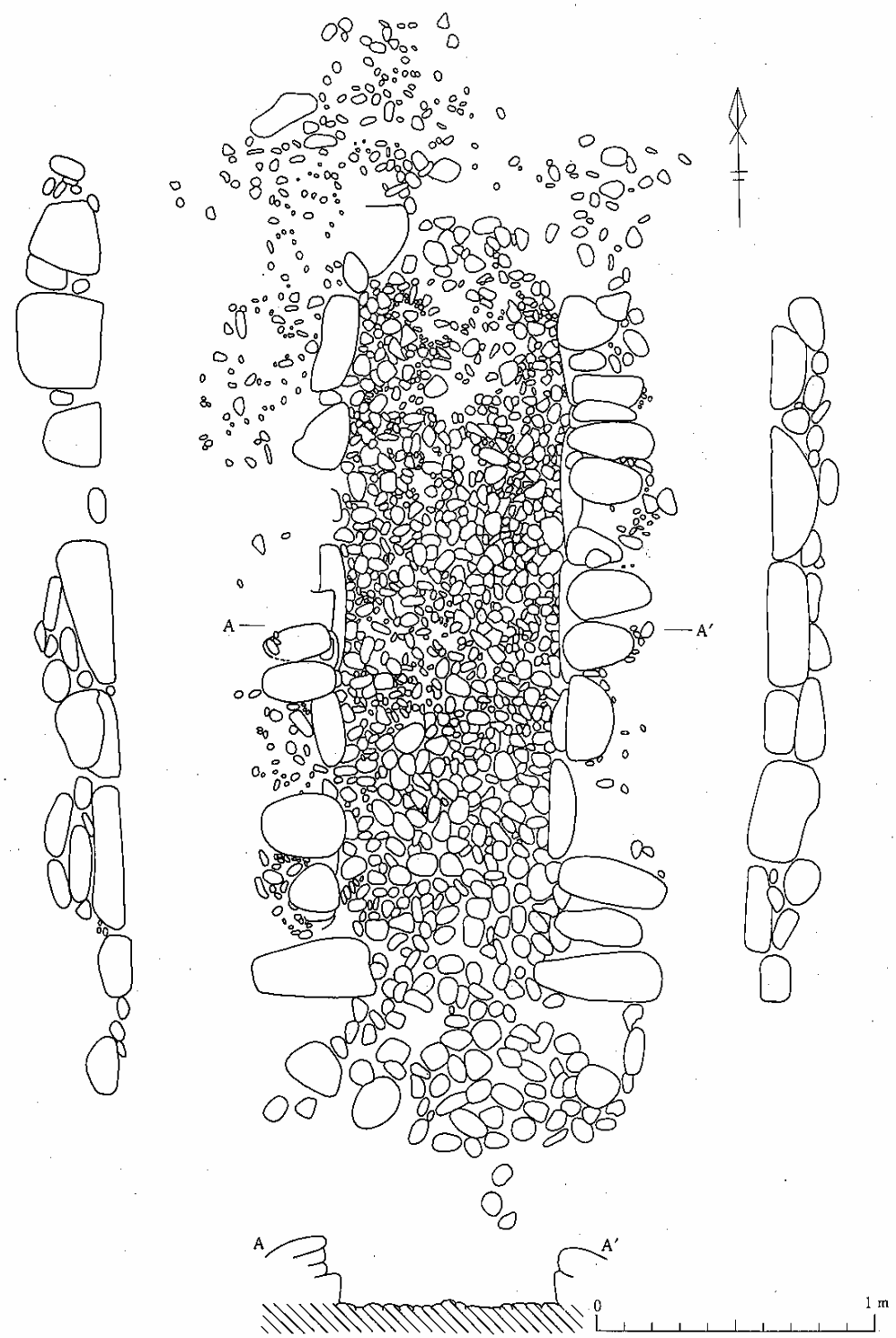
側壁の積石は三段のところもあるが、ほぼ二段にわたってみられ、河原石を横み上げている。側壁、外側部分には、裏ごめ石がみられ10～15cm大の比較的小さな河原石がつめこまれている。奥壁は残っていない。

床面には10～15cm大の比較的丸みをもった小石が敷きつめてある。その上面に、微量の炭化物と焼土がみられた。

側壁積石の積み方をみてみると、最下段に大きい石を一段積んで、その上は小石積で、その上に15～30cmの石を積んでいる。



第14図　石室上面積石



第15図　古墳石室

側壁南端には細長く他の側壁の石よりは大きめの石が横に置かれ、しかも、その先端は両壁石列よりも内側に7～11cm突き出ている。また、この石の南側には積石はみあたらない。したがって、石室は形態的には南に開く横穴式石室の形をとっているものと思われる。

なお、石室南端付近の側石上面より約77×33cmの平面規模をもつ河原石が検出されているが大きさ、出土状況等よりこの石は天井石として使用されたものと思われる。石室外の東側には底面に敷きつめられた石よりは少し大きめの小石が長さ約2m、幅1.1mにわたって散乱していた。（第14図）

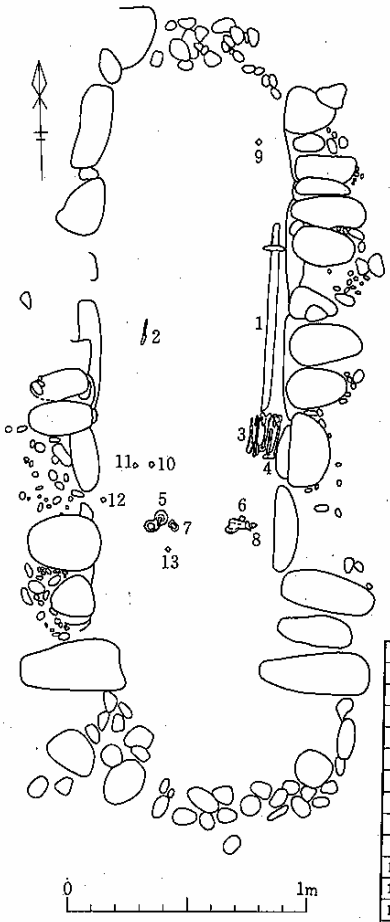
石室の規模は南北方向の長さが北側の床面の石から南端の突き出ている石の外側までで約2.4mあり、東西方向の幅が側壁間の最大幅で約75cmある。石室の軸方向はN－1°－Wである。

側壁の積石の高さは二段合わせて最大で約30cmである。（このことより上部に上積石がさらに数段存在したと考えられるが、すでに上部が破壊されており、その状況については不明である。）側壁に用いられている河原石は長さ35～20cm、幅20～10cm、厚さ20～10cm程度の石で、側壁両南端の川原石は45～40cmと比較的大きい。

(2) 出土遺物とその出土状況

（第16、17、18図）

出土遺物はすべて鉄製品で、武器として、直刀、刀子、鉄鏃が、馬具として轡（くつわ）一式、鞍（しおで）、鉸具（かこ）、飾金具（かざり）、飾帯金具（しょくたい）がある。そのほとんどが石室内床面直上から出土している。特に石室南端中央部付近と東側側石中央部付近から集中して出土しており、奥壁付近からは出土していない。石室南端中央部付近から出土した遺物には鞍2、鉸具2、飾金具2、飾帯金具3とがある。鞍と鉸具は側石南端から石室内約60cm、東西の側石からそれぞれ15～20cm離れたところから2つずつ並んで出土し、そこから約15cm南中央部からは、飾金具1と飾帯金具3が出土している。また、西側にある鉸具類の北西方向からは、飾帯金具が3枚



No	名称	実測図番号
1	直刀	第17図1
2	刀子	第17図2
3	鉄鏃	第17図3～29
4	轡	第18図1
5	鞍	第18図2
6	鞍	第18図3
7	鉸具	第18図4
8	飾金具	第18図6
9	飾帯金具	第18図11
10	飾帯金具	第18図8
11	飾帯金具	第18図9
12	飾帯金具	第18図12
13	飾帯金具	第18図13

第16図　古墳石室遺物出土状況

散らばって出土している。東側側石中央部付近から出土した遺物には直刀、鉄鏃、刀子、轡がある。直刀は奥壁から90～170cmのところから出土している。把(つか)を北にし、側石と平行に南北方向におかれてあった。直刀の鋒(きっさき)の付近には、鉄鏃十数本と轡一式がやはり、南北方向にきちんと並べておかれており、直刀の反対側、側石の近くからは刀子が出土している。なお、石室周辺埋土中からは土師器片が数点出土しているが、石室床面からの土器の出土はなかった。

イ．武器（（第17図）

出土した武器には直刀一口、刀子一口、鉄鏃27点とがある。

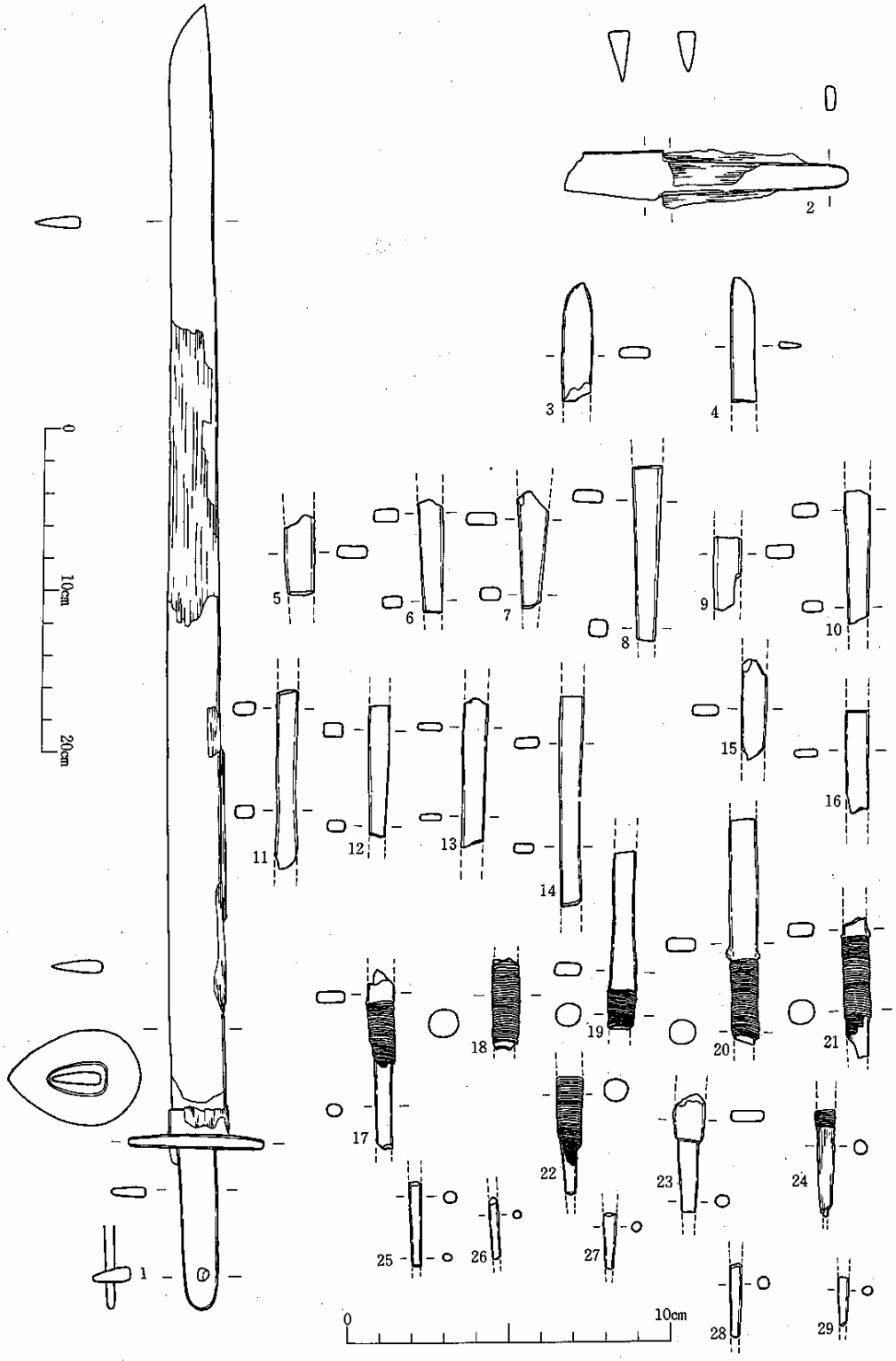
直刀（第17図1）　一口出土している。銹化が著しいが、茎と刀身はほぼ遺存している平造り、平背、直身の鉄直刀である。把や鞘はすでに大部分が失なわれており、茎や刀身の一部に木質部がわずかにみられる程度である。全長約80.6cm、刀身は長さ約67.8cm、身幅約3.2cm、背幅約0.8cmで、その断面形は三角形である。茎の長さは不明であるが、幅2.3cmで、その断面形は一方の幅がやや狭い長方形である。茎には把と思われる木質部が刀身との境付近にみられ、約1.6cm奥まった所に倒卵形の鍔(つば)がつけられている。鍔の大きさは8.2×6cm、厚さは約0.8cmである。鍔には窓はみられない。刀身と鍔の間には把を巻いて長さ約1.6cmの鋤(はばき)が付けられている。鋤の上部にはわずかに鞘(さや)と思われる木質部がみられる。なお、茎と刀身の間は両関となっているものと思われる。

刀子（第17図2）　1口出土している。刃部先端部が欠損している。茎はほぼ遺存しており、茎の部分に木質部が付着している。現存長約8.8cm、刃部は現存長約3cm、身幅は最大で約1.5cm、背幅は約0.6cmである。平面形は先端部にむかってしだいに細くなっており、断面形は三角形である。茎は完全な形で遺存しており、長さ約5.7cm、幅は1～0.7cmで、端部にむかってわずかに細くなっている。断面形は刃部に近い方が三角形、端部では角の丸い長方形である。刃部と茎との境は両関(まち)となっている。

鉄鏃（第17図３～29）　銹化が激しく、ほとんどがいくつにも折れている。破片数では27点出土しているが、実際の個体数は破損状況等により十数本前後と思われる。全部が長頸尖根式のものであり、平根式は含まれていない。鏃身の部分が14点あり、うち2点が鏃身先端部である。

（鏃身先端部）　4は刀身形と思われる。3は銹化が激しく剣形になるか刀身形になるのかは不明である。断面形は4が三角形と思われる。3は現状では角の丸い長方形を呈するが、銹化が激しく不明である。

（鏃身）（第17図5～16）　平面形が棒状のものと鏃身先端にむかって身幅が広くなるものとがある。断面形はすべて角のいくぶん丸まった長方形である。身幅は5～9mm、断面幅は3～4mmである。



第17図　石室出土遺物（武器）

第２表　鉄鏃計測表

（単位cm）

No	図版番号	部　位	残存表	身(径)幅	断面幅(厚さ)	断面形	備考
1	第17図 4	鏃身先端部	3.8	0.75	0.2	三角形	刀身形
2	〃 3	〃	3.6	1.0	0.4	不明	
3	〃 16	鏃身のみ	3.1	0.7	0.3	角の丸い長方形	
4	〃 15	〃	3.1	0.8	0.35	〃	
5	〃 13	〃	4.5	0.8	0.28	〃	
6	〃 14	〃	6.4	0.7	0.35	〃	
7	〃 11	〃	5.5	0.7	0.42	〃	
8	〃 10	〃	4.2	0.8	0.4	〃	
9	〃 7	〃	3.7	0.55～1.0	0.4	〃	先端にむかって身幅が広くなる
10	〃 12	〃	4.1	0.6	0.5	〃	
11	〃 6	〃	3.5	0.8	0.45	〃	
12	〃 8	〃	5.3	0.55～1.0	0.45	〃	先端にむかって身幅が広くなる
13	〃 9	〃	2.2	0.8	0.4	〃	
14	〃 5	〃	2.5	0.95	0.4	〃	
15	〃 18	箆代(と鏃身)	2.7	0.85	0.85	ほぼ円形	葛糸巻
16	〃 20	〃	7.0	0.81	0.81	〃	〃
17	〃 17	〃	5.4	0.55	0.55	〃	〃
18	〃 21	〃	4.3	0.8	0.8	〃	〃
19	〃 19	〃	5.5	0.82	0.82	〃	〃
20	〃 22	〃	3.7	0.85	0.85	〃	〃
21	〃 24	〃	3.3	0.51	0.51	〃	〃
22	〃 23	〃	3.6	0.5～0.7	0.5～0.7	〃	
23	〃 26	箆代末端部	1.9	0.3	0.3	〃	
24	〃 29	〃	1.5	0.35	0.35	〃	
25	〃 27	〃	1.5	0.4	0.4	〃	
26	〃 28	〃	2.2	0.35	0.35	〃	
27	〃 25	〃	2.6	0.4	0.4	〃	

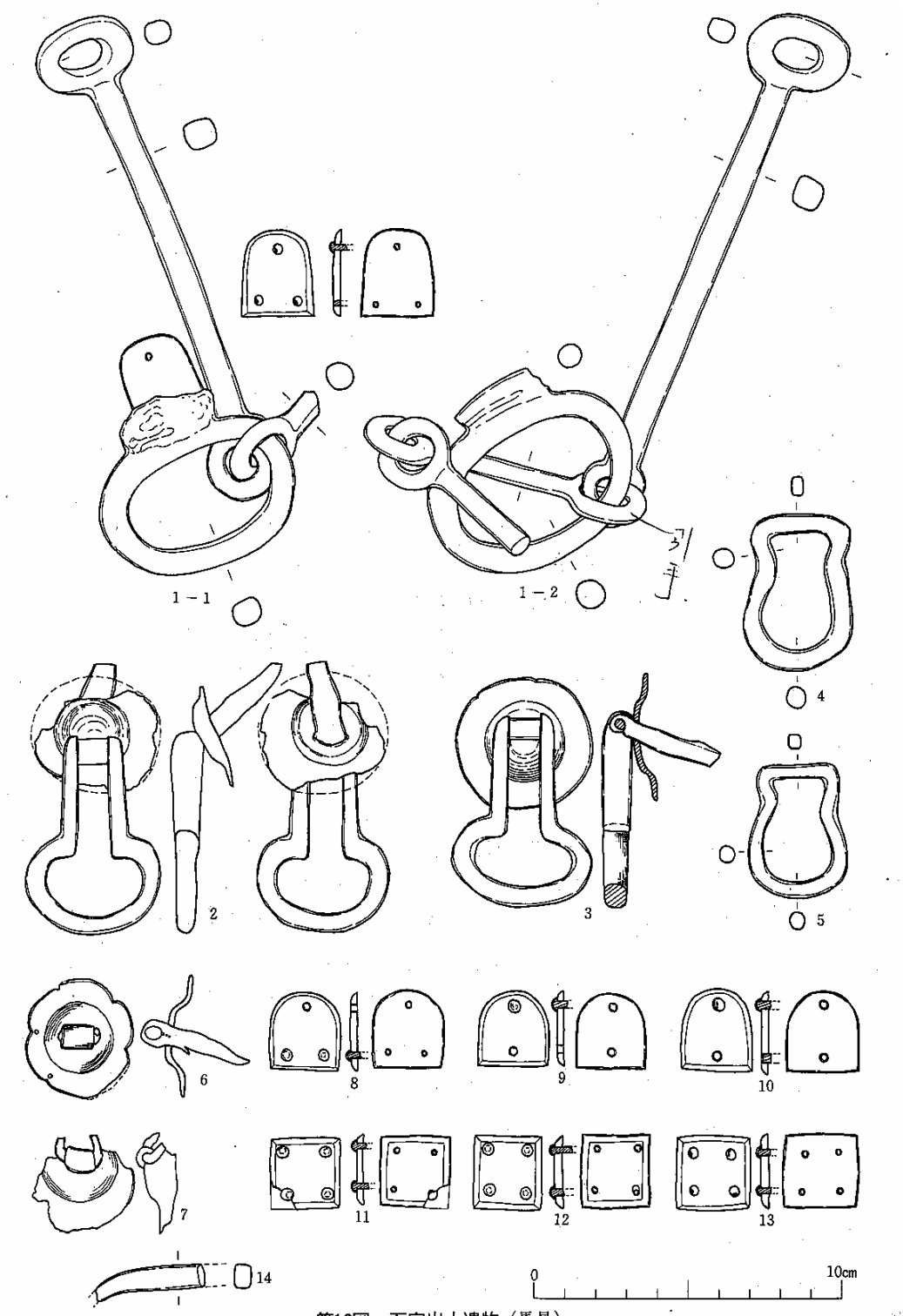
（箆代）（第17図17～29）　13点あり、うち5点が末端部である。鏃身との境には両関があり、箆代には葛糸巻がみられる。鉄芯の断面形はほぼ円形で、末端にいくにしたがって細くなっている。

ロ、馬具（第18図）

出土した馬具には轡一式、鞍2、鉸具2、飾金具2、飾帯金具7とがある。

轡（第18図１）　腐蝕のため石室床面に密着した状態で出土した。銹化が激しく、数ヵ所にわたり折れているが、ほぼ原形をとどめている。鉄製で、鏡板と銜と引手からなる。

鏡板は環状のもので長径約7cm、短径約5cmの楕円形である。環の断面はほぼ円形である。環の外側には立聞がついている。立聞は一部欠損しており、残存部も腐蝕が激しいが、立聞の中央付近には長方形の孔が有るものと思われる。1－1は立聞上部に飾帯金具が付着している。ドーム形で単独で出土した他の同形金具より一まわり大きい。鉄製地に銅を張ったもので、笠鋲が三本用いられている。面繋と結ぶ革製品をここでとめていたものと思われる。なお、立聞の残存長は1－1が約2.2cm、1－2が約1.9cmで、比較的保存の良い1－2で厚さ約5.5mmであ



第18図　石室出土遺物（馬具）

る。銜は二連のものである。両端に径約3.1cmの円形の銜先があり、銜先を含めた長さは約9cmである。これを二連にすると、鏡板間の長さは約16.2cmになる。断面形は環および棒状部もほぼ円形である。

引手は両端に壺がついており、壺を含めた引手の長さは約16.6cmである。壺の平面形は鏡板と連結している方が円形（径2.5、2.8cm）で、手綱に近い方は楕円形（長径約3.3cm、短径約2.9cm）である。断面形は棒状部がほぼ方形（一辺約1.1cm）、壺が円形（径約１cm）である。手綱に近い方の壺は棒状部に対して約40°外側に傾いている。

なお、1－1は立聞の部分に残存長約1.8cmの鉄鏃の破片が付着していた。

鞍（第18図2、3）　鞍につけられた鞍と思われる。2点だけ出土している。ほぼ同形同大である。革帯を通す環状の部分は楕円形で笠鋲と接続している部分は直線になっている。笠鋲は笠の直径が約4.2cmで、鋲の残存長は約3.6cmである。この部分を鞍の前輪または後輪に打ちつけたものと思われる。3の断面図は笠鋲との取りつけ方を示したものだが、これによると、笠鋲は頭部で径約3mmの鉄芯を巻きつけている。この鉄芯は両側にわずかにとび出しており、笠鋲と接続する直線の両内側端部にある小孔にはめこまれている。

鈴具（第18図4、5）　引手と手綱との接続部に用いられた引手壺とも思われるが、用途については不明である。2点出土しており、同形だが大きさは違っている。一端は楕円形を呈し、他端は直線になっている。直線に近い方の両側が内側にくびれている。規模は大きい方が長軸約5.1cm、短軸最大長約3.5cm、くびれ部約2.9cmである。小さい方が長軸約4.3cm、短軸最大長約3.2cm、くびれ部約2.5cmである。断面形はいずれも楕円形の部分は円形、直線の部分は方形である。

飾金具（第18図6、7）　鞍等に打ちつけられた金具と思われる。2点出土している。笠の部分の腐蝕が激しいが、同形同大のものと思われる。笠銑の端部は花弁状に六ヵ所でくびれており、くびれと対応する位置に小孔が穿たれている。鋲の現存状は約3.7cmで、先端部は細くなっている。頭部で銅整のリング状のものを包み、割りピン状に折りまげている。

飾革金具（第18図8～13）　面繋、胸繋、尻繋などの飾帯に用いられた革紐の上や端に装着されたものである。7点出土している。すべて鉄地銅張りである。形は方形とドーム形とがある。大きさはそれぞれ少しずつ違っている。方形のものには笠銑が4本用いられているが、ドーム形のものは2本と3本のものとがある。笠鋲の頭部には鉄地に銀をかぶせている。規模は方形のものが一辺2.3～2.5cm、ドーム形の方は長軸2.5～2.8cm、短軸2.2～2.4cmである。笠鋲頭部直径は3～4mmである。

ハ、不明鉄製品

（第18図14）　断面長方形の棒状の鉄製品である。一端が弓なりになっている。残存長約3.7cm、

幅約７㎜である。

4、竪穴住居跡とその出土遺物

第1号住居跡（第19図）

〔遺構の確認〕調査区西側、基本層序第Ⅲ層上面にて確認された。

〔重複・増改築〕第5号溝によって切られている。

〔平面形・規模〕住居跡の北壁全部と南壁一部が溝により失なわれているが、残存する壁の状況から平面形は方形を基調とするものと考えられる。東西長は約4.5mである。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕8層認められた。土性からは砂質シルト（第1層）粘土質シルト（第2～6層）シルト（7７、8層）の3層に分かれる。すべての層に小量の炭化物がみられる。焼土を含んでいる層もある。自然堆積状態を示している。

〔壁〕北壁全部と南壁一部が失なわれている。東、南、西壁とも比較的緩やかに立ち上がる。残存壁高は約30㎝である。

〔床面〕床面はほぼ平坦である。掘り方がみられ、厚さは10～20㎝で掘り方底面は凹凸がみられる。

〔柱穴〕住居跡内から5個のピットが検出されている。ピットは1、4、5は貼り床上面で、ピット2、3は貼り床下で検出されたものである。ピット3は柱痕がみられるが、位置関係が不規則であることから、本住居跡の主柱穴かどうかは不明である。

〔周溝〕認められない。

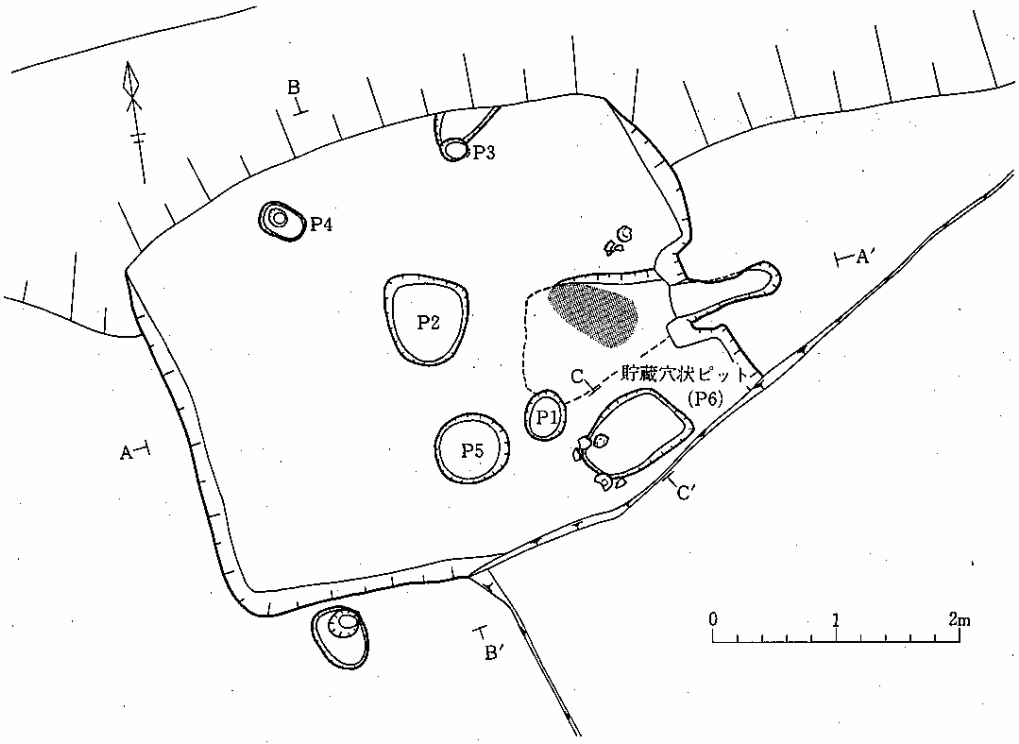
〔カマド〕東壁に付設されている。燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部の天井はすでに崩落しており、両側壁も大部分が失なわれている。燃焼部両側壁は、地山を削り出して構築されている。底面は燃焼部奥壁から前方にわずかに傾斜している。底面には焼面と炭化物の広がり80×150㎝がみられる。煙道は燃焼部底面から約21㎝高くなっており、残存形状は溝状になっている。幅約20㎝、長さ約80㎝であり、底面はほぼ水平である。

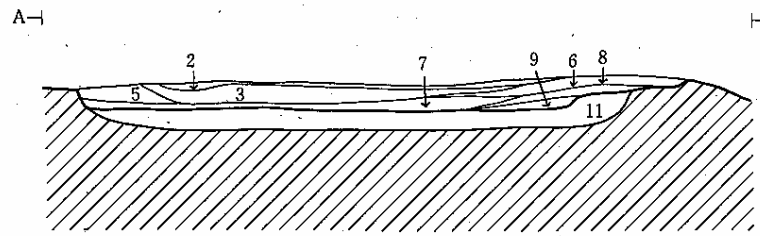
〔貯蔵穴状ピット〕住居跡南東隅、カマド右脇において検出された。平面形は長楕円形で、規模は80×60㎝で深さ約25㎝である。堆積土中2層から、土師器坏がまとまって数点出土している。

〔出土遺物〕本住居跡に伴う遺物としては、床面、貯蔵穴状ピット内出土の土器がある。

土師器

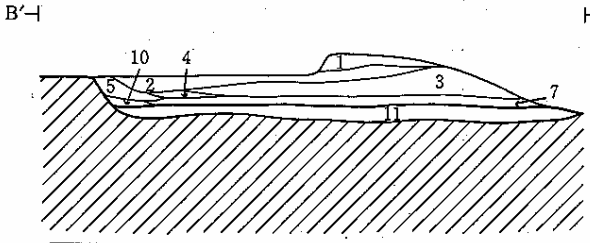
坏（第20図１～8）　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部から口縁にかけて丸みをもって外傾するもの（1～7）ほぼ直線的に外傾するもの（8）とがある。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が施こされている。底部切り離し技法は回転糸切りによるもので、再

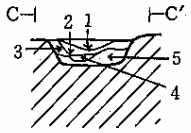




第１号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6
深さ(cm)	14	10	29	22	15	25





層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
第1層	1	黒褐色(7.5YR3/2)	砂質シルト	炭化物、褐色シルト粒を含む。	第1層
第2層	2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	焼土を少量含む。炭化物が下の層に多量に含む。	第2層
第3層	3	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物を含む。グライ化している。	第3層
第4層	4	褐色(7.5YR3/4)	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む。	
第5層	5	褐色(7.5YR3/4)	粘土質シルト	炭化物を少量含む。	
第6層	6	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物、焼土、褐色シルト粒を多量に含む。	
第7層	7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む。	第4層
第8層	8	黄褐色(6YR5/6)	シルト	にぶい黄褐色シルト粒、炭化物を含む。	
カマド内	9	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む。	
堆積土	10	極暗赤褐色(5YR2/3)	シルト	炭化物、焼土、明褐色シルト粒を多量に含む。	
貼り床	11	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物、焼土を含む。	

層No	土色	土性
1	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト
2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘土質シルト
3	明黄褐色(10YR6/6)	粘土質シルト
4	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘土質シルト
5	灰黄褐色(10YR6/2)	粘土質シルト

第19図　第１号住居跡出土遺物

調整は施こされていない。なお、８は底部を欠損しており底部切り離し技法は不明である。

須恵器

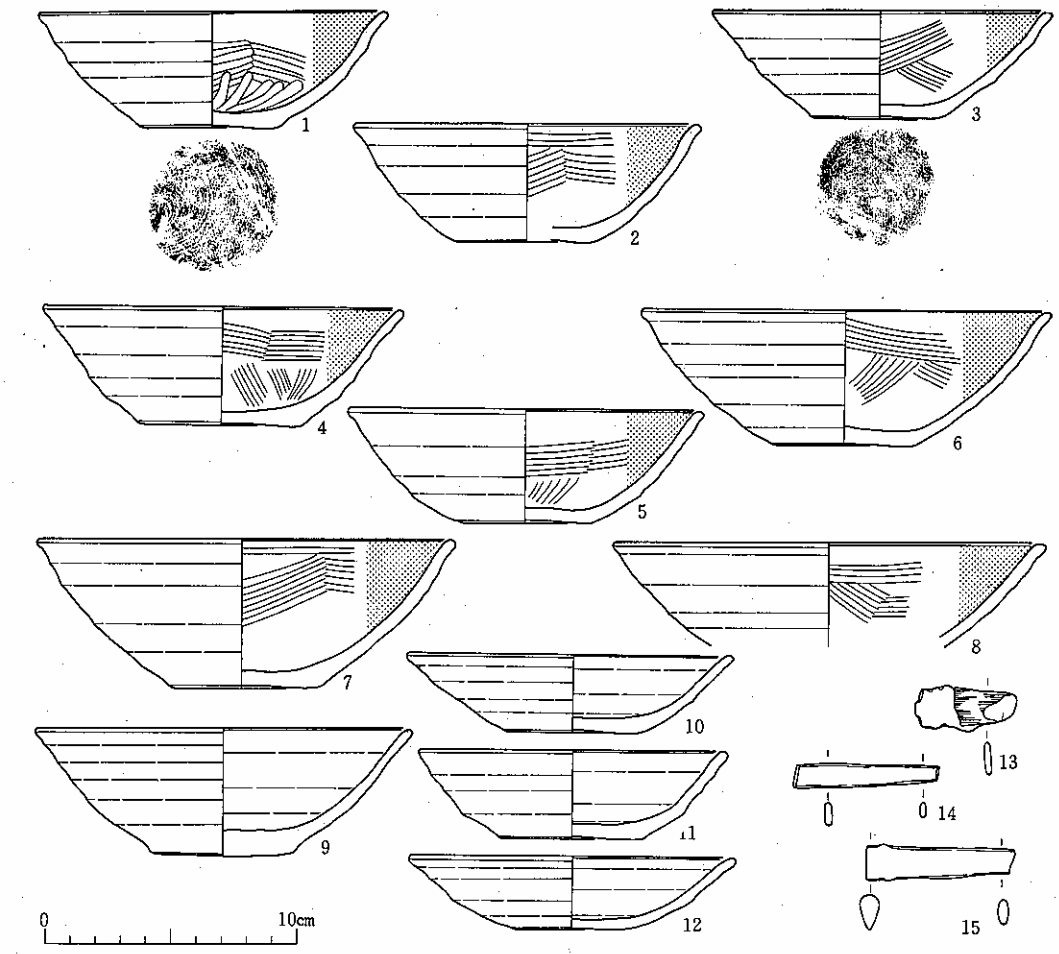
坏（第20図9）　底部から口縁部にかけて、わずかに丸味を持って外傾する。底部切り離し技法は、回転糸切りである。

赤焼土器

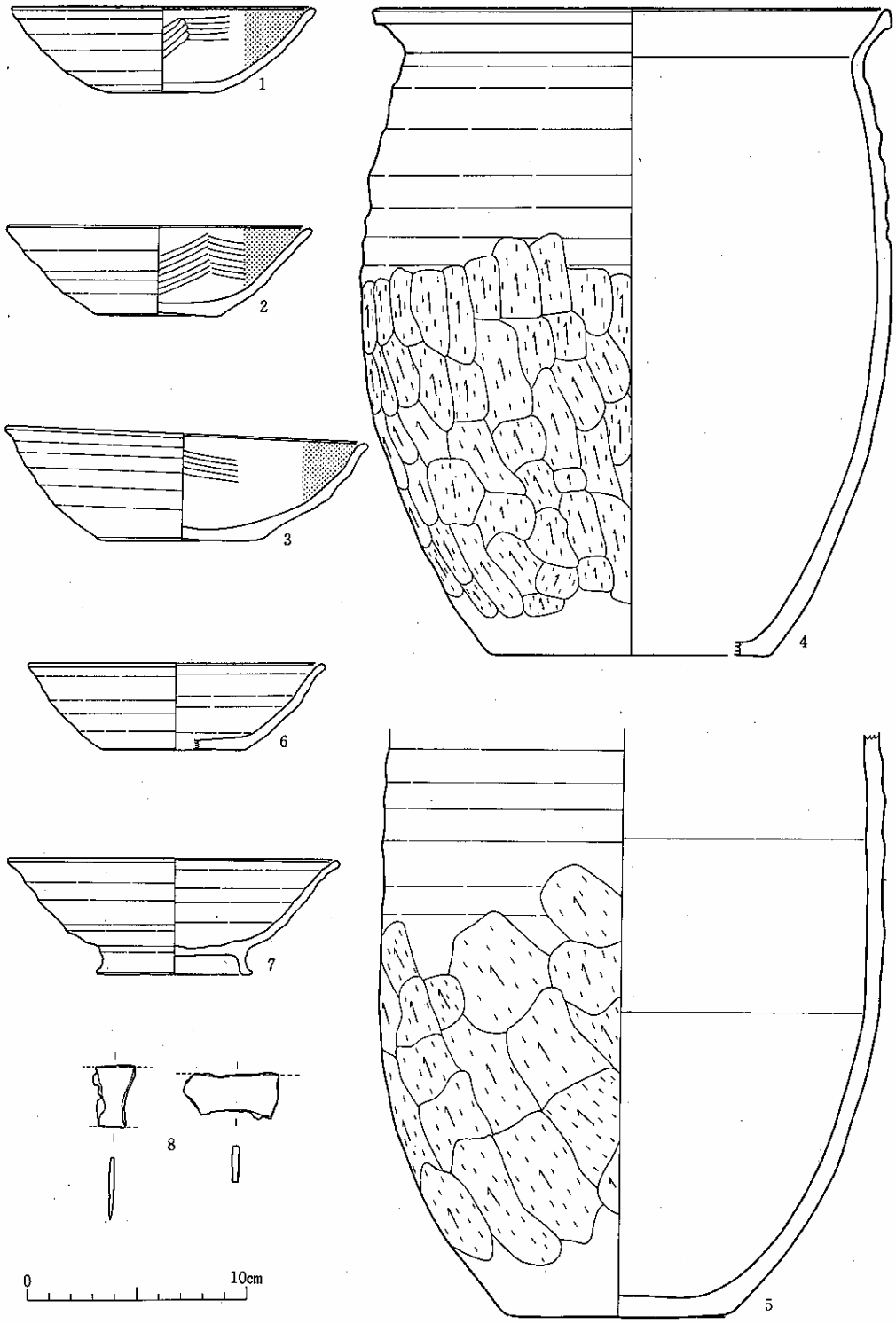
坏（第20図10～12）　いずれも製作に際しロクロを使用し、底部切り離しが回転糸切り技法によるもので、内外面とも再調整の施こされていない土器群である。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもの（10、12）、わずかに丸味をもって外傾するもの（11）とがある。10、12は口縁径に比して器高が著しく小さくなっている。

鉄製品

刀子（第20図13～15）　3点出土している。茎の部分と思われる。いずれも欠損しており、木質部が付着しているもの（13）もある。



第20図　第１号住居跡出土遺物



第21図　第１号住居跡堆積土出土遺物(1)

〔堆積土出土遺物〕

土師器

坏（第21図1～3）　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（2）、わずかに丸味をもって外傾するもの（1、3）とがある。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りである。

甕　製作に際しロクロを使用している。口縁部を欠損しているもの（第21図5）、体部下半を欠損しているもの（第22図）底部の一部を欠損しているもの（第21図4）とがある。器面調整は第21図4、5の体部下半に縦方向のヘラケズリが施されている。

赤焼土器

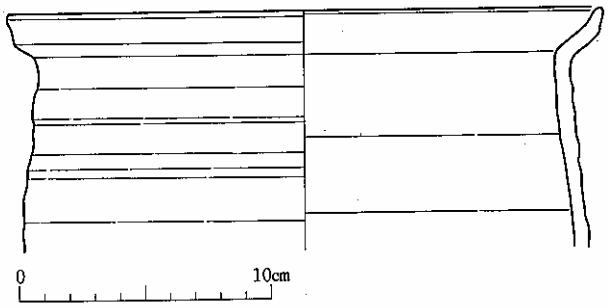
坏（第21図6）　製作に際しロクロを使用している。再調整はない。底部から口縁部にかけてわずかに丸味をもって外傾する。底部切り離し技法は回転糸切りである。

高台付坏（第21図7）製作に際しロクロを使用している。体部はわずかに丸味を持って立ち上がり、口縁部わずかに外反する坏部と、坏部に比して低いわずかに「八」字状に開く高台部とからなる。坏部の底部切り離し技法は回転糸切りである。再調整はない。

鉄製品

不明鉄製品（第21図8、9）

2点出土しているが、同一個体と思われる。銹化が激しく、形態については不明な点が多いが板状を呈している。現存長1.7～4.2cm、幅約2.6cm、厚さは約3mmである。



第22図　第１号住居跡堆積土出土遺物(2)

第２号住居跡（第23図）

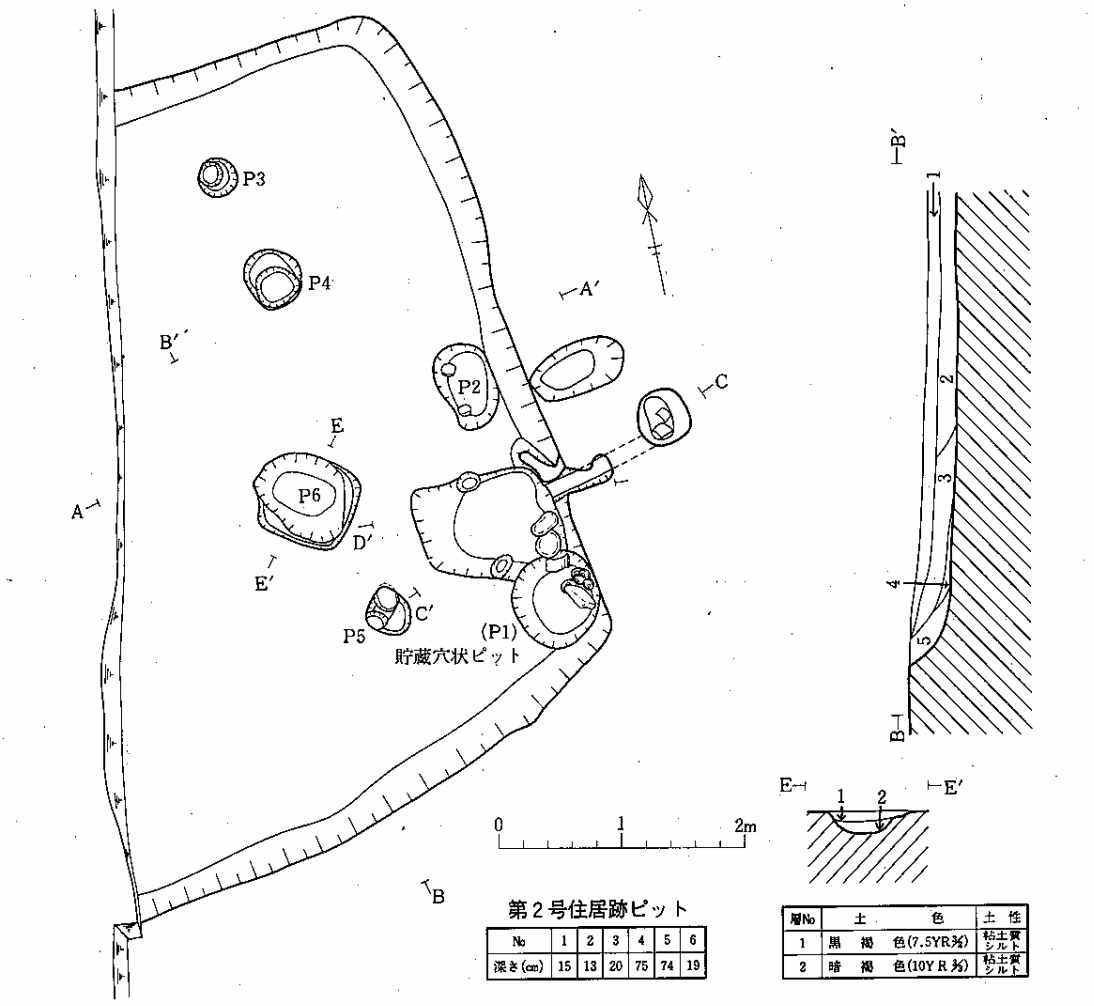
〔遺構の確認〕調査区西端、基本層序第Ⅲ層上面にて確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔平面形・規模〕住居跡の西半分は調査区外にあるため西壁全部と南、北壁の一部の状況については不明である。調査の行われた西半分の状況から平面形は方形を基調とすると考えられる。南北軸は約6.4mの長さである。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕4層認められた。土性からは砂質シルト（第１層）、粘土質シルト（第2層）シルト（第3、4層）の3層に分かれる。第2、3層には、焼土、炭化物がそれぞれ小量みられる。自然堆積状態を示している。

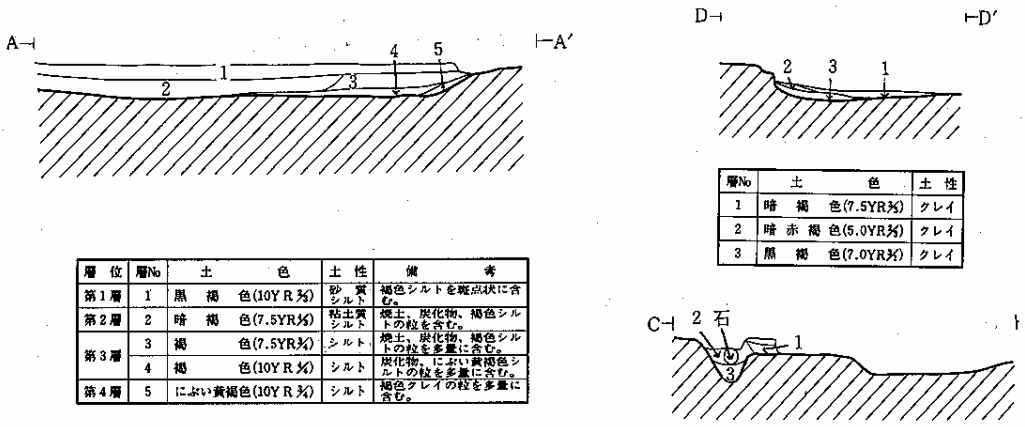
〔壁〕西側壁全部と南、北壁の一部については未調査のため不明である。東壁と南、北壁の東



第２号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6
深さ(cm)	15	13	20	75	74	19

層No	土色	土性
1	黒褐色(7.5YR3/2)	粘土質シルト
2	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト



層No	土色	土性
1	暗褐色(7.5YR3/3)	クレイ
2	暗赤褐色(5.0YR3/3)	クレイ
3	黒褐色(7.0YR3/1)	クレイ

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	黒褐色(10YR3/3)	砂質シルト	褐色シルトを斑点状に含む。
第2層	2	暗褐色(7.5YR3/3)	粘土質シルト	焼土、炭化物、褐色シルトの粒を含む。
第3層	3	褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土、炭化物、褐色シルトの粒を多量に含む。
	4	褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物、にぶい黄褐色シルトの粒を多量に含む。
第4層	5	にぶい黄褐色(10YR3/4)	シルト	褐色グレイの粒を多量に含む。

層No	土色	土性
1	オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト
2	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト
3	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト

第23図　第２号住居跡

側とも比較的緩やかに立ち上がる。残存壁高は約30㎝である。

〔床面〕床面はほぼ平である。貼り床は認められない。

〔柱穴〕住居跡内から6個のピットが検出されている。ピット3、4、5は柱痕がみられ、そのうち形状、位置関係等よりピット4、5が主柱穴になる可能性もあるが、西半分が未調査のため不明である。

〔周溝〕認められない。

〔カマド〕東壁南寄りに付設されている。燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部の天井はすでに崩落しており、側壁も左側の大部分が失なわれている。カマドの右側には自然石が置かれてあり、それに粘土を被せて右側壁を構築したものと思われる。自然石は2個みられ、大きさは20～30㎝大の河原石である。燃焼部中約10㎝程窪んでおり、底面は燃焼部奥壁から前方にわずかに傾斜している。燃焼部中央付近には30×40㎝にわたって焼け面がみられ固くなっている。煙道は燃焼部より約17㎝高くなっている。幅約20㎝、長さ約１ｍで、燃焼部方向に緩やかに傾斜している。残存状態が比較的よく東半分が約25㎝トンネル状になっている。先端には径約40㎝の円形の煙出し穴がみられる。

煙道部には焼土、炭化物が堆積していた。

〔貯蔵穴状ピット〕

住居跡南東隅、カマド右脇において検出された。平面形はほぼ円形で、規模は直径約70㎝である。堆積土2層、底面より土師器坏、甕、赤焼土器坏が多量にまとまって出土している。

また、カマド左側に70×40㎝、深さ約15㎝の楕円形ピットが検出されている。ピットの性格については不明である。

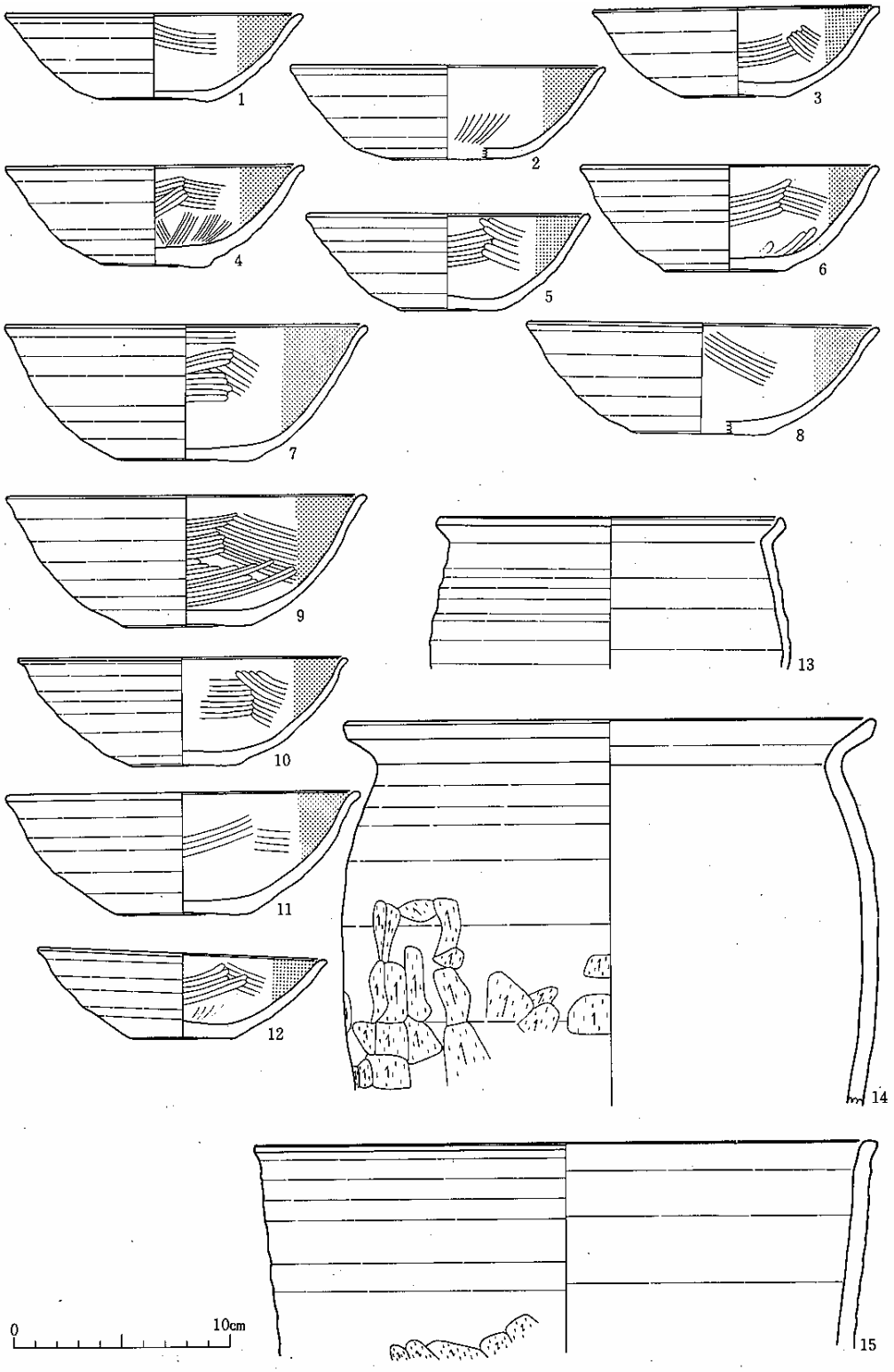
〔出土遺物〕

本住居跡に伴う遺物としては、床面、貯蔵穴内、カマド内出土の土器がある。

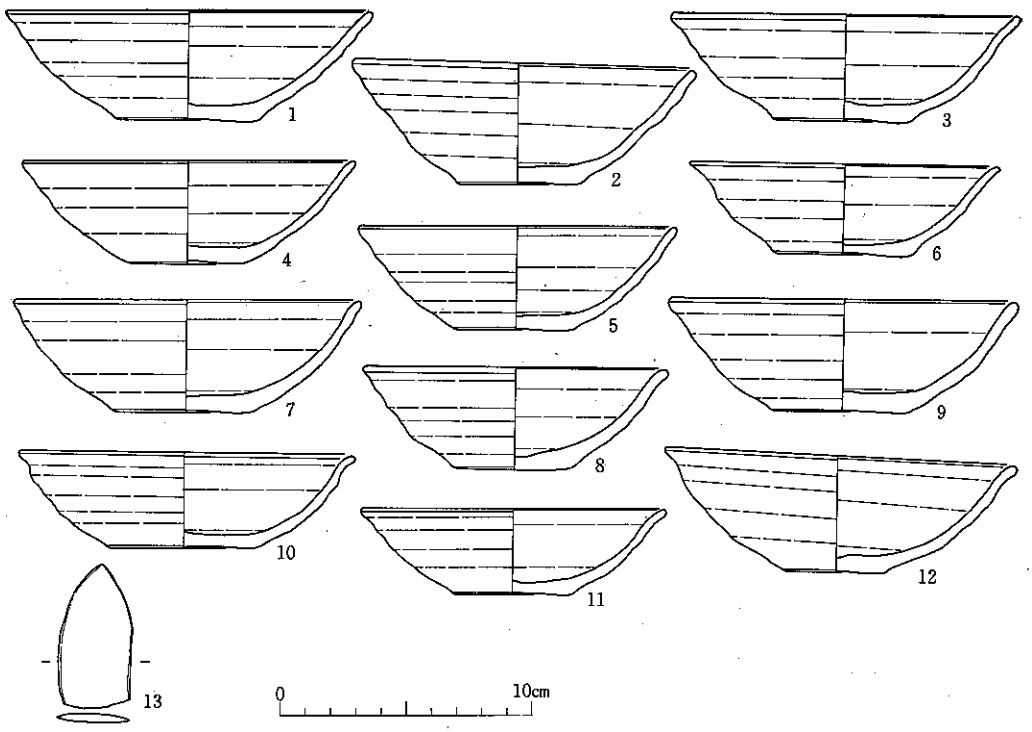
土師器

坏（第24図１～12）　いずれも製作に際しロクロを使用している。底部から口縁部にかけて丸味をもって外傾するもの（1～9）、体部には丸味をもって立ち上がり、口縁部わずかに外反するもの（10、11）、底部から口縁部にかけてやや直線的に外傾するもの（12）とがある。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りによるものである。

甕（第25図13、14、15）　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部下半を欠損している。13、14は胴部で膨らみ頸部でしまり口縁部外傾する。15は胴部から屈曲なく口縁部へ至るもので甑の可能性がある。14、15は体部外面下半にヘラケズリが施されている。



第24図　第２住居跡出土遺物(1)



第25図　第２号住居跡出土遺物(2)

須恵器

坏（第25図1～3）　底部から口縁部にかけてやや直線的に外傾するもの（1）と丸みをもて外傾するもの（2、3）とがある。底部切り離し技法はいずれも回転糸切りである。

赤焼土器

坏（第25図4～12）　いずれも製作に際しロクロを使用している。再調整はない。底部から口縁部にかけて丸みをもって外傾するもの（4～9）、体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部わずかに外反するもの（10～12）とがある。底部切り離し技法は回転糸切りである。

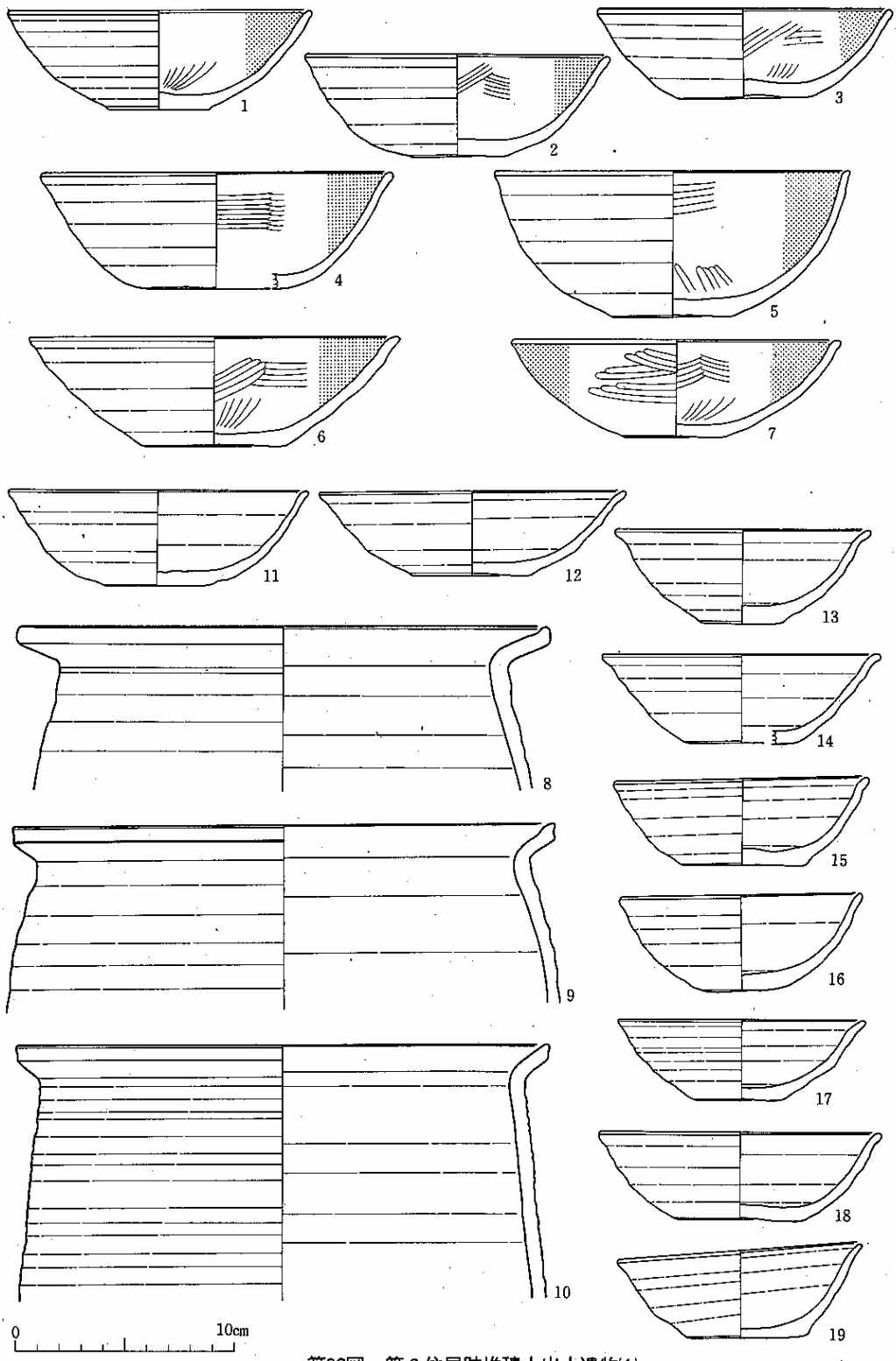
鉄製品

鉄鏃（第25図13）　欠損している。平根式の先端部と思われる。五角形に近い形を呈しており、現在長は約5.6cm、最大幅約3cm、厚さ約4mmである。

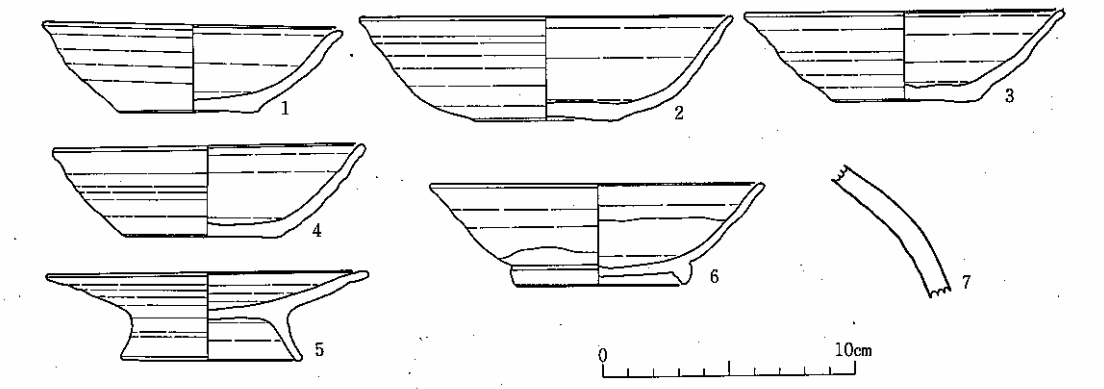
〔堆積土出土遺物〕

土師器

坏（第26図1～7）　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾するもの（1～5、7）やや直線的に外傾するもの（6）とがある。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りである。第26図７は内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施されている。



第26図　第２住居跡堆積土出土遺物(1)



第27図　第２号住居跡堆積土出土遺物

甕（第26図8～10）　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部下半を欠損している。器形は体部でわずかに膨らみ頸部でしまり、口縁部外反する。最大径はいずれも口縁部にある。

須恵器

坏（第26図11、12）　底部から口縁部にかけてわずかに丸みをもって外傾する。内外面にシャープなロクロ目がみられる。底部切り離し技法は回転糸切りである。

赤焼土器

坏（第26図13～19、第27図1～4）　いずれも製作に際しロクロを使用している。再調整はない。体部は丸みをもって立ち上がり口縁部わずかに外反するもの（第26図13～15）底部から口縁部にかけて丸みをもって外傾するもの（第26図16～19、27図1、2）、底部から口縁部にかけてやや直線的に外傾するもの（第27図3、4）とがある。底部は回転糸切りである。

高台付坏（第27図5）　製作に際しロクロを使用している。体部がほぼ直線的に外傾する坏部と坏部に対して比較的大きい「八」字状に開く高台部とからなる。坏部の底部切り離し技法は回転糸切りである。再調整はない。

灰釉陶器

坏（第27図6）　1点だけ出土している。ほぼ完形である。器形は体部から口縁部にかけてゆるやかに外傾する。口縁端は丸みをもっている。全体的にややゆがみがみられる。底部は付け高台である。淡緑色の釉が外面では体部下半部、底部近くまで、内面では体部上半部にかけられている。ロクロが使用されており、底部切り離しは回転糸切り手法による。断面は灰白色を呈し、堅緻である。

長頸瓶（第27図7）　１点だけ出土している。肩部破片である。淡緑色の釉が肩部にかけられている。ロクロが使用されており、内面にはロクロ目がみられる。器面調整は外面ヘラケズリである。断面は灰白色を呈し、堅緻である。

第３号住居跡（第28図）

〔遺構の確認〕調査区南東隅、基本層序第Ⅲ層上面で確認された。

〔重複、増改築〕カマド内焼土下より別の面が確認された。この面の壁は北壁東側、東壁から約40cm離れて、第3号住居跡壁面とほぼ平行して存在していることから、第3号住居跡は増改築された可能性が強い。

〔平面形、規模〕住居跡の南側半分がすでに削平のため失なわれているが、残存する壁の状況から平面形は方形を基調とするものと考えられる。東西軸は約4.8mの長さである。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕7層認められた。シルトである。堆積土1、2、3、5層は炭化物を含んでおり、堆積土2、3、5層には焼土がみられる。自然堆積状態を示している。

〔壁〕南壁と東西壁の一部が失なわれている。壁は比較的緩やかに立ち上がる。残存壁高は約30cmである。

〔床面〕カマド付近を中心として貼り床がみられる。床面はほぼ平である。貼り床の厚さは12～0cmである。貼り床下部に前住居跡の床面がみられる。

〔柱穴〕住居跡内から2個のピットが検出されている。すべて貼り床上面で確認されたものである。ピット3は径約20cmの柱痕がみられるが、１つだけのため、位置関係が不明であり、本住居跡の主柱穴かどうかは不明である。

〔周溝〕認められない。

〔カマド〕北壁東側に付設されている。燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部の天井はすでに崩落しており、両側壁は失なわれている、燃焼部底面はほぼ平であり、焼土と炭化物の広がり（80×70cm）がみられる。煙道は燃焼部床面より約10cm高くなっており、残存形状は構状になっている。幅約20cm、長さ約70cmである。底面は先端にむかってわずかに高くなっている。

〔貯蔵穴状ピット〕

住居跡北東隅、カマド右脇において検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径約48cm、深さ約20cmである。堆積土2層からは土師器坏が数点出土している。

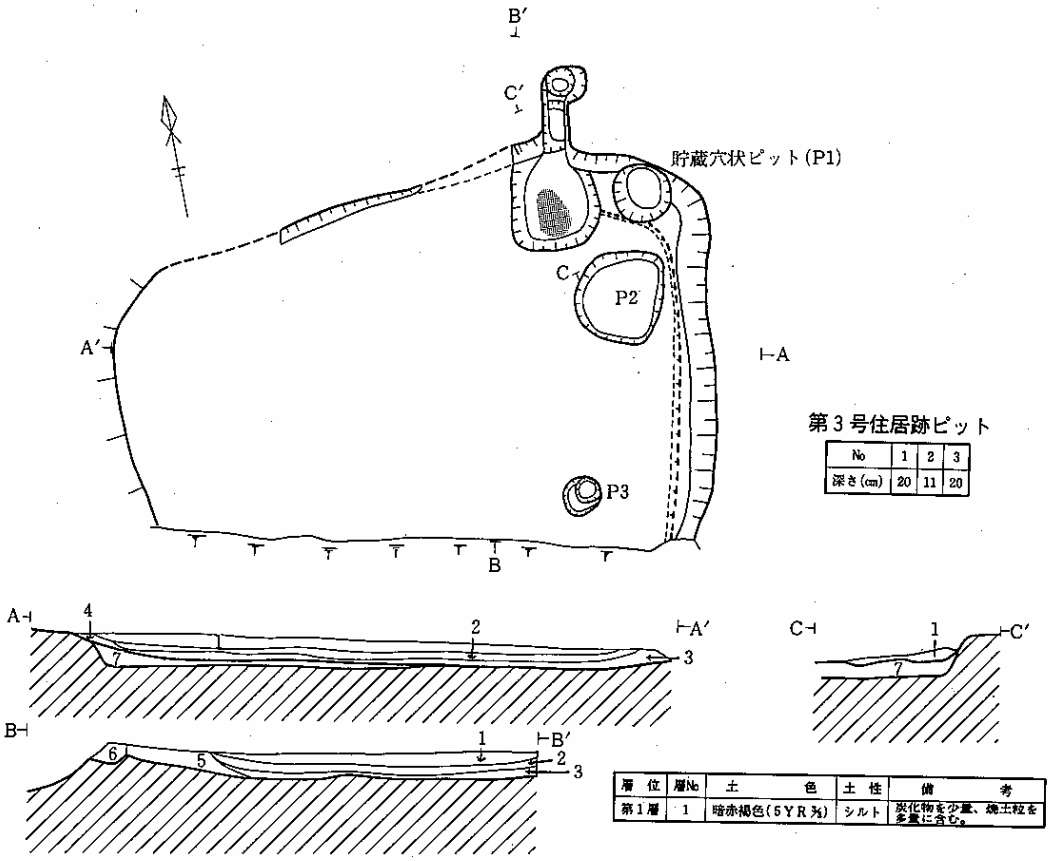
〔出土遺物〕

本住居跡に伴う遺物としては、床面、カマド内貯蔵穴状ピット出土の土器がある。

土師器

坏（第29図1～3）

製作に際しロクロを使用している。底部から口縁部にかけてわずかに丸味をもって外傾するいずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は、回転糸切りによる。



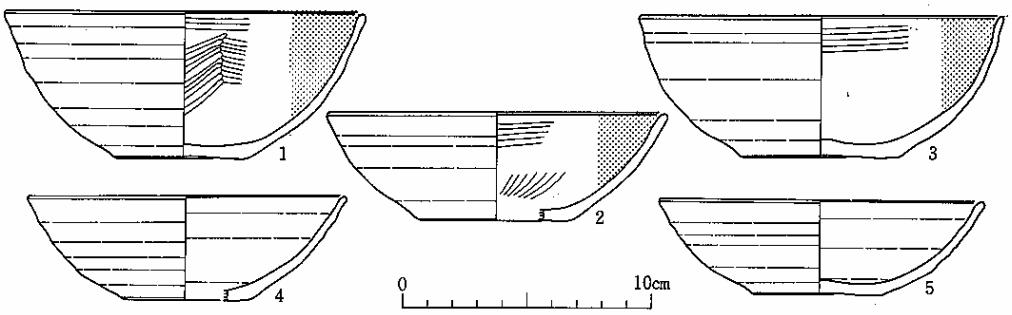
第３号住居跡ピット

No	1	2	3
深さ(cm)	20	11	20

層位	層No	土色	土性	備考
第１層	1	暗赤褐色(5YR 3/3)	シルト	炭化物を少量、焼土粒を多量に含む。

層位	層No	土色	土性	備考
第１層	1	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	炭化物を小量含む。
第２層	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物を多量に含み、焼土粒を小量含む。
第３層	3	黒褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物、焼土粒、褐色シルトを多量斑点状に含む。
第４層	4	褐色(10YR 4/4)	シルト	褐色シルト粒を斑点状に含む。
第５層	5	暗赤褐色(5YR 3/3)	シルト	炭化物、焼土粒を多量に含む。
第６層	6	黒褐色(10YR 3/3)	シルト	褐色シルト粒を少量含む。
第７層	7	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	焼土粒を多量に含む。

第28図　第３号住居跡



第29図　第３号住居跡出土遺物

赤焼土器

坏（第29図4、5）いずれも製作に際しロクロを使用している。再調整はない。底部から口縁部にかけてわずかに丸味をもって外傾する。底部切り離し技法は回転糸切りである。

〔堆積土出土遺物〕

土師器

坏（第30図1、2）　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾する。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りである。

甕（第30図5、6）　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部上半のみ残存する。体部で膨らみ、頸部でしまり、口縁部外傾する。

須恵器

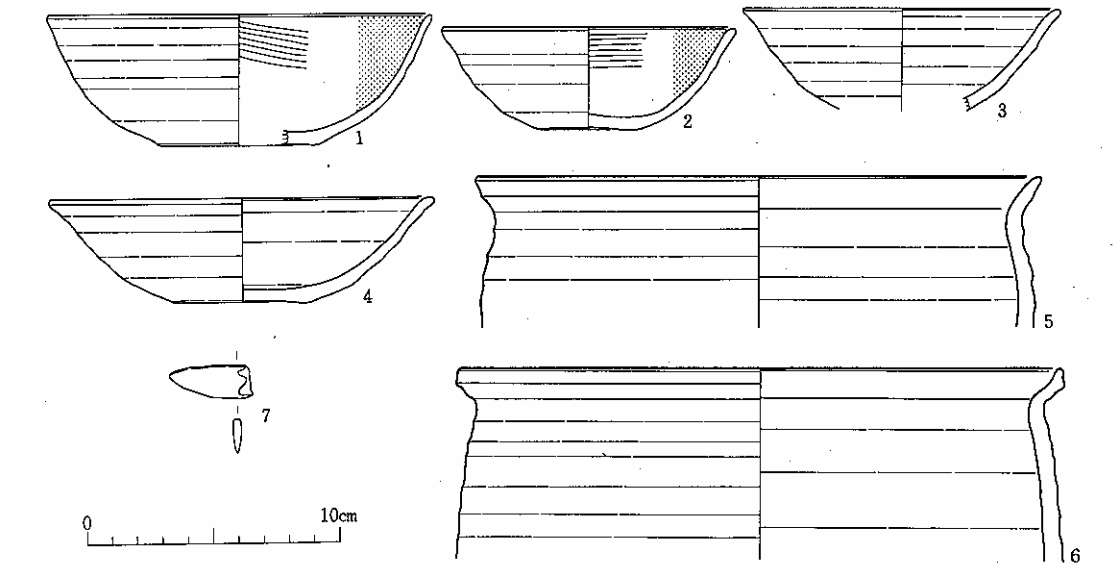
坏（第30図3）　体部から口縁部にかけてわずかに丸味を持って外傾する。底部を欠損しており底部切り離し技法は不明である。

赤焼土器

坏（第30図4）　製製作に際しロクロを使用している。再調整はない。底部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に外傾する。底部切り離し技法は回転糸切りである。

鉄製品

刀子（第30図7）１口出土している。刀身先端部破片である。現存長約3.2㎝、平面形は先端部に向かってしだいに細くなっている。



第30図　第３号住居跡堆積土出土遺物

5、溝とその出土遺物

溝は大小9本発見された。確認面はすべて第Ⅱ層上面である。

１号溝（第31図）　方形周溝墓台状部内北側で発見された。東西方向に延びており、台状部東西周溝を切っており、東側で2号溝によって切られている。確認長約18m、幅約3mである。深さは約1.5mである。断面形はV字に近い形を呈する。堆積土は8層で、粘土質の層からなり、下部の層はやや水平に、上部の層は両壁から中央部にむかってわずかに傾斜をもって堆積している。5、6、7層は木片を含んでいる。遺物は発見されていない。

2号溝（第31図）　方形周溝墓の東側で発見された。台状部東側周溝を半分、1、8、3、4号の各溝を切っている。昭和52年仙台市教委検出の1号溝にあたり、仙台市調査分もあわせた。その平面形は一辺が約70cmの方形を呈する。調査区内の確認長約37m、幅3.8～4m、深さは約1.4mである。断面形は逆台形を呈し、底面はやや平坦である。堆積土は8層で、下部の層は粘土質の層からなりほぼ水平かわずかに傾斜をもって堆積している。上部の層は砂質の層からなり、西側から東側にむかってわずかに傾斜している。4～7層は木片を含んでいる。

〔出土遺物〕

土師器壺と須恵器坏の破片が堆積土中より1点ずつ出土している。出土層位は不明である。

土師器

壺　頸部破片である。器面調整は内外面刷毛目で丹が塗られている。

須恵器

坏　底部破片である。底部切り離し回転糸切りで内面ロクロ調整痕がみられる。

土製品

土錘（第34図１）

1点出土している。中央部が膨む、紡錘形に近い円柱で、長さは約9.1cm、最大径約3.3cmである。中央に径約6mmの貫通孔がある。器面はみがかれている。

不明鉄製品（第34図2）　1点出土している。棒状を呈し、断面は円形である。

3号溝（第31図）　方形周溝墓南側周溝付近で発見された。東北方向に延びており、方形周溝墓南側周溝を切っており、東側で2号溝に切られて、さらに北東方向にのびて、昭和52年仙台市教委発見の第2号溝となる。県教委発見の確認長は約15mで、仙台市教委発掘分も合わせると、約54mとなる。幅は1.2m～2.1mで西側にいくにしたがって細くなっている。深さは約１mである。断面形はＵ字形で、壁面はなだらかである。底面にあまり凹凸がみられない。堆

積土は9層で粘土質の層からなり、下部の層はほぼ水平堆積している。上部の層は両壁からなだらかに傾斜し、レンズ状に堆積している。

〔出土遺物〕

底面から出土遺物はない。堆積土4層中より、土師器壺が6片出土している。

土師器

壺　いずれも体部破片である。器面調整は内外面とも刷毛目調整で外面には丹が塗られている。

4号溝（第31図）

方形周溝墓の南側周溝端で発見された。東西方向にのびており、方形周溝墓の張り出し部東西周溝南端を切っており、東側で2号溝によって切られている。確認長約15m、幅2～3m、深さ約1.2mである。壁面はなだらかだが凹凸がみられる。堆積上は5層で、下部の層は粘土質の層からなり、中間が砂質の層となっている。最下層だけが水平に堆積しており、他はすべて両壁から中央部にむかってなだらかに傾斜している。

〔出土遺物〕

底面からの出土はない。堆積土4層から土師器壺と甕の破片が1点ずつ出土している。

土師器

壺　体部破片である。器面調整は内外面刷毛目である。

甕　口縁部破片である。器面調整は外面不明、内面ナデである。

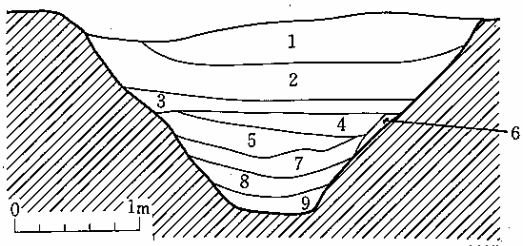
鉄製品

刀子（第34図3）1口出土している。茎端部が欠損しているが、刃部は完全な形で遺存している。現存長約8.8㎝、幅は茎が約８㎜、刃部が約1.2㎝である。平面形は先端部にいくにしたがってわずかに細くなる。刃部と茎との境には関がみられる。

5号溝（第31図）

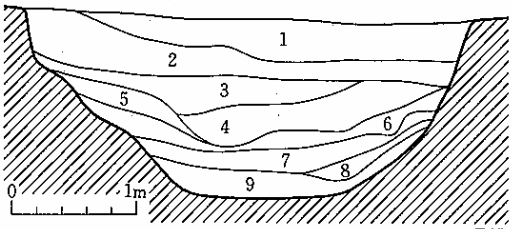
1号住と2号住の間で発見された。東西方向に延びており、確認長約26m、幅5～6m、深さ約1.4mである。壁面は北側で途中テラス状の段がつく。傾きはなだらかである。底面は平坦である。堆積土は6層で、最下層は砂質の層でほぼ水平に堆積している。他は粘土質の層で、テラス状のところまでは両壁から中央部にむかってなだらかに傾斜しており、上部の層はほぼ水平に堆積している。3、4、5層は木炭を多く含んでいる。遺物は堆積土中より土師器坏、甕、須恵器坏、中世陶器が出土している。

〔出土遺物〕



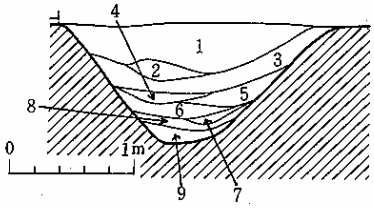
1号溝

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	明黄褐色(10YR 5/6)	砂質シルト	かたくしまっている
第2層	2	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	粘土質シルト	酸化鉄を少し含む。
第3層	3	赤褐色(2.5YR 4/6)	粘土質シルト	酸化鉄からなる。
第4層	4	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	粘土質	酸化鉄を少し含む。
第5層	5	褐色(10YR 4/6)	粘土質	木片を多量に含む。
第6層	6	にぶい黄橙色(10YR 5/3)	粘土質	酸化鉄を含む。
	7	灰黄褐色(10YR 5/2)	粘土質	木片、酸化鉄を少し含む。
第7層	8	黄灰色(2.5Y 5/1)	粘土質	木片をすこし含む。
第8層	9	明緑灰色(10GY 7/1)	粘土質	



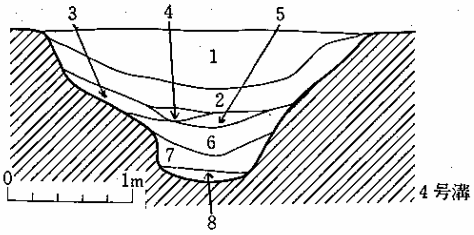
2号溝

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	黄褐色(10YR 5/6)	砂質	酸化鉄を含む、固くしまっている。
第2層	2	明黄褐色(10YR 5/6)	粘土質	すこし砂を含む、酸化鉄を含む。
第3層	3	灰黄褐色(10YR 5/2)	砂質	酸化鉄を含む、柔らかい。
	4	灰黄褐色(10YR 5/2)	粘土質	酸化鉄を含む、柔らかい。
第4層	5	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	粘土質	多量の木類、クルミを含む。
第5層	6	褐色(10YR 4/4)	粘土質	多量の木類を含む。
第6層	7	灰黄褐色(10YR 5/2)	粘土質	多量の木類を含み、柔らかい。
第7層	8	暗褐色(10YR 3/3)	粘土質	柔らかい、木片を含む。
第8層	9	褐灰色(10YR 5/1)	粘土質	柔らかい。



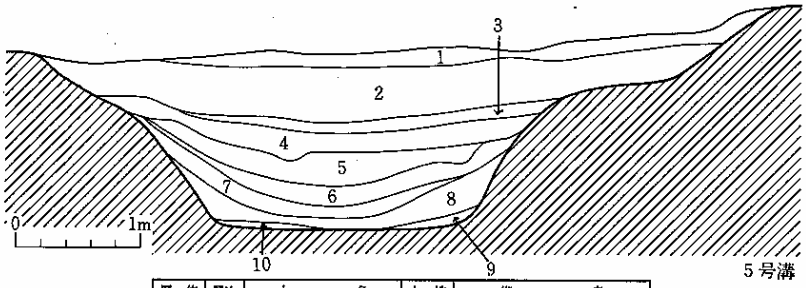
3号溝

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	明黄褐色(10YR 5/6)	粘土質シルト	固くしまっている。
第2層	2	明黄褐色(10YR 5/6)	粘土質	固くしまっている。
第3層	3	黄褐色(10YR 5/6)	粘土質	
第4層	4	灰黄褐色(10YR 5/2)	粘土質	黄橙色の土を斑点状に含む。
第5層	5	明黄褐(10YR 5/6)	粘土質	砂を少し含む。
	6	明黄褐(10YR 5/6)	粘土質	砂を少し含む。
第6層	7	黄褐色(10YR 5/6)	粘土質	柔らかい。
	8	黄褐色(10YR 5/6)	砂質	柔らかい。
第7層	9	褐灰色(10YR 5/1)	粘土質	柔らかい。



4号溝

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	明黄褐色(10YR 5/6)	砂質	固くしまっている。
第2層	2	明黄褐色(10YR 5/6)	粘土質	酸化鉄を含む。
第3層	3	黄褐色(10YR 5/6)	砂質	固くしまっている。
	4	黄褐色(10YR 5/6)	砂質	固くしまっている。
	5	褐色(10YR 4/4)	砂質	
第4層	6	灰黄褐色(10YR 5/2)	粘土質	明赤褐色土を斑点状に含む。
第5層	7	にぶい黄橙色(10YR 6/3)	粘土質	柔らかい、酸化鉄を含む。
第6層	8	明褐灰色(10GY 7/1)	粘土質	少し固い。



5号溝

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	褐灰色(10YR 5/1)	粘土質	明赤褐色土を斑点状に含む。
第2層	2	黄褐色(10YR 5/6)	粘土質	褐灰色土を斑点状に含む。
第3層	3	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	粘土質	柔らかい、多量の木片を含む。
第4層	4	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	粘土質	酸化鉄、木片を少し含む。
第5層	5	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	粘土質	固くしまっている。
	6	褐灰色(10YR 5/1)	粘土質	木片を少し含む。
	7	褐灰色(10YR 5/1)	粘土質	
	8	灰黄褐色(10YR 5/2)	粘土質	黒色土をブロック状に含む。
	9	灰黄褐色(10YR 5/3)	粘土質	
第6層	10	明緑灰色(10GY 7/1)	砂質	柔らかい。

第31図　1、2、3、4、5号溝

土師器

坏　堆積土2、7、8層中より体部破片が8点出土している。ロクロが使用されており、内面ヘラミガキ、黒色処理がされている。

高台付坏　堆積土7、8層中より、高台部の破片が2点出土している。調整については不明である。

甕　堆積土2、7、8層中より体部破片22点、底部破片2点出土している。体部破片はロクロ使用のもの6点あり、器面調整は、外面ケズリ内面ケズリ内面ナデ、または、ロクロ調整である。他については小破片のため不明である。

赤焼土器（坏）　8層中より口縁部の破片が1点出土している。

中世陶器

壺甕類　堆積土2、6、7、8層中より体部破片16点、底部破片１点出土している。胎土はわずかに砂粒を含み暗赤褐色を呈する。賢緻である。調整は内外面ナデ、または、内面ナデである。

擂鉢（第34図4）　堆積土2層より片口の口縁部破片が１点出土している。体部から口縁部にかけて外傾し、口縁端でわずかに外反ぎみにくびれる。口縁端は角ばっている。片口部の遺存部はわずかであり、わずかに片口であることが知れるのみである。内外面とも横ナデ調整されており、内面に筋目がみられる。筋目は幅約2.5㎜、断面U字形で、体部では口縁部にむかって放射状に、口縁近くでは波状に5条単位で施文されている。色調はやや灰色がかった黒色を呈する。断面は灰白色で小粒子の混入は少ない。焼成はあまりよくない。

6号溝（第32図）

1号住居跡と3号住居跡の間で発見された。東西方向に延びており、確認長約17m、幅3～3.4m、深さ約2.5mである。壁面は上半部がなだらかで、下半部は急になっている。底面はほぼ平坦である。堆積土は11層で下部は粘土質の層で、ほぼ水平に堆積しており、他は粘土質または砂質の層で両壁から中央部にむかって、わずかに傾斜している。7、8層は木片を含んでいる。

〔出土遺物〕

堆積土中より土師器坏、甕、須恵器坏、赤焼土器坏、中世陶器壺・甕類が出土している。

土師器

坏　堆積土１層より1点、5層より4点出土している。体部・底部破片である。ロクロを使用しており、内面ヘラミガキ黒色処理、底部は磨耗のため不明である。

甕　堆積土5層より5点出土している。体部と底部がある。ロクロを使用しており、外面ケ

ズリ内面ロクロ調整である。底部は磨耗のため不明である。

須恵器

坏　堆積土5層より1点出土している。底部破片である。外面不明一内面ロクロ調整痕がみられる。

赤焼土器

坏　堆積土4層から1点出土している。口縁部破片である。

中世陶器

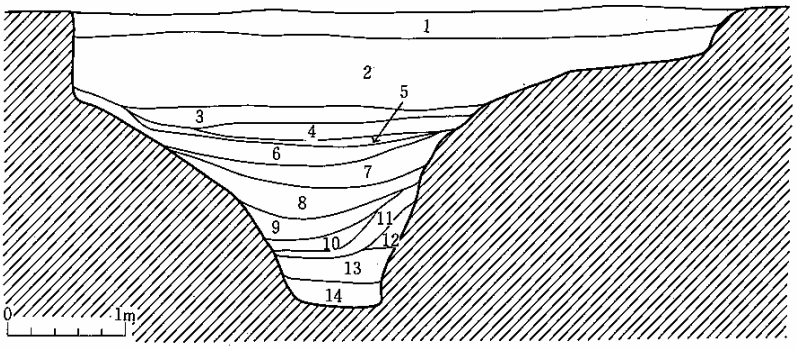
壺・甕類　堆積土3層より1点出土している。小砂粒を含み、焼成は良好である。器面調整は不明である。

7号溝

調査区南端で発見された。ほぼ南北方向に延びており、北側で6号溝によって切られている。確認長約30m、幅約1.5mである。7号溝の堆積土からは土師器坏、甕、須恵器甕、中世陶器甕、火鉢、擂鉢が出土している。

土師器

坏　底部破片が1点だけ出土している。ロクロを使用しており、内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。



層位	層No	土色	土性	備考	層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	明黄褐色 (10YR 5/6)	砂質シルト	固くしまっている。	第8層	8	褐色 (10YR 4/4)	粘土質	多量の木片、クルミを含む。
第2層	2	明黄褐色 (10YR 5/6)	砂質シルト	固くしまっている。	第9層	9	灰白色 (10Y 7/1)	粘土質	柔らかい。
第3層	3	明黄褐色 (10YR 5/6)	砂質シルト	固くしまっている。酸化鉄を少し含む。	第10層	10	にぶい黄橙色 (10YR 6/4)	粘土質	柔らかい。
第4層	4	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	砂質シルト	固くしまっている。酸化鉄をわずかに含む。	第11層	11	明灰色 (7.5GY 7/1)	粘土質	柔らかい。
第5層	5	明黄褐色 (2.5YR 6/6)	粘土質	酸化鉄からなる固くしまった層。		12	明黄褐色 (10YR 6/6)	粘土質	柔らかい。
第6層	6	褐灰色 (10YR 5/1)	粘土質シルト	すこし柔らかい、酸化鉄をわずかに含む。		13	褐灰色 (10YR 5/1)	粘土質	少し固い。
第7層	7	暗褐色 (10YR 3/4)	粘土質	木片、クルミを含む。		14	褐灰色 (10YR 4/1)	粘土質	少し固い。

第32図　6号溝

甕

第34図5は4層から出土した口縁部破片である。口縁部約8.3cm、頸部でしまり、口縁大きく外反する。ロクロが使用されており、外面には刷毛目がみられる。

須恵器

甕　体部破片が3点出土している。調整は外面平行タタキ、内面平行、または、青海波である。

中世陶器

火鉢（第34図6）　口縁部破片が１点だけ出土している。口縁部横方向に2条の凸帯があり、その間に2段にわたって雷文が施文されている。胎土はわずかに小砂粒を含み、賢緻ではないが、焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈する。

擂鉢（第34図7）　器形は底部から体部にかけてわずかに内弯する。調整は外面ナデ、内面ロクロ痕がみられる。4～5条単位の筋目が内面にみられる。筋目は幅約1.3cmである。胎土はわずかに砂粒を含み、賢緻である。色調は白っぽい灰色を呈する。内面には使用痕が認められ、磨耗のためなめらかになっている。底部切り離し技法は静止糸切りである。

8号溝（第33図）

方形周溝墓中央付近で発見された。東西にのびており、方形周溝墓台状部東西周溝を切っており、東側で2号溝によって切られている。確認長約17m、幅2～2.2m、深さ90cmである。壁面はなだらかで、断面はU字形を呈する。底面にはあまり凹凸がみられない。堆積土は6層で、レンズ状に堆積しており、自然堆積状態を示している。

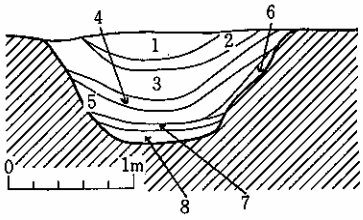
〔出土遺物〕

堆積土中より土師器壺、坏、石磨臼が出土している。

土師器

壺　第34図9は、底部破片である。底部から体部にかけて丸みをもって外傾する。器面調整は、外面刷毛目、内面は磨耗のため不明である。

甕　第34図10は、口縁部破片である。頸部でくびれ口縁部外傾する。器面調整は、内外面刷



層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	明黄褐色(10YR 7/6)	粘土質	酸化鉄を少し含む。
第2層	2	にぶい黄橙色(10YR 6/4)	砂質	しまりがない、酸化鉄を含む。
	3	にぶい黄橙色(10YR 7/3)	粘土質	ねばねばして、酸化鉄を含む。やわらかい。
第3層	4	明黄褐色(10YR 6/6)	粘土質	やわらかく、しまりがない。
	5	明黄褐色(10YR 5/6)	粘土質	やわらかく、しまりがない。
第4層	6	にぶい黄橙色(10YR 6/4)	粘土質	やわらかく、しまりがない。
第5層	7	褐灰色(10YR 5/1)	粘土質	非常にやわらかい。
第6層	8	黄橙色(10YR 7/8)	粘土質	非常にやわらかい、酸化鉄を含む

第33図　8号溝

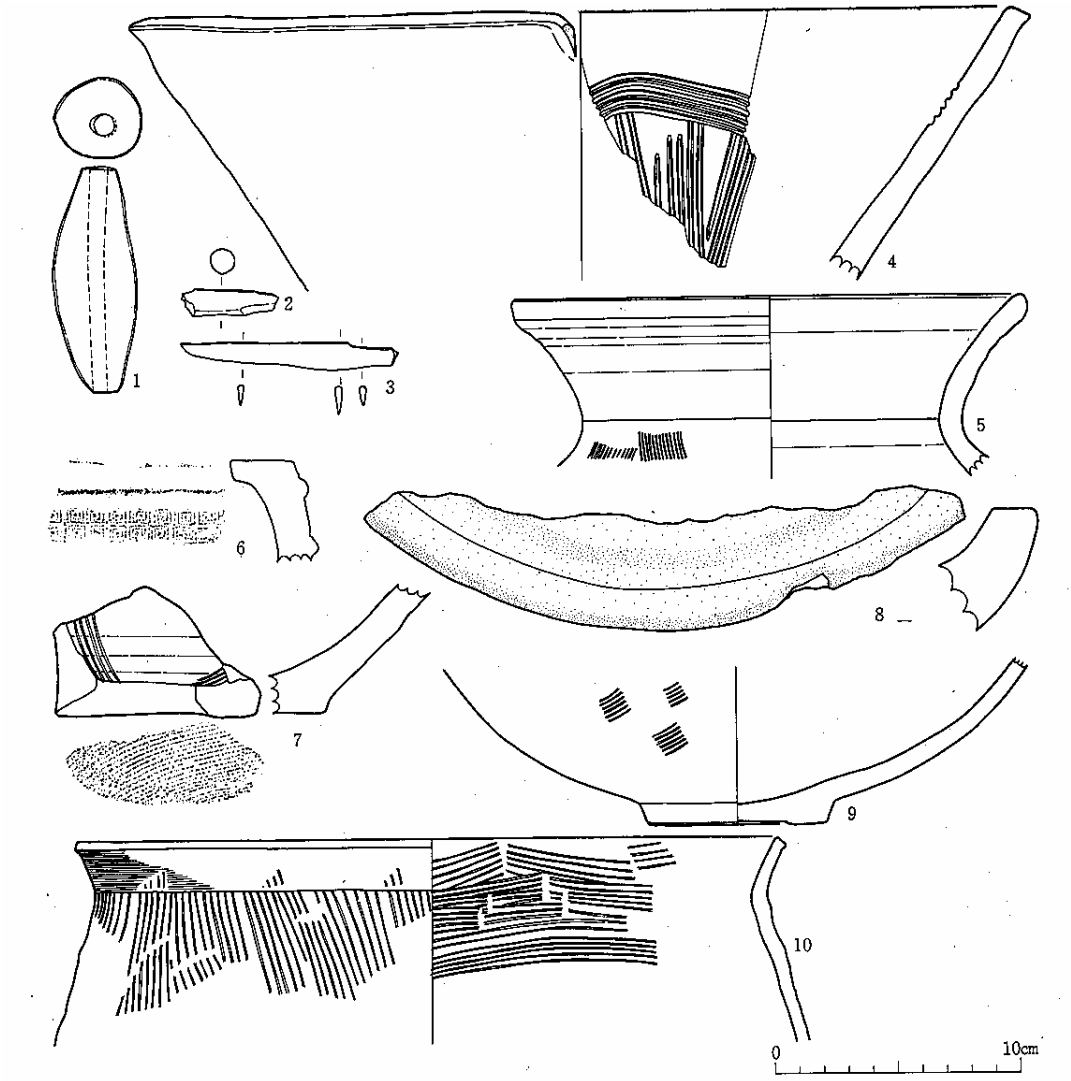
毛目である。他の2点は、体部破片である。器面調整は磨耗のため不明である。

坏　堆積土1、2層から1点ずつ出土している。いずれも体部破片である。器面調整は外面磨耗のため不明で、内面はミガキ、またはヘラミガキ黒色処理である。

石磨臼（第34図8）　１点出土している。下臼の受け皿状部の破片と思われる。

9号溝

3号住居跡の西側で発見された。3号住居跡を切っており、6号溝によって切られている。ほぼ南北方向に延びており、確認長約6m、幅約4mである。遺物は出土していない。



第34図　2、4、5、7、８号溝出土遺物

出土溝不明の出土遺物

緑釉陶器

椀（第35図1）　1点出土している。内外両面に淡い灰緑色の釉がかかり、断面は黄褐色を呈する硬質のものである。付け高台である。

中世陶器

甕（第35図2～5）　口縁部破片で4点出土している。器形は頸部でしまるもの（2、4、5）としまりの弱いもの（3）とがある。口縁部はやや直立ぎみである。口縁部先端丸みをもち、内側にわずかな段があり、受口状を呈する。口縁帯の幅は2.2～2.5cmである。調整は、5が口縁部内外を横ナデ、4が外面不明、内面横ナデである。胎土は砂粒をやや多く含み、黒っぽい褐色を呈し、賢緻である。色調は2、3が暗赤褐色、4、5が赤褐色である。

漆器

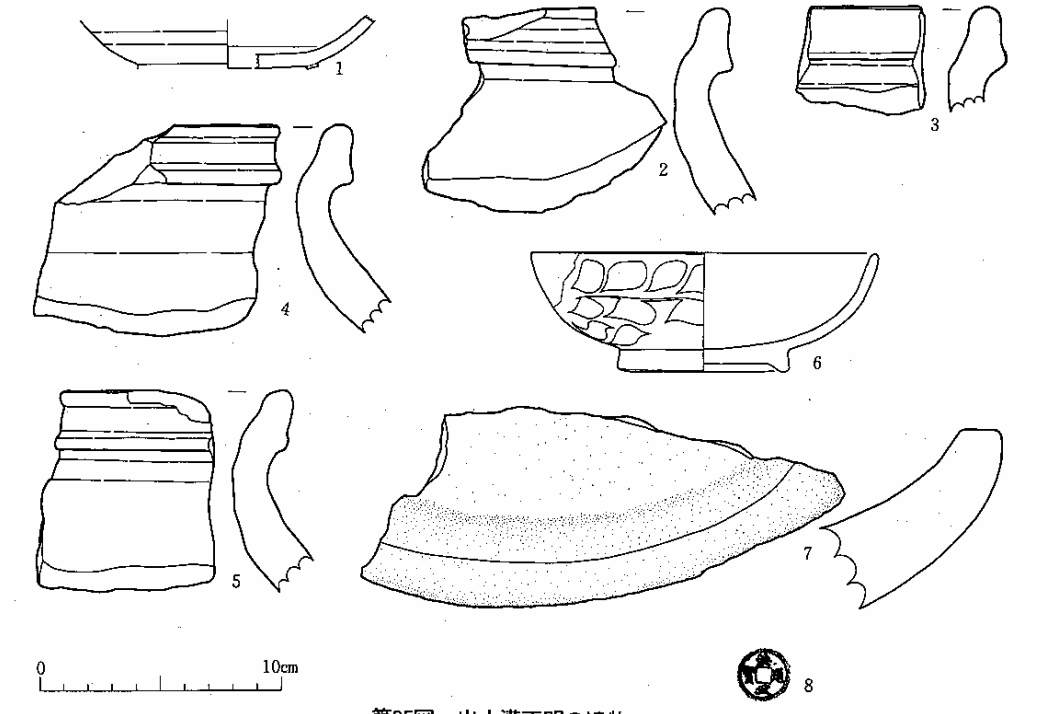
椀（第35図6）1点出土している。内面朱塗り、外面黒漆地である。外面には朱色で雲形状の文様が2～3段にわたり描かれている。

石磨臼（第35図7）

1点出土している。下臼の受け皿状部の破片と思われる。

古銭（第35図8）

洪武通宝が１枚出土している。



第35図　出土溝不明の遺物

6、表土および出土地点不明の遺物

表土出土の遺物で図示できるのは土師器坏、甕、壺、須恵器坏、赤焼土器である。出土地点不明の遺物では、土師器坏、土師器高台付坏と石製品の管玉、石臼がある。

土師器

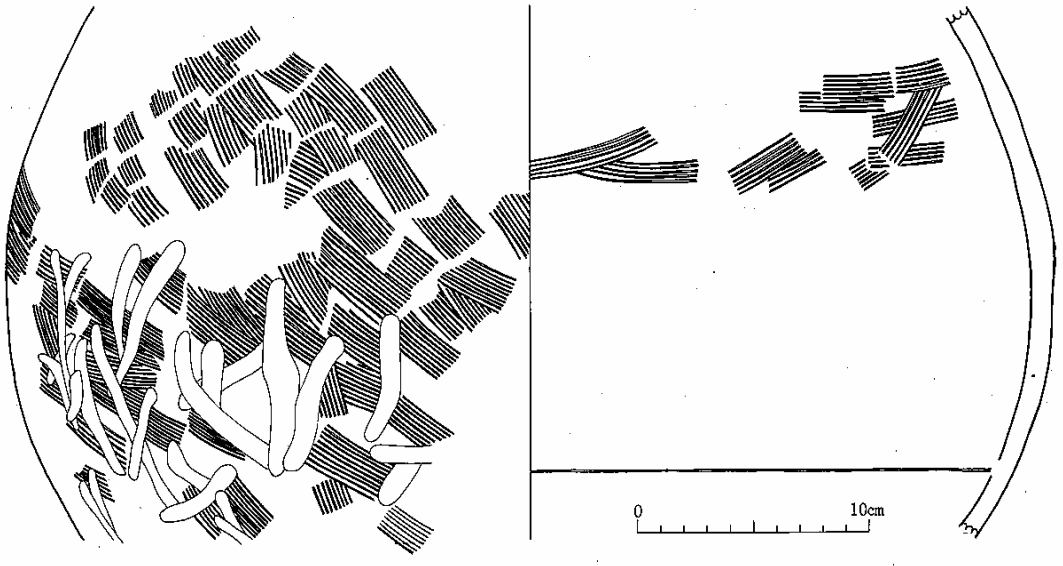
壺（第36図、第37図1）　2点出土している。第36図は口縁部と底部全部、体部半分欠損している。体部は球形で、体部最大径は約45cmである。器面調整は外面刷毛目のちヘラミガキ、内面刷毛目である。第37図1は底部破片である。底部から口縁部にかけて外傾する。器面調整は内外面刷毛目である。底部にリング状のはりつけがみられる。なお、これは甕になるかもしれない。

坏（第37図2）　製作に際しロクロを使用している。底部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する。底部切り離し技法は回転糸切りである。

高台付坏（第37図3）　は坏部の上半部欠損している。調整は外面は坏部、高台内外面にロクロ調整痕が観察され内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。高台は八字状に開き低い。高台接合時の調整によって坏部の切り離しは不明である。坏底部外面には菊花状文の調整痕が残っている。

須恵器

長頸壺（第37図4）　1点出土している。底部破片である。底部から口縁にかけて外傾する。器面調整は外面はヘラケズリである。



第36図　表土および出土地点不明の遺物(1)

灰釉陶器

長頸瓶（第37図8、9）　2点出土している。肩部破片である。淡緑部の釉が肩部にかけられている。断面は灰白色を呈し、堅緻である。

中世陶器

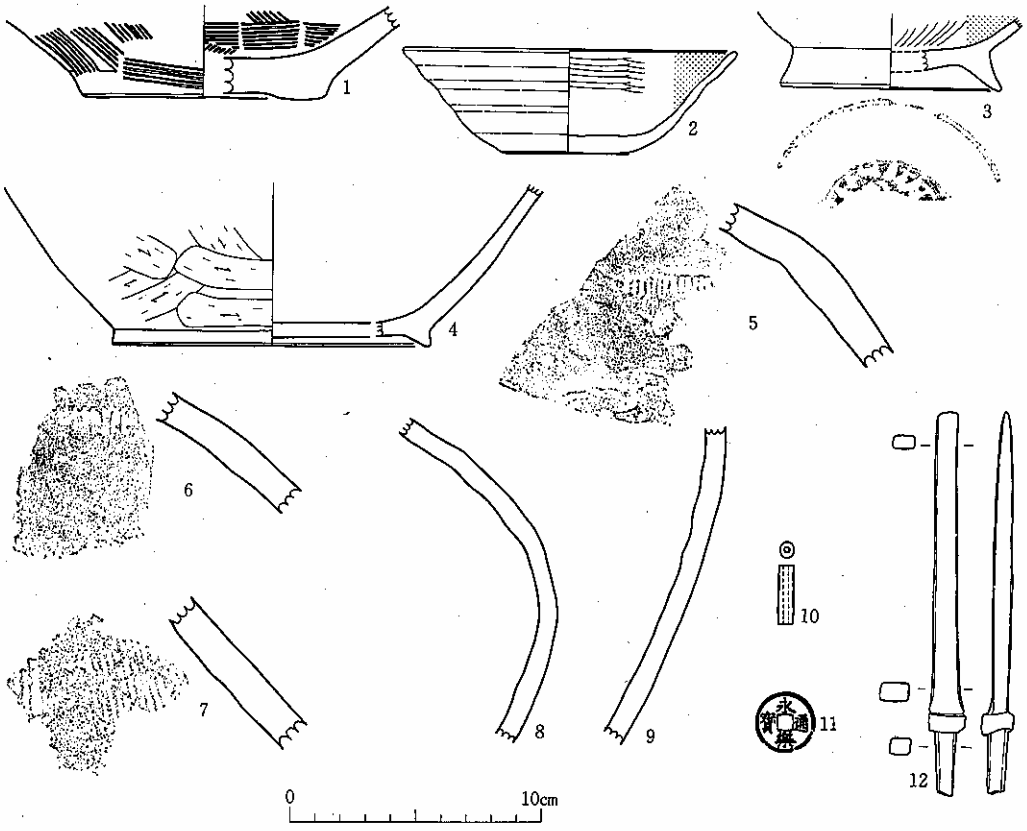
壺・甕類（第37図5～7）　3点出土している。いずれも肩部の破片である。内湾または内傾する。簾状格子目、格子目と菊花状文が組み合うもの等の押印がみられる。

石製品

管玉（第37図10）　完形品である。長さ約2.4cm、幅6.5cmである。幅約2mmの孔が貫通している。全体によく磨かれている。材質は硬質頁岩である。

古銭（第37図11）　永楽通宝が1枚出土している。

鉄製品（第37図12）　1点出土している。棒状を呈し、先端部はノミ状になっている。断面形は長方形である。工具と思われる。



第37図　表土および出土地点不明の遺物(2)

Ⅳ 考　　察

1、方形周溝墓

方形周溝から出土した遺物はすべて土師器で器種には壺、甕、高坏とがある。

壺は口縁部が有段口縁を呈するもので、口縁部と頸部との境に鋭角な段がみられる。口縁部は大きく外反し、端部は丸くなっている。体部はほぼ球形を呈するが最大径が体部ほぼ中央部にあるものと中央部からいくぶん下にあるものとがある。底部は焼成前に穿孔されており、穿孔の直径は4.2～7㎝である。調整は内外面とも口縁部が横ナデ、頸部、体部は刷毛目であり、さらに外面には体部下半部にナデやヘラミガキのみられるものもある。大きさがいくぶん大きめのものとやや小形のものとがある。なお、内面には積み上げ痕が明瞭に認められ、外面全面と口縁部内面には丹が塗られている。

このような、有段口縁の壺は、小牛田町山前遺跡や仙台市南小泉遺跡などに類例がみられるが、本遺跡の壺は焼成前底部穿孔で、仮器として使用されたものであり、これらとは用途において明らかな違いがみられる。本遺跡のような壺は名取市今熊野遺跡、雷神山古墳、古川市青塚古墳から出土し、この他遺跡名は不明であるが、築館町照明寺蔵遺物にあり、塩釜式期に位置づけられている。

甕は積み上げによって製作されており、口縁は単純口縁で、頸部でくびれて口縁部外反または外傾する。体部は球形で、調整は口縁部内外面横ナデ、体部外面または内外面とも刷毛目である。このように体部が球形で調整は刷毛目が主である甕は蔵王町大橋遺跡でも出土しており、塩釜式に位置づけられている。

高坏は脚部に孔を有しており、大橋遺跡、今熊野遺跡、岩切鴻ノ巣遺跡などに類例がみられこれらは塩釜式期に位置づけられている。

したがって、方形周溝墓から出土したこれらの土器はすべて塩釜式期に位置づけられるものと思われる。

さて、方形周溝墓から出土した土器は、すべて周溝中からの出土であるが、図示した14点の出土場所をみてみると、西側くびれ部から壺が3点（第12図1、第13図5、6）、東側くびれ部から壺が2点（第12図2、3）、張り出し部周溝から壺が1点（第12図4）甕が1点（第13図9）、台状部東側周溝から壺が2点（第13図1、2）と甕が1点（第13図4）、高坏の坏部と脚部の破片がそれぞれ1点ずつ（第13図10、11）出土している。その他、台状部周溝から壺が3点（第13図3、7、8）出土している。

このうち出土状況が判明しているのは6個体（第12図1、2、3、4、第13図2、10、11）あり、これらについてみてみると第12図1の壺については西側くびれ部北壁から約80㎝ほど離

れた場所から横位で底部がわずかに浮き上がった状態で出土している。

第122図2、3の壺については東側くびれ部西壁近くからまとまって出土している。第12図3は口縁部と体部が別々になり、わずかに離れて出土しており、口縁部は口唇部を斜め上方に向け斜位の状態で、体部は頸部をわずかに斜め上方にむけ、底部が半分浮いた状態で堆積土とほぼ同じ傾きで出土している。第12図2の土器は口縁部は堆積土1層、体部は堆積土3層からと部位によって出土層位に違いがみられる。口縁部はこわれていくつかの破片となっていたが、体部はほぼ完形で、体部上半を斜め上方にむけ、底部がやや浮いた状態で出土している。

第12図4の壺については張り出し部東側周溝西壁の南側からほぼ壁と接して出土している。底部は斜め上方を向き、やや倒立に近い状態で出土している。

第13図2の壺については台状部東側周溝中央部西壁のすぐ近くから出土している。体部上半を東壁にむけて横位の状態で出土している。

第13図10、11の高坏については台状部東側周溝中央付近のほぼ東壁に接して高坏の坏部、脚部破片が1点ずつ出土しており、溝中央部にむかって傾斜している堆積土にそって脚部が壁に近い方から坏がその斜め下から出土している。

これらはいずれも2次的な移動が認められる状態で出土しており、第12図1、2、3、4、第13図2については張り出し部または台状部縁辺におかれていたものが、周溝内に落ち込んだものと思われる。第13図10、11については台状部東側周溝東壁近くから出土していることから台状部の外側に置かれていたものが周溝内に落ち込んだものと思われる。

方形周溝墓に伴ったと考えられる土器には底面から出土した第12図1の壺と第13図9の甕と、張り出し部または台状部縁辺におかれていたと思われる第12図2、3、4、第13図2の壺とがある。

第13図1、3、5、6、7、8の壺、第13図4の甕については不明である。

従って、方形周溝墓に伴った土師器の器種には壺（焼成前底部穿孔）と甕とがあり、そのうち第12図1は西側くびれ部北側の台状部縁辺に、第12図2、3は東側くびれ部西側の張り出し部または北側の台状部の縁辺に、第12図4は張り出し部東側の縁辺に、第13図2は台状部東側の縁辺に置かれたものである可能性が強い。

さて、本遺跡の方形周溝墓の特徴について概説すると次の様になる。

1墓発見され、標高9～10mの自然堤防上に立地している。前方後方形を呈しており、規模は全長約24.5m、最大幅約18mである。周溝は台状部では内側はほぼ直線で、外側はわずかに中央部が膨らみ、隅が狭くなっており、幅は2.5～3mである。深さは1定しておらず、北西隅が浅くなっているが、全体的に南西から北東方向にかけて深くなっている。深さは0.4～１mである。張り出し部では、台状部の周溝に比較すると西側周溝は幅が狭くかつ浅くなっている。

東側周溝も幅は不明だが浅くなっている。また、くびれ部から前方部先端にいくに従って、周溝は狭くなり、しだいに40～20cmと浅くなっている。方形周溝墓に伴なったと考えられる遺物には土師器壺、甕とがある。これらはすべて周溝内の床面または堆積土から出土している。そのほとんどが張り出し部東西周溝およびくびれ部からの出土である。方形周溝墓の近くからは仙台市教育委員会調査の際、同時期の住居跡が3軒発見されている。

ところで、宮城県では昭和46年名取市今熊野遺跡において、県内初の方形周溝墓（9基）が発見されてから、昭和51年高清水町東館遺跡）（1基）、昭和52年多賀城市五万崎地区（1基）、同年安久東遺跡（1基）、昭和53年志波姫町鶴ノ丸遺跡（3基）と発見が相継ぎ、現在5遺跡15基の方形周溝墓が発見されており、安久東遺跡は県内4番目の発見例となっている。

これらの遺跡から発見された方形周溝墓の特徴について概観すると次の様になる。

今野熊遺跡

9基発見されているが、うち精査が行なわれたのは4基（1、4、5、6号墓）である。標高約50～35mの低丘陵上に立地している。1号墓は他の多くの方形周溝墓とは離れており、最も高い標高約50mに位置している。方形であるが、コーナー3ヵ所にブリッジがみられる。規模は1辺21～23mで、4、5号墓より大型である。（6号墓もこの程度と考えられている。）周溝は内側がほぼ直線で、周溝外側が弧を描いており、中央が膨らみ、隅が狭くなっている。幅は

第3表　宮城県内発見方形周溝墓一覧（昭和55年5月現在）

遺跡名（数）	№	立地	形態	規模	出土遺物	土壙	周溝 幅	周溝 深さ	備考
今熊野（9基）	1	低丘陵	コーナー3ヵ所にブリッヂを有する方形	21～23m	土師器壺（底部穿孔）	無	2～3.5mで中央が膨らむ	0.5～1.5mで一定しない	
	2	〃							
	3	〃							
	4	〃	コーナー1ヵ所にブリッヂを有する方形	8.5×8.5	土師器壺、坏	無	0.8mで中央あまり膨らまない	0.7m	
	5	〃		（4号にほぼ同じ）		無			
	6	〃		（1号にほぼ同じ）	土師器壺	無			
	7	〃							
	8	〃							
	9	〃			土師器壺				
東館（1基）	1	台地	隅丸長方形（全周）	15×13	土師器壺（体部穿孔）	無	1.1～2mで東側周溝だけ丸みをもつ	0.7m部分的に深いところがある	
多賀城五万崎（1基）	1	丘陵の先端平坦部	コーナー1ヵ所にブリッヂを有する方形	19.5×17	土師器、壺、甕（複合口縁、底部穿孔はない）		2～2.5m	0.8m	一部のみ調査
鶴ノ丸（4基）	1	台地	隅丸長方形（全周）	10.4×9.2	土師器壺（体部穿孔）甕	無	1～1.5mで中央が膨らむ	0.3～0.4m	
	2	台地	隅丸長方形（全周）	10.3	土師器壺、甕				館に伴う掘と重複
	3	台地	隅丸長方形（全周）	14.5	土師器壺、甕		1.5～1.7m		館に伴う掘と重複
安久東（1基）	1	沖積地	1ヵ所にブリッヂを有する長方形	24.5×18	土師器壺（底部穿孔）高坏	無			溝と重複

2～3.5mである。深さは一定しておらず0.5～1.5mである。出土遺物には土師器壺がある。焼成前底部穿孔土器で、合計7個体が周溝堆積土中から出土している。

4号墓は標高約45mに位置している。方形であるが、コーナー1ヶ所にブリッヂがみられる。規模は一辺約8.5mで、１号墓と比較すると小型である。（5号墓もこの程度と考えられている。）周溝は内側、外側ともやや曲線的で、中央部の膨らみはあまりみられない。幅は約0.8mで深さは約0.7mである。出土遺物には土師器壺、坏とがあり、周溝内から出土している。壺は日常的な土器で、穿孔は認められなかった。なお、出土土器の大半は壺であるが、これらは6、9号墓からも出土している。また、1号墓から離れた標高35m前後の台地からは同時期の住居跡が数軒発見されている。時期は周溝内から出土した土師器壺から塩釜式とされている。

東館遺跡

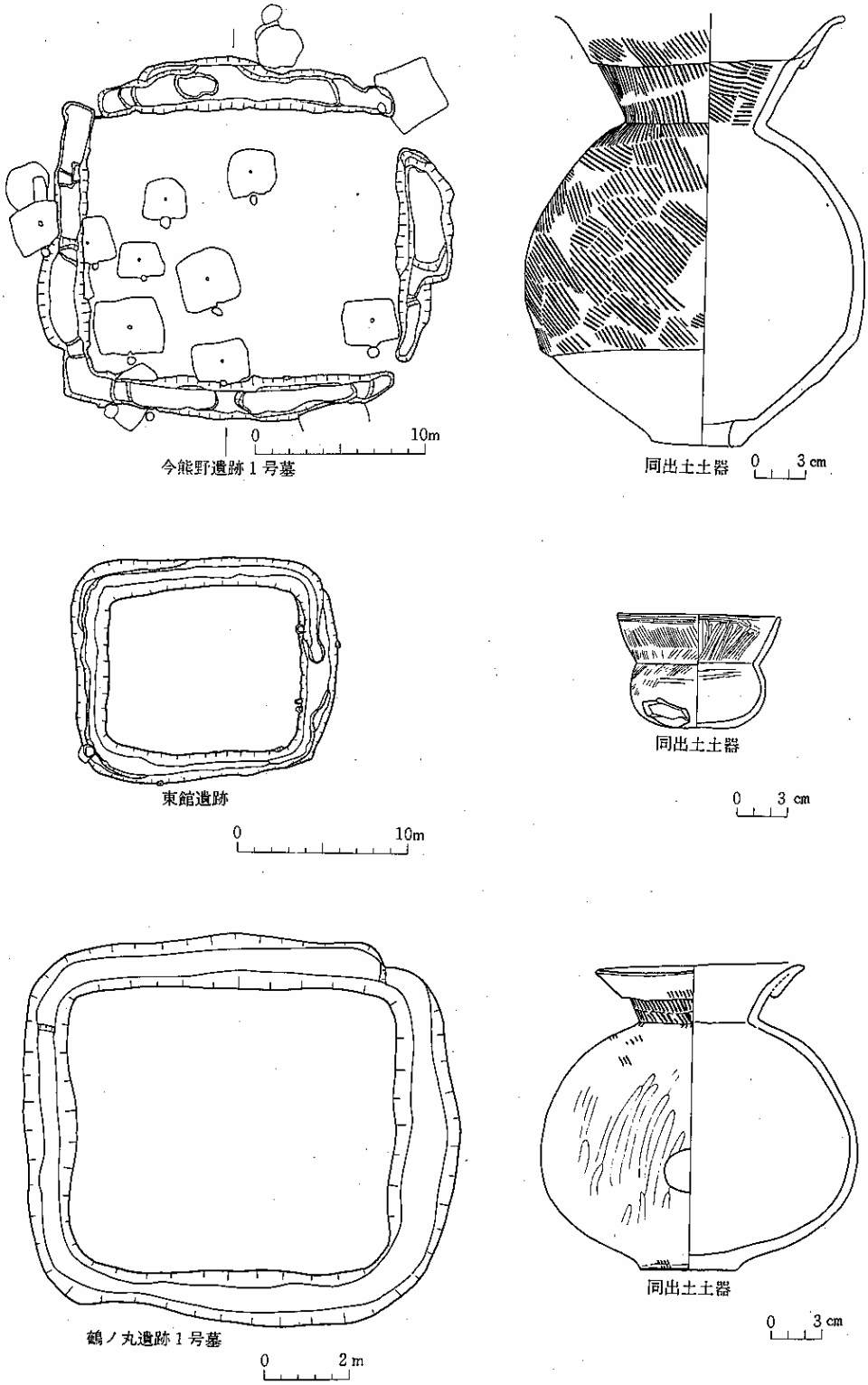
1基発見されている。標高約20mの台地上に立地している。隅丸長方形で、周溝は全周している。規模は15×13mである。周溝は内側はほぼ直線的で、外側は東側周溝だけがやや丸みを持っている。幅は1.1～2.0mである。深さは約70cmであるが、段がついて部分的に深くなるところがあり一定していない。出土遺物には土師器壺がある。溝北側中央部から出土している。壺は焼成後に体部下半穿孔されている。方形周溝墓の近くからは同時期の住居跡は発見されなかった。時期は周溝堆積土最下層から出土した土師器壺から塩釜式とされている。

五万崎地区

1基発見されている。標高17m程度の丘陵先端の平坦部に立地している。形態は全掘していないので不明であるが、発掘区内ではコの字形を呈し、周溝隅に1ヵ所ブリッジが認められる。推定規模は19.5×17mである。周溝は内側がほぼ直線となっている。幅2～2.5m、深さは最も深い所で約80cmである。溝の断面はU字形で、北西隅と北東隅が浅くなっている。周溝内埋土から土師器の甕と壺が出土しているが、甕が多い。この中には複合口縁の壺や底部穿孔のものは含まれていない。時期は周溝堆積土最下層から出土した土師器甕と壺から塩釜式とされている。

鶴ノ丸遺跡

3基発見されている。標高約20mの台地上に立地している。形態は隅の丸い長方形で、周溝は全周している。1号溝は規模は10.4×9.2で、各周溝の中央部が広くなっており、隅が狭くなっている。幅は1.5～1.0mで、深さは30～40cmである。周溝内底面直上から土師器甕と体部穿孔された土師器壺が出土している。2号墓は一辺が10.3m、溝の幅は約1.2m、溝中からは土師器壺、甕が出土している。3号墓は一辺14.5m、溝の幅は1.5～1.7m、溝中からは土師器壺、甕が出土している。周辺からは同時期の住居跡が3軒発見されている。時期は1号墓底面直上から出土した土師器甕と壺から塩釜式とされている。



第38図．県内で発見された主な方形周溝墓とその出土土器

さて、これら県内発見の方形周溝墓を安久東遺跡の方形周溝墓と比べてみると、立地では他の4遺跡の方形周溝墓が標高20m前後の丘陵や台地上に位置しているのに、安久東遺跡だけが標高9～10mの名取川の自然堤防上に位置しており、立地の上で他の方形周溝墓とは大きな違いがみられる。

形態であるが、大きく分けると周溝が全周するもの（東館、鶴の丸遺跡）と、ブリッジを有するもの（安久東、今熊野遺跡、五万崎地区）とに分かれる。さらにブリッジを有するものは周溝中央部に有するもの（安久東遺跡）と、隅に有するもの（今熊野遺跡、五万崎地区）とに分ける事ができる。安久東遺跡のものはさらに、張り出し部を有するという点で、他の方形周溝墓とは形態的に大きくかけ離れている。

規模では、一辺が15m以下の比較的小形のものは今能野遺跡4号墓（約8.5m）、東館遺跡（15×13m）、鶴ノ丸遺跡（１号墓10.4×9.2m、2号墓10.3m、3号墓14.5m）などで、それより大きい比較的大形のものは、安久東遺跡（24.5×18m）、今熊野遺跡1号墓（21～23m）、五万崎地区（19.5×17m）から発見されている。

器種には壺、甕、坏とがある。ほとんどが周溝内から出土したもので、これらの大部分は供献用の土器として用いられたものと思われるが、日常的な土師器を使用しているもの（五万崎地区出土の甕、壺、東館遺跡出土の壺、鶴ノ丸遺跡1～3号墓出土の壺、甕、今熊野4号墓の壺）と、仮器として作られたものを使用しているもの（安久東遺跡出土の壺、今熊野1号墓出土の壺）とがある。安久東、今熊野遺跡出土のものは焼成前底部穿孔土器であり、東館、鶴ノ丸遺跡出土のものは焼成後体部穿孔土器である。さらに、安久東遺跡出土の壺は、体部外面と口縁部内面に丹が塗られている。

1遺跡における方形周溝墓の数は1基だけの発見が、安久東、東館、五万崎地区で、他の2遺跡は3～9基発見されている。

集落との関係ではほとんどの遺跡の付近に同時期の住居跡が発見されており、発見されていないのは東館遺跡だけであるが、これは調査範囲が狭いため集落との関係については不明である。したがって、方形周溝墓の多くは集落内に存在していたものと考えられる。

なお、県内の方形周溝墓からはいずれも主体部が発見されていない。また、台状部に低いマウンドの存在も予想されるが、これも確認例は報告されていない。

以上、本遺跡も含めた宮城県内の方形周溝墓の特徴について述べてきたが、本遺跡のそれと種々の点で相違点と類似点が認められる。

主な相違点としては立地面では沖積地に存在しており、規模の面でも、東館、鶴ノ丸、五万崎地区、今熊野（4、5号墓）遺跡より大型で、形態面でも張り出し部を有する点で違っている。

類似点が認められるのは、今熊野1号墓との規模、台状部周溝の形状、出土遺物においてであり、どちらも規模が20m以上で、台状部の周溝が内側が直線で、外側は中央部が膨らみ、隅が狭い形態をとり、出土遺物も焼成前底穿孔土師器壺であるという点で類似している。

さて、県内には5遺跡15基の方形周溝墓が存在するが、安久東遺跡の方形周溝墓はその中でも特異な存在であり、同形態のものは県内には存在しないことがわかった。

県外の方形周溝墓をみてみると、方形周溝墓が東京都宇津木遺跡（大場：1973）で確認されてから、昭和44年大塚初重、井上裕弘両氏によって、集成（大塚、井上：1969）されるまでには本遺跡のような形態のものは発見されていなかった。台状部の前面に張り出し部を有する形態の方形周溝墓が注目されるようになったのは最近になってからのことで、関東地方を中心に群馬県で3例、遺跡名では下佐野遺跡（飯塚：1978）、鈴ノ宮遺跡（田口：1978）、東流通団地内遺跡（1978）が、埼玉県で2例、遺跡名では石蒔Ｂ遺跡（佐藤：1978）、塚本山遺跡（埼玉県委：1977）が、千葉県で5例、遺跡名では阿玉台北Ａ遺跡（菊地：1975）、東間部多遺跡（須田：1974）、諏訪台遺跡（須田：1975）、飯合作遺跡（沼沢：1977）などが知られている。このうち、東間部多（2号墳）や諏訪台（33号墳）、飯合作（1号、2号墳）は「小規模低盛土前方後方墳」として紹介されているものである。

これらの特徴をまとめてみると、立地の面では段丘上や舌状台地上に位置している。形態的

第４表　前方後方形（周溝）墓一覧

No	遺跡名	遺構名	所在地	平面形態	規模（全長×最大幅）m	溝溝の形状	出土遺物（出土数）	出土場所	立地	備考
1	安久東		宮城県仙台市	前方後方形（前方部先端不明）	24.5×18m	内側　ほぼ直線 外側　丸みがある 四隅　不明 深さ　一定しない 幅2.5～3深さ0.4～1	土師器壺(9) 焼成前底部穿孔 土師器高坏(1)	くびれ部(6) 東側周溝(3) 不　明(1)	沖積地 自然堤防上	1基のみ検出近くに同時期住居有
2	下佐野	下佐野Ⅰ	群馬県高崎市	前方後方形（ブリッジ前面に浅い溝有）	1辺約30m		小形彷製鏡 ガラス小玉 土師器	くびれ部（鏡） 後方部周溝（小玉） 周溝全域（土師器）	河岸段丘上	5基以上住居有（5軒）
3	鈴ノ宮	7号墓		前方後方形（前方部右隅ブリッジ有）	25.5×6.9m	内側　直線 外側　丸み 四隅　狭い 深さ　不明 幅　3～4m	土師器（数十）（日常的）	両くびれ部 後方部北側 後方部南	河岸段丘上	3基以上住居有
4	東流通団地内遺跡		群馬県佐波郡東村				土器	周溝	台地の縁 低台地の縁	8基以上
5	石蒔B遺跡	石蒔B·8号墓	埼玉県大里郡岡部町	前方後方形（前方部右隅ブリッジ）	（周溝内側）最大長 22.93m		台付甕 坩	周溝	丘陵	11基
6	塚本山	33号墓	埼玉県	前方後方形	20×21.5m	四隅　狭い 深さ　2～2.5m 幅　1～3m	土師器壺、甕 台付甕、高坏	周溝底面 東側周溝	台地上	
7	阿玉台北A	阿玉台北A 7号墳	千葉県香取郡小見川町	前方後方形（全周）	（周溝内側）最大長 25.5m	前方部浅い	土器	周溝	台地上	3基
8	東間部多	2号墳	千葉県市原市	前方後方形（前方部右隅ブリッジ）	41×32m	内側　直線 外側　丸みある 四隅　狭い 深さ　一定しない 幅　5.5m	壺（有段口縁） 焼成後穿孔 甕、坩、高坏	墳頂部攪乱層 周溝内 くびれ部	台地の縁上	
9	諏訪台	33号墳	〃	前方後方形（前方部右隅ブリッジ）	21×17m	内側　ほぼ直線 外側　丸み 四隅　狭い 深さ　くびれ部深い 後方部の各辺 幅　2m前後	坩(1) 焼成後穿孔	後方部 北側周溝底	台地の縁	
10	飯合作	1号墳	千葉県佐倉市	前方後方形			ガラス玉3	木棺内	台地上	
11	〃	2号墳	〃	前方後方形	約30m		土器	周溝	台地上	

には台状部周溝の内側がほぼ直線になっており、外側中央部が、膨らんで隅が狭くなったものが多いが、内側が直線になっていないものもある。張り出し部前面には溝を有し、一方がブリッジ状になっているものと、溝を有さないものとがある。前者は張り出し部の幅が台状部に比べて狭く、しかも先端部に行くにしたがって狭くなっているものが多い。後者は張り出し部の幅が台状部に比べて広くなっているものが多い。遺物の出土場所は周溝内の堆積土からの出土がほとんどで、そのうちくびれ部分から、まとまって出土している例が何例かある。出土遺物は、土器がほとんどで、日常的な土師器の壺、甕、坩、高坏が多いが、焼成後ではあるが、穿孔されている土器も出土している。なお、特殊な例として、鏡、小玉が出土している例がある。これを本遺跡と比較してみると、立地面では違いがみられるが、形態面では台状部は類似しており、張り出し部は本遺跡は溝によって切られているため、前面の形状は不明だが、先端部に行くにしたがって狭くなっていることから、前面に溝を有す下佐野Ⅰ号墓、鈴ノ宮7号墓、東間部多2号墳、諏訪台33号墳と類似しており、くびれ部から張り出し部先端にいくに従って周溝がだんだんと浅くなる点では東間部多2号墳と類似している。また出土遺物がくびれ部に集中し、しかも焼成後ではあるが、底部穿孔の壺が出土している点などでも、東間部多2号墳と著しい類似点がみられる。

しかし、形態、構造、出土遺物や出土状況において類似点がみられても、これら開東における東間部多2号墳などの前方後方形の墓は、前方後方墳であるか、前方後方型周溝墓であるか見解が分かれており、これらと本遺跡の周溝墓とを直接比較するのは問題があるとは思われる。ここでは本遺跡の周溝墓がこれらといくつかの点で類似していることだけを確認しておきたい。

2、古墳石室

(1) 年代

仙台平野において横穴式石室を有する古墳の営なまれた時期については現在判明している資料によると、7世紀前半代からで、下限については平安時代前期までとされている。（氏家：1977）

しかし、福島県では真野20号墳、24号墳などのように6世紀中葉までさかのぼる可能性のある横穴式石室が存在しており、このことから氏は県内においても6世紀中葉前後までさかのぼる横穴式石室が存在する可能性を示唆されている。このように、現時点における上限については県内では特定するまでには至っていないが一応大雑肥に6世紀中葉前後～平安時代と捕えておきたい。ここでは、その範囲内で、本遺跡のような特徴を持つ石室が時期的にどの辺に位置づけられるのかについて、本遺跡周辺における他遺跡の横穴式石室と構造、規模等を比較しながら若干考察してみたい。

本遺跡の石室は上半部と奥壁が失なわれており、側壁の石が2～3段残っているだけである。

石室は河原石積によっており、石室の平面形は長方形で、規模は長さ約2.8m、最大幅約75cmである。高さは残存高約30cmである。

石室構造上最大の特徴は側壁南端が細長く他の側壁の石よりは大きめの石が横におかれ、しかも、その先端が両側壁石列よりも内部に7～11cm突き出されていることである。

玄門、羨道の区別はないが、石室は形態的には南に開く、つまり横穴式石室の形をとっている。しかし、この石室は最大幅が約75cmであるなど規模が小さく、この程度の規模では横から屍体埋葬するのには無理があるものと思われる。したがって形態的に横穴式石室の形をとっていても、実際屍体を埋葬するのにあたっては竪穴式石室のように上から行なわれたことが十分に予想されるのである。

さて、本遺跡を中心とする名取川の南の沖積平野には安久東遺跡をはじめ、安久諏訪古墳、伊豆野権現古墳、仙台市教育委員会調査安久東古墳、安久遺跡発見石室など多くの横穴式石室の系統をひくと思われる河原石積の小石室が存在している。しかし、そのほとんどは現在墳丘を失なっており、全面発掘により偶然に発見されたものが多い。

このうち、安久諏訪古墳、安久東古墳については発掘調査が行なわれ、その石室の形態、規模等が知られている。

安久諏訪古墳は平面形は中央が膨らんでおり、規模は長さ3.63～3.70cm、奥壁幅1.6～1.65m、前壁幅13～1.28m、最大幅2.08～1.92mとなっている。奥壁には大石が2個積み上げられ、玄門部にも門柱状に大石を立てている。玄室、玄門、羨道など各部の分化がみられ、本格的な横穴式石室の形態をとっているなど、本遺跡の石室とは大きな違いがみられる。年代については石室平面形態の特徴により7世紀中葉の年代があたえられている。

仙台市教育委員会調査の安久東古墳は4基の石室が発見されているが、いずれも河原石積による石室である。いずれも平面形は長方形である。石室内部構造が未分化で、玄室、玄門、羨道などの各部の分化が全くみられず、しかも横穴式石室の形態をとりながら、実際の埋葬にあたっては竪穴式石室のように上から行なわれたと考えられているものであり、本遺跡の石室とは構造的には非常に類似している。規模においては１号石室は一部が破壊されているため長さ不明であるが、幅約80cmと本遺跡の石室幅とほぼ同じ値を示しているのに、2～4号石室は長さ1.6～1.7m、幅30～40cmで、特に幅が非常に狭くなっている。したがって、構造では１～４号石室は似ているが、1号石室と2～4号石室では規模の面で大きな違いが認められる。年代については3号石室の底面下の積土層中から土師器坏（内黒、回転糸切底）が出土していることから、3号石室について上限年代は9世紀ごろと考えられており、形態、規模等において類似する2、4号石室も同時期とされている。なお、2～4号石室については石室の幅が狭いことより直接屍体を埋葬することは不可能と思えることから、平安期における火葬骨墓的なものである可能

性が指摘されている。1号石室については形態、規模等において本遺跡の石室と類似していることから、本遺跡の石室と同時期と思われる。従って本遺跡付近には、構造・規模の点からみて、3つのタイプの石室(①安久諏訪古墳の石室②本遺跡および仙台市教育委員会発掘安久東1号石室③仙台市教育委員会発掘安久東2～4号石室）が存在していることになる。

本遺跡の石室や安久東古墳1号墳の石室のように横穴式石室の形態を取りながら、実際の埋葬にあたっては上方から行なう構造を持つ石室は末期変形古墳といわれ、7世紀前半代に全盛をみた横穴式石室から姿をかえたもの（氏家：1977）とされている。

従って、年代については本格的な横穴石室を有し、7世紀中葉に位置づけられる安久諏訪古墳よりは新しく、また、葬制からみて、火葬墓的な平安時代の2～4号石室よりは古い事が考えられる。このことから、本遺跡の石室は8世紀頃の年代があたえられるものと思われる。

(2) 副葬品について

副葬品には武器と馬具とがあるが、特記すべき事は馬具の出土である。前述のように横穴古墳を除くと古墳から轡がほぼ完全な形で発見された例は県内では初めてである。川袋古墳出土のものも保存は良いが、それでも鏡板と銜のみの出土であり、他遺跡出土のものはその形状さえ判明しないものが多い。

轡の構造をみてみると、鏡板は輪鏡で立聞があり、銜は二連式で、2本の棒状の引手があり銜先、引手両端の壺は環状になっており、手網に連結する方の壺はこの部分で約40度外側に傾むいている。このような簡単な構造の轡は後期の馬具にみられるもので、全国的には6世紀から7世紀にかけて急速に増加している馬具である。川袋古墳、岩手県五条丸古墳出土のものも同じ構造であり、福島県笊内古墳出土のもののように鏡板に杏葉と同形のものを用い鍍金された儀装馬具は県内では出土していない。県内出土馬具がほぼ鉄製であるのに対し、本遺跡出土の飾帯金具だけは鉄地に銅を張り、その上から頭部に銀をかぶせた笠鋲を打ちこんだものであることは被葬者の身分を考える上でも特記すべきことである。また、覆輪や磯金具などは出土していないが、第18図2、3が鞍(しおで)だとすると鞍も副葬されていたことになる。もしそうだとすると石室には直刀、刀子、鉄鏃などの武器と轡、鞍などの馬具が副葬されていたことになる。

第5表　宮城県内出土馬具遺跡一覧表

番号	古　　墳	形態（内部主体）	馬　　具	文献、その他
1	雁田横穴Ｂ４号墳（亘理町）	横　　穴	轡	
2	法領塚古墳（仙台市）	円　墳（横穴式石室）	轡	
3	川袋古墳１号墳群（利府町）	円　墳（横穴式石室）	轡、飾帯金具、鉸具	
4	亀井囲横穴群（松山町）	横　穴（有　台　床）	轡	
5	安久東遺跡（仙台市）	不　明（横穴式石室）	轡	
6	炭釜横穴群（柴田町）	横　　穴	鐙	
7	持長地遺跡（蔵王町）		鐙	

3、住居跡

(1) 出土土器の観察

住居跡出土土器には土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器があるが、いずれも出土量が少ないか、または器形に若干の違いがみられても、製作技法、器面調整に違いがみられず、分類するまでには至らなかった。また、土師器、須恵器、赤焼土器の坏については、それぞれの特性を得るために①口径、②底径、③器高、④底径と口縁径との法量、⑤色調について計測を行なった。計測は住居跡出土遺物を対象にして、図面から行なった。なお、ここではすべて実測図の作製できたものを対象にしている。

土師器

土師器には坏と甕がある。

坏　口径は12～17cmに分布しているが、ほとんどが13～14cm、16～17cmに集中（全体の約71％）している。底径は4～7.3cmに分布しているが、ほとんどは4～6cmに集中（全体の約81％）している。器高は3.9～6.6cmに分布しているが、4～5cm、5～6cmに集中（全体の約84％）している。口径1に対する底径の法量は0.32～0.45である。色調は色相、明度、彩度の違いから7種類のものが認められたが、数量的には浅黄橙色（7.5ＹＲ8/4）が、次いで橙色（7.5ＹＲ7/6）が多い。

製作に際しロクロを使用しており、底部切り離し技法は回転糸切りで、再調整はみられない。器形は体部から口縁部までやや直線的に外傾するもの、体部から口縁部まで丸みをもって外傾するもの、体部は丸みをもって外傾し、口縁部わずかに外反するものとがある。内面はヘラミガキ黒色処理されている。

甕　製作に際しロクロを使用している。口縁部外反、または、外傾し、頸部で弱く屈曲する内外面ともロクロ調整痕がみられる。体部下半にヘラケズリのみられるものなどがある。器形は長胴形を呈するものと思われる。

須恵器

須恵器には坏があるが、土師器に比べると出土量は少ない。

坏口径は13.9～14.8cmに分布しているが、13.6～13.9cmに集中（約57％）している。底径は4.1～5.5cmに分布しており、まとまりはみられない。器高は3.9～5.1cmに分布しており、4.3～4.7cmに集中（約66％）している。口径１に対する底径の法量は0.34～0.39である。色調は色相、明度、彩土の違いから４種類のものが認められたが、数量的には灰白色（2.5Y7/1）が多い。

なお、須恵器については出土量が少ないため、出土、分布上の特性が必ずしも正しくあらわ

れていない面もあるものと思われる。

底部切り離し技法はすべて回転糸切りで再調整はない。器形は体部から口縁部までやや直線的に外傾するものと体部から口縁部まで丸みをもって外傾するものとがある。

赤焼土器

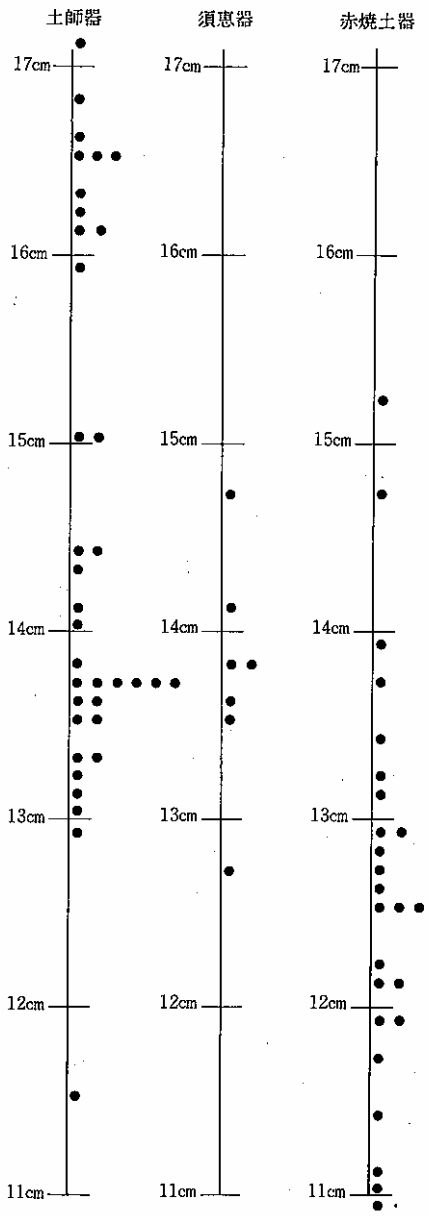
製作に際しロクロを使用し、底部の切り離しが回転糸切り技法により、内外面に全く再調整の加えられていないものである。坏と高台付坏がある。

坏　口径は11～15.3cmに分布しているが、11～14cmに集中（全体の約92%）している。

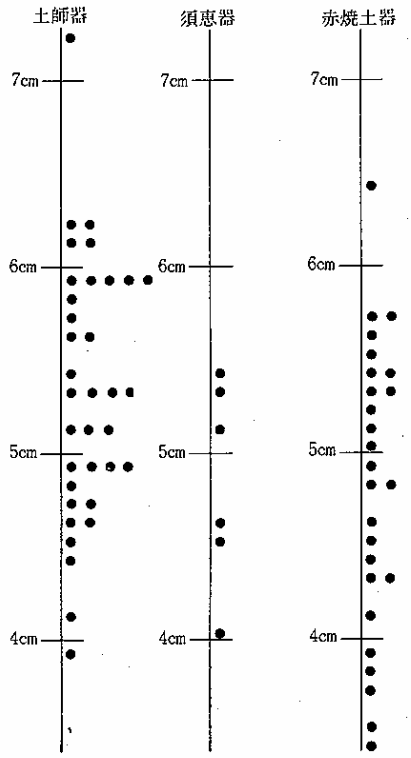
底径は4.5～6.5cmに分布しているが、4.2～5.8cmに集中（全体の約77%）している。器高は3～4.6cmに分布しているが3.5～4.4に集中（全体の約85%）している。口径1に対する底径の法量は0.27～0.48である。色調は色相・明度・彩度の違いから7種類のものが認められた。数量的には浅黄橙色（7.5ＹＲ8/4）が多く、橙色（7.5ＹＲ7/6）、同じく橙色（5ＹＲ7/6）がそれに次ぐが、全体にばらつきがみられる。

器形には体部から口縁部までやや直線的に外傾するもの、体部から口縁部まで丸みをもって外傾するもの、体部は丸みをもって外傾し、口縁部わずかに外反するものとがある。

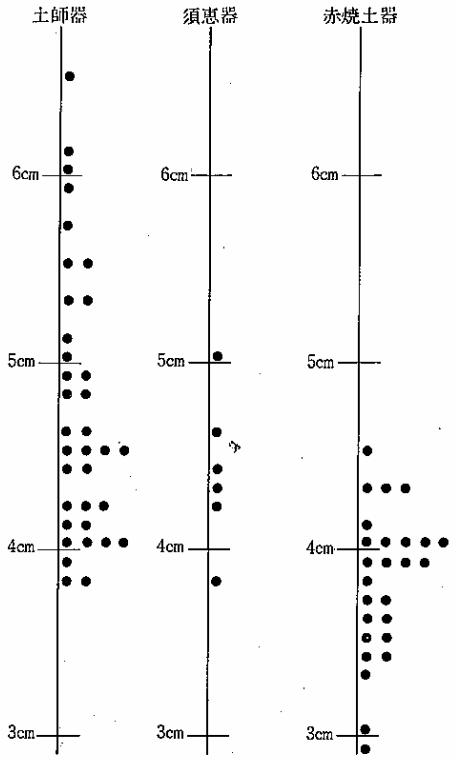
高台付坏　2点出土している。高台部が短く八字状に開き外反し、体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾するものと、高台部が坏部と比べて長く八字状に開き外傾し、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するものとである。



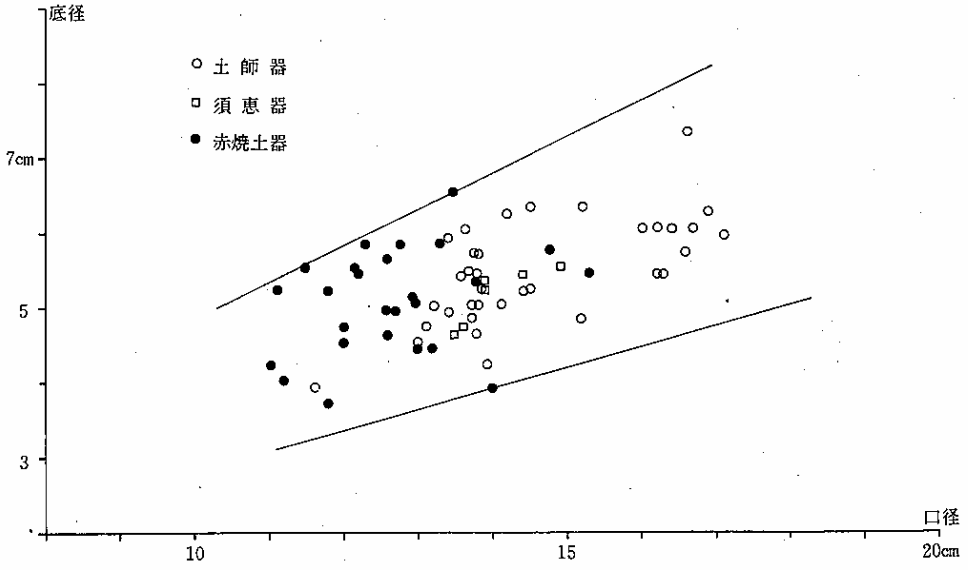
第39図　坏口縁径頻度分布図



第40図　坏底径頻度分布図



第41図　坏器高頻度分布図



第42図　坏の法量

灰釉陶器

坏と長頸瓶とが出土している。

坏　1点だけ出土している。ほぼ完形である。焼きは堅くしまって、器面にはゆったりとしたロクロ目が残っている。器形は体部から口縁部にかけてゆるやかに外傾する。底部には付け高台がみられ、底面よりもやや広めにつけている。淡緑色の釉が口縁部を中心にかけられている。胎土は灰白色を呈する。

長頸瓶　数点出土している。体部下半部の破片と肩部の破片とがある。淡緑色の釉が肩部と体部下半にみられる。器面調整は外面にケズリが、内面にはロクロ調整痕がみられる。胎土は灰白色を呈しており、堅緻である。

なお、灰釉陶器の製作年代については釉のかかり具合等から11世紀と思われる。

(2) 出土土器の組み合わせとその年代

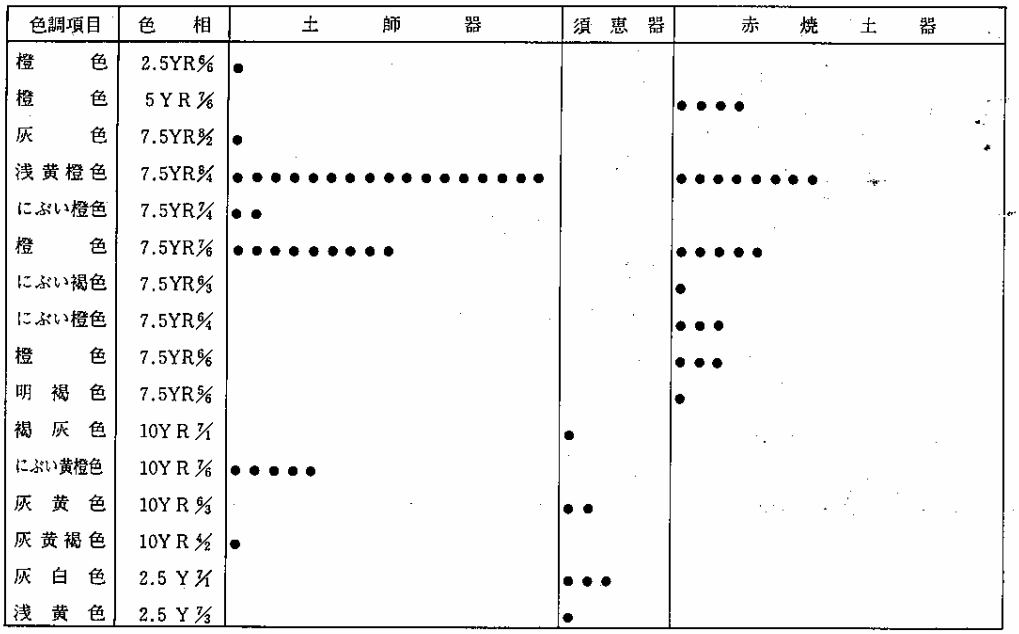
ここでは第1～第3住居跡から出土した土器の共伴関係、組み合わせ関係などについて検討し、その年代について考えてみたい。

第1住居跡の共伴関係をなす土器には、住居跡床面、貯蔵穴状ピット内出土土器とがある。これらには土師器坏、須恵器坏、赤焼土器坏があるだけで器種は少ない。

第2住居跡の共伴関係をなす土器には、住居跡床面、貯蔵穴状ピット、カマド、煙道内出土土器がある。これらには土師器甕、坏、須恵器坏、赤焼土器坏がある。

第3住居跡の共伴関係をなす土器には、住居跡床面、貯蔵穴状ピット、カマド内出土土器がある。これらには土師器坏、赤焼土器坏があるだけで器種は少ない。

以上の各住居跡共伴土器は第1、3号住居跡には第2号住居跡にみられる土師器甕がみられ



第43図　色調分布図

第6表　図示土器集計表

		弥生土器	土師器					須恵器		赤焼土器		灰釉陶器		緑釉陶器	中世陶器			
			甕	甕	高坏	坏	高台付坏	坏	壺	坏	高台付坏	坏	長頸瓶	椀	甕	擂鉢	火鉢	壺甕類
遺構に伴う土器	方形周溝墓		6	1	1													
	第1号住居跡					7		1		3								
	第2号住居跡			3		12		3		9								
	第3号住居跡					3				2								
	基本層位第Ⅳ層	9																
	基本層位第Ⅱ・Ⅲ層		3	2		1				1						1		
遺構に伴わない土器	方形周溝墓堆積土		5	1														
	第1号住居跡堆積土			3		3				1	1							
	第2号住居跡堆積土			3		7		2		11	1	1	1					
	第3号住居跡堆積土			2		2		1		1								
	5号溝堆積土															1		
	7号溝堆積土			1												1	1	
	8号溝堆積土		2															
	不明溝堆積土													1	4			
	表土および出土地点不明		2			1	1		1				2					3

ず、第3号住居跡は第1、2号住居跡にみられる須恵器坏がみられないなど、器種の組み合わせという点で違いを示すが、その中にはお互い共通するものを含んでいる。土師器坏、赤焼土器坏がそれである。その他、共通しない土師器甕、須恵器坏もこれらといっしょに出土しているので、共伴しているものと思われる。

以上のことから、3軒の佳居跡における土器の組み合わせは、土師器甕、坏、須恵器坏、赤焼土器坏となる。これらはいずれも製作に際しロクロを使用しており、底部切り離し技法の判明する土師器坏はすべて回転糸切り技法によって行なわれている。このような特徴をもつ土師器は東北地方南部における編年において、塩釜市表杉ノ入貝塚出土資料（加藤：1954）を標式として設定された表杉ノ入式（氏家：1957）として理解されている。従って、一括して出土した須恵器坏、赤焼土器についても同時期と思われる。

(3) 出土土器の特徴について

安久東遺跡において住居跡に伴なって出土した土器はいずれも表杉ノ入式期に比定することができた。ところで、表杉ノ入式期の土器は氏家氏（氏家：1967）によって型式が設定されて以来、多くの人によって細分が試みられてきている。

最近紹介された高清水町手取、西手取遺跡や、同五輪遺跡、白石市御所内遺跡の報告書では、表杉ノ入式期内における新旧関係が住居跡の切り合い等から論ぜられており、同型式の土器が共伴関係等により何群かに分けられる傾向が指摘されている。

しかし、本遺跡の場合には前述のように土師器坏において底部切り離し技法がすべて回転糸切りで、再調整の施されているものが全く伴なっていないことから、一つのまとまりを持つ、一群の土器であるものと考えられる。

その特徴としては、前述の製作技法をもつ土師器坏、甕、須恵器坏、赤焼土器が組み合うこと、土師器甕はすべて製作に際しロクロを使用していることをあげることができる。

また、計測値から見た場合、坏は口径16～17cmの比較的大形のものが土師器に、口径13～14cmの中形のものが土師器、須恵器、赤焼土器に、口径が13cmより小さい小形のものが赤焼土器にみられる。

この傾向は器高についてもみられ、器高が5cm以上の比較的高いものが土師器に、器高が4～5cmのものが土師器、須恵器、赤焼土器に、4cm以下の低めのものが赤焼土器にみられる。

底径については土師器、須恵器、赤焼土器間ではあまり違いはみられない。従って全体的にみると、土師器は底径に比して口縁径が大きく、比較的器高の高い土器が多く、赤焼土器は底径に比して、口縁径が比較的小さく器高の低めの土器が多く、須恵器はその中間のタイプということになる。

色調については土師器は浅黄またはにぶい橙色のものがほとんどであり、須恵器も灰白色系のものでまとまっているが、赤焼土器はあざやかな橙色から明褐色まで色調に変化がみられる。

なお、須恵器については前述のように出土量が少ないため、出土、分布上の特性が必ずしも正しくあらわれていない面もあるものと思われる。

さて、本遺跡においては出土土器において、上記のような特徴が認められた。

ところで、第2号住居跡の堆積土からは灰釉陶器が出土している。これは床面に近い層からの出土であることから、住居跡の年代については灰釉陶器の年代とさほど違わないものと思われる。従って住居跡の上限は11世紀頃と思われ、供出する土器についても同様な年代があたえられるものと思われる。

(4) 住居跡の構造

以上のような土器の年代から、住居跡はすべて表杉ノ入式期に属するものと考えられる。安久東遺跡からは3軒の住居跡が検出されたが、3軒とも遺存状態が悪く、しかも、溝によって切られていたり、住居跡の半分以上が調査区外のものもあり、平面形、規模、柱穴などについては不明な点が多い。ここでは確認面、周溝、カマド、貯蔵穴、遺物の出土状況等について検討し、特徴について考えてみたい。

すべて基本層序第三層上面で確認された。周溝はみられない。

カマド付設位置は、第1、2号住居跡が東壁南側、第3号住居跡が北壁に、住居壁に対してほぼ直角に付設されている。両側壁は第1号住が地山削り出しで、第2号住が自然石を用い、これに粘土を被せて側壁を構築している。

第3号住は両側壁が失われているため不明である。燃焼部底面はくぼんでおり、第1、2号住奥壁から前方にわずかに傾斜しており、3号住はほぼ水平である。焼道部は溝状を呈しており、第1号住がほぼ水平、第2、3号住が燃焼部方向に緩やかに傾斜している。

貯蔵穴状ピットは、いずれの住居跡もカマド右側にみられる。第1号住は平面形が長楕円形

で、規模は80×60㎝、深さは30㎝である。第2、3号住は平面形が円形で規模は径48～70㎝で、深さはそれぞれ35㎝、20㎝である。

遺物の出土状況をみてみると、第2号住居跡が数量的に他の住居跡より多く出土している。

出土土器には土師器坏、甕、須恵器坏、赤焼土器坏があるが、比較的出土量の多い第2号住居跡での数量比をみてみると、土師器坏12、甕3、須恵器坏3、赤焼土器9個となっており、土師器坏と赤焼土器坏が多く、須恵器は少なくなっている。

4、溝

溝から出土している遺物には土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器、土錘、石磨臼、古銭とがある。すべて堆積土からの出土である。

土師器には壺、坏、甕とがある。すべて小破片であるが、壺は内外面刷毛目で外面に丹が塗られていることから、塩釜式に位置づけられるものと思われる。坏についてはロクロを使用していることから表杉ノ入式と思われる。甕についてはロクロを使用しているものは表杉ノ入式と思われるが、ロクロを使用していないものについては小破片のため不明である。

須恵器は坏と甕が赤焼土器は坏が出土しているが、これらは表杉ノ入式の土師器坏に伴っており、同時期と思われる。

中世陶器には甕、擂鉢、火鉢、壺、甕類とがある。

甕については頸部でくびれ、口縁部直立ぎみで、口縁先端は丸みをもち、内側が受口状になり、口縁帯を持つなど、東北窯跡出土のものとよく似ていることが藤沼氏によって指摘されている。（藤沼：1976）従って、年代については鎌倉時代後半の年代があたえられるものと思われる。

擂鉢については時期は不明である。

火鉢の年代は決めかねるが、このような一種の雷文をもつ瓦質の火鉢は、白石市湯ノ倉館、大和町御所館、八谷館などで出土しており、中近世における普遍的な遺物とされている。

次に溝の年代については第Ⅱ層中から中世陶器が出土しており、これらすべての溝が第Ⅱ層上面より掘りこまれていることから中世以降と思われる。

しかしこれらはすべて同時期に存在したのべはなく、溝間にはいくつかの切り合いがあり、新旧関係が認められる。

切り合いから判明した新旧関係は次の通りである。1、3、4、8号溝→2号溝、７、9号溝→6号溝である。

なお、6号溝の堆積土からは近世以降の遺物が多量に出土することから、これらの溝中では新しい時期のものと思われる。

溝の性格については、大小9本の溝が発見されたが、ほぼ東西方向に延びる溝が6本、南北方向に延びる溝が3本で、直交、平行関係にあり、企画的であること、溝の堆積状況により、1、2、3、4、5、6、8号溝については水の入っていた溝であることが考えられる。

そのような施設の一つとして考えられるのに中、近世の館の周囲にめぐらされた堀があるが、本遺跡発見の溝もそのいくつかについてはそのような性格を持ったものだったかもしれない。

Ⅴ、まとめ

1、安久東遺跡は名取川によって形成された標高9～10mの自然堤防上に立地している。

2、安久東遺跡からは縄文時代の遺物が発見されておらず、安久東において人々の活動がみられるのは次の弥生時代からである。

3、安久東遺跡では弥生時代、古墳時代前期、奈良時代、平安時代、中、近世の遺構や遺物が出土している。

4、遺構には方形周溝墓1基、古墳石室1基、竪穴住居跡3軒、溝9本があり、遺物には土器（弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、縁釉陶器、中世陶器）、漆器、土製品（土錘）、石製品（管玉、石臼）、鉄製品（直刀、刀子、鉄鏃、轡など）、古銭などがある。

5、方形周溝墓は張り出し部を有しており平面形は前方後方形を呈している。年代は周溝内から出土した土師器壺、甕から塩釜式期とされた。

6、石室遺構は末期変形古墳の形態をとっており、その形態的特徴等から築造年代は8世紀と考えられる。

7、竪穴住居跡は出土遺物からすべて平安時代に属すると考えられ、竪穴住居跡から出土した土器は一群にまとめることができた。

8、溝は中世の遺物を含む第Ⅱ層上面から掘りこまれていることから、年代は中世以降と思われる。

〈引用・参考文献〉

伊東信雄、氏家和典（1968）：「仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書」仙台市教育委員会

伊東信雄、板橋　源（1978）：「猫谷地、五条丸古墳群」岩手県江釣子村教委

いわき市史編さん委員会編（1971）：「中田装飾横穴」いわき市史別巻

氏　家　和　典（1977）：「仙台平野における横穴式石室古墳について」研究紀要Ⅳ　宮城県多賀城跡調査査研究所

氏　家　和　典（1972）：「仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書」仙台市教育委員会

太　田　昭　夫（1980）：「大橋遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ　宮城県文化財調査報告書第　集

太　田　昭　夫（1980）：「御所内遺跡」東北自動車道報告書Ⅱ　宮城県文化財調査報告書第63集

太　田　昭　夫（1980）：「宇賀崎1号墳」宮城県文化財調査報告書第67集

大塚初重、井上裕弘（1967）：「方形周溝基の研究」駿台史学24

小野寺祥一郎（1979）：「五輪C遺跡」宮城県文化財調査報告書第61集

上総国分寺台遺跡調査団（1975）：「諏訪台古墳群調査概要」上総国分寺台遺跡調査団　千葉県市原市教育委員会

上総国分寺台遺跡調査団（編）（1974）：「東間郡多古墳群」『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ』早稲田大学出版部

門脇禎二、甘粕健一（1980）：「体系、日本歴史Ⅰ、古代専制国家」日本評論社刊

工藤雅樹、藤沢邦彦他（1979）：「伊豆沼古窯熊狩A窯跡発掘調査報告」東北歴史資料館資料集１

桑　原　滋　郎（1976）：「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』

群馬県教委（1978）：「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報・下佐野Ⅰ遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』群馬県教育委員会

原史墓制研究会（1973）：「原史墓制研究Ⅰ　方形周溝墓研究そのⅠ」文献目録編

原史墓制研究会（1974）：「原史墓制研究2　方形周溝墓研究その2」研究史編上

原史墓制研究会（1976）：「原史墓制研究4　方形周溝墓研究その4」研究編　中部日本

小井川和夫（1978）：「白地横穴古墳群」『中田町文化財調査報告書第1集』中田町教育委員会

小林行雄（編）（1977）：「世界考古学大系3日本Ⅲ」平凡社

埼玉県教委（1974）：「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集

埼玉県教委（1977）：「国道17号熊谷バイパス関係、埋蔵文化財発掘調査報告－鴻池、武良内、高畑」埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集

埼玉県教委（1978）：「上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」－下田、諏訪　埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集

埼玉県教委（1977）：「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ塚本山古墳群」埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集

斉　藤　正　弘（1977）：「福島大学考古学研究会研究会研究紀要第5冊」福島大学考古学研究会
斉　藤　良　治（1976）：「砂山横穴古墳群調査報告書」宮城県文化財調査報告書第44集　宮城県教育委員会　宮城県企業局
佐倉市振興協会（1978）：「佐倉市飯合作遺跡」
佐　々　木　茂　禎（1973）：「追戸、中野横穴群」宮城県涌谷町教育委員会
佐　々　木　茂　禎（1971）：「宮城県志田郡三本木町坂本館山横穴古墳群調査報告書」宮城県三本木町文化財調査報告第1集　三本木町・三本木町教育委員会
佐　々　本　茂　禎（1972）：「本館山横穴群第二次調査報告書」宮城県三本木町文化財調査報告第2集　三本木町・三本木町教育委員会
佐々木安彦、三宅宗義（1975）：「青山横穴古墳群混内山横穴古墳群」宮城県三本木町文化財調査報告書第3集　三本木町・三本木町教育委員会
三本木町教委（1978）：「名高田窯跡調査報告書」三本木町文化財調査報告書第4集
重　松　明　久（1979）：「古墳と古代宗教」学生社
志　間　泰　治（1971）：「鱸沼遺跡」東北電力株式会社
志　間　泰　治（1977）：「大迫横穴群」鹿島台町文化財報告書第1集　鹿島台町教育委員会　鹿島台町文化財保護委員会
志　間　泰　治（1972）：「鷹巣古墳群発掘調査概報」白石市文化財報告書第12号　宮城県白石市教育委員会
志間泰治、佐々木茂禎（1970）：「古川市塚原古墳群」古川市文化財調査報告第1集　古川市教育委員会
志　間　泰　治（1975）：「雁田横穴群」『亘理の古墳』宮城県亘理町
仙台市教委（1975）：「安久東遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第10集
高崎市教委（1978）：「鈴ノ宮遺跡」高崎市文化財調査報告書第4集
多賀城研究所（1977）：「宮城県多賀城跡調査研究所年報1977多賀城跡昭和52年度発掘調査概報」
高橋富雄（編）（1970）：「古代の日本8東北」角川書店
田　中　新　史（1977）：「市原市神門四号墳の出現とその系譜」古代第63号
都出比呂志（1971）：「農業共同体と首長権」講座日本史Ⅰ、古代国家、歴史学研究会・日本史研究会編　東京大学出版会
都出比呂志（1979）：「前方後円墳出現期の社会、考古学研究第26巻第3号、考古学研究会
手　塚　均（1980）：「留沼遺跡」『東北新幹線遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第65集
直木孝次郎編（1975）：「日本国家の形成」シンポジウム日本歴史2
名取市教育委（1977）：「十三塚遺跡昭和51年度遺構確認調査概報」名取市文化財調査報告書第2集
楢　崎　彰　一（1979）：「三彩、緑釉、圧彩」陶磁大系5、平凡社
早坂春一・阿部恵（1980）：「手取、西取遺跡」『宮城県文化財調査報告書第63集-東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ-』

樋口隆康（編）（1980）：「図説日本文化の歴史Ⅰ光史、原史」小学館
藤沼邦彦（1971）：「大橋遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王地区）』宮城県文化財調査報告書第24集
藤沼邦彦（1975）：「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」東北歴史資料館研究紀要第2巻　東北歴史資料館
福島県教委、福島県文化センター（1979）：「国営総合農地開発事業、母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ－笊内古墳群」『福島県文化財調査報告書第74集』
増田精一（1978）：「馬具」『日本の考古学Ⅴ古墳時代下』河出書房
宮城県高等学校理科研究会、地学部会（編）（1975）：「宮城県の地質案内」
茂木雅博（1974）：「前方後方墳」雄山閣
森浩一（1975）：「日本古代文化の探究、墓地」社会思想社
安田喜憲（1978）：「仙台湾周辺における後氷期の地形変化、海水準変動と人類の居住」『土深沢遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ－』宮城県文化財調査報告書第52集
山形県教委（1974）：「清水前古墳群発掘調査概報」山形県埋蔵文化財調査報告書第3集
山形県教委（1979）：「大之越古墳発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第18集
横浜市埋蔵文化財調査委員会（1975）：「歳勝土遺跡、港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅴ」
利府町教委（1979）：「川袋古墳群」利府町文化財調査報告書第1集
歴史科学協議会編（1973）：「歴史科学大系Ⅰ、日本原始共産制社会と国家の形成」校倉書房

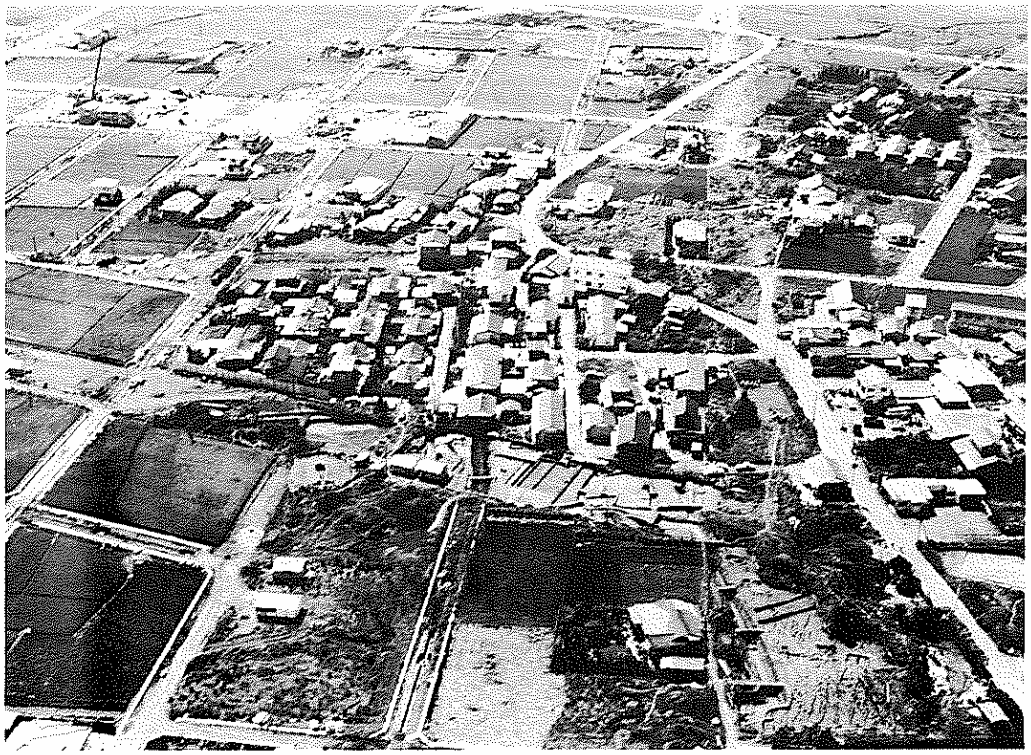
第７表　図示遺物(土器、木器)計測値

図版番号	出土地点	種別	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)
第12図１	方形周溝墓張り出し部西側周溝	土師器	壺	27.5	21.2	7.9
第　図２	〃　張り出し部東側周溝	〃	壺	25.4	19.5	8.0
第　図３	〃　〃	〃	壺	26.3	18.1	7.5
第　図４	〃　〃	〃	壺			7.0
第13図１	〃　台状部東側周溝	〃	壺			7.0
第　図２	〃　〃	〃	壺			
第　図３	〃	〃	壺		19.6	
第　図４	〃	〃	甕		16.0	
第　図５	〃	〃	壺			
第　図６	〃	〃	壺			
第　図７	〃	〃	壺			
第　図８	〃	〃	壺			
第　図９	〃	〃	甕	18.5	15.2	5.8
第　図10	〃	〃	高　坏		21.1	
第　図11	〃	〃	高　坏			
第20図１	第１号住居跡　床　面	土師器	坏	4.5	13.8	5.4
第　図２	〃　貯蔵穴	〃	坏	4.5	13.8	5.4
第　図３	〃　〃	〃	坏	4.2	13.4	4.9
第　図４	〃　床　面	〃	坏	4.6	14.2	6.2
第　図５	〃　〃	〃	坏	4.4	14.1	5.0
第　図６	〃　貯蔵穴	〃	坏	5.2	16.3	5.5
第　図７	〃　〃	〃	坏	5.8	16.6	5.8
第　図８	〃　〃	〃	坏		17.2	
第　図９	〃　床　面	須恵器	坏	5.0	14.8	5.5
第　図10	〃　〃	赤焼土器	坏	3.0	12.9	5.1
第　図11	〃　〃	〃	坏	3.4	12.2	5.5
第　図12	〃　〃	〃	坏	2.9	13.0	4.4
第21図１	第１号住居跡堆積土	土師器	坏	3.8	13.8	5.0
第　図２	〃	〃	坏	4.0	13.8	5.7
第　図３	〃	〃	坏	4.7	16.6	7.3
第　図４	〃	〃	甕	29.8	23.5	12.6
第　図５	〃	〃	甕		10.0	
第　図６	〃	赤焼土器	坏	3.4	13.5	6.5
第　図７	〃	〃	高台付坏	5.2	15.0	7.1
第22図	〃	土師器	甕		23.6	
第24図１	第２号住居跡　カマド堆積土	〃	坏	3.8	13.7	5.0
第　図２	〃　貯蔵穴	〃	坏	4.2	14.5	5.2
第　図３	〃　〃	〃	坏	4.0	13.1	4.7
第　図４	〃　〃	〃	坏	4.5	13.7	4.8
第　図５	〃　〃	〃	坏	4.3	13.0	4.5
第　図６	〃　〃	〃	坏	4.8	13.6	5.4
第　図７	〃　〃	〃	坏	6.1	16.7	6.0
第　図８	〃　〃	〃	坏	4.9	16.2	6.0
第　図９	〃　〃	〃	坏	5.8	16.6	5.7
第　図10	〃　〃	〃	坏	4.8	15.2	4.8
第　図11	〃　〃	〃	坏	5.4	16.4	6.0
第　図12	〃　カマド堆積土	〃	坏	3.8	13.7	5.0
第　図13	〃　貯蔵穴	〃	甕		15.7	
第　図14	〃　カマド堆積土	〃	甕		24.6	
第　図15	〃　煙道堆積土	〃	甕		28.8	

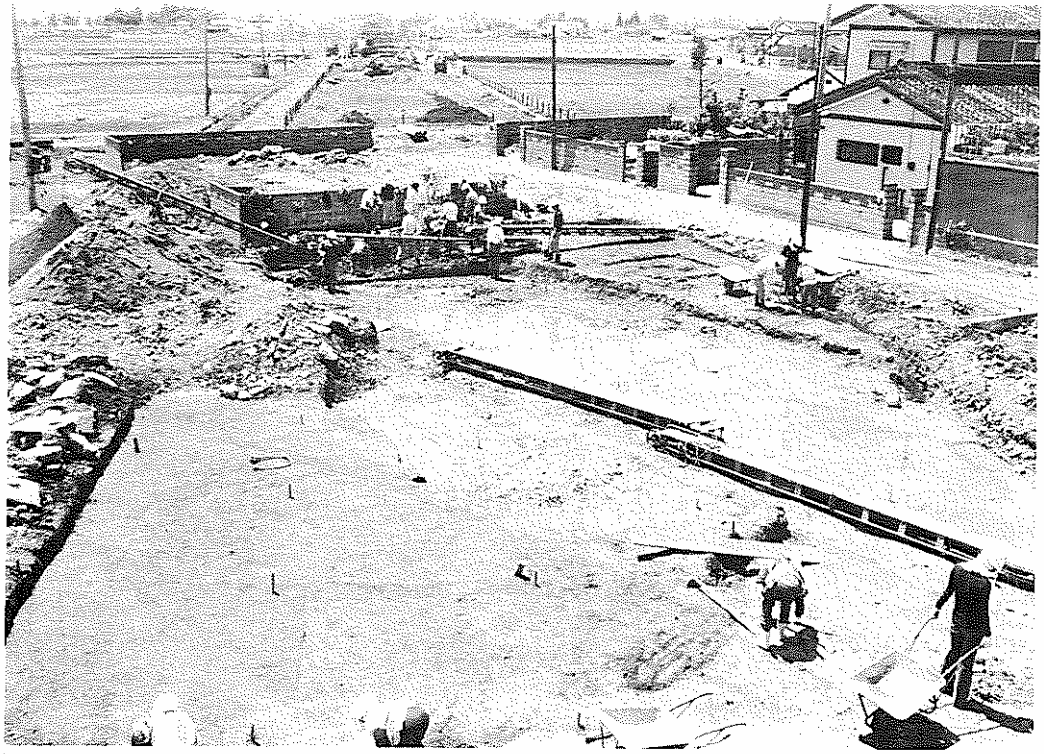
図版番号	出土地点	種別	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)
第25図１	第２号住居跡　貯蔵穴	須恵器	坏	4.2	14.4	5.4
第　図２	〃　〃	〃	坏	4.7	13.6	4.7
第　図３	〃　〃	〃	坏	4.1	13.8	5.3
第　図４	〃　〃	赤焼土器	坏	4.0	13.2	4.4
第　図５	〃　〃	〃	坏	4.0	12.6	4.6
第　図６	〃　〃	〃	坏	3.4	12.2	5.4
第　図７	〃　〃	〃	坏	4.3	13.8	5.4
第　図８	〃　〃	〃	坏	3.9	12.0	4.5
第　図９	〃　〃	〃	坏	4.3	13.8	5.3
第　図10	〃　床　面	〃	坏	3.6	13.3	5.8
第　図11	〃　貯蔵穴	〃	坏	3.3	12.0	3.3
第　図12	〃　〃	〃	坏	4.5	14.0	3.8
第26図１	第２号住居跡　堆積土	土師器	坏	4.4	13.8	4.6
第　図２	〃　〃	〃	坏	4.6	13.8	4.2
第　図３	〃　〃	〃	坏	4.0	13.4	5.9
第　図４	〃　〃	〃	坏	5.2	16.0	6.0
第　図５	〃　〃	〃	坏	6.5	16.2	5.4
第　図６	〃　〃	〃	坏	4.9	16.9	6.2
第　図７	〃　〃	〃	坏	4.5	15.0	4.6
第　図８	〃　〃	〃	甕		24.1	
第　図９	〃　〃	〃	甕		24.2	
第　図10	〃　〃	〃	甕		24.3	
第　図11	〃　〃	須恵器	坏	4.3	13.5	4.6
第　図12	〃　〃	〃	坏	3.7	13.8	5.2
第　図13	〃　〃	赤焼土器	坏	4.2	11.6	3.7
第　図14	〃　〃	〃	坏	4.0	12.6	4.9
第　図15	〃　〃	〃	坏	3.9	11.5	5.5
第　図16	〃　〃	〃	坏	4.3	11.0	4.2
第　図17	〃　〃	〃	坏	3.6	11.2	4.0
第　図18	〃　〃	〃	坏	4.1	12.8	5.8
第　図19	〃　〃	〃	坏	3.9	11.1	5.2
第27図１	〃　〃	〃	坏	3.4	11.8	5.2
第　図２	〃　〃	〃	坏	4.0	14.8	5.7
第　図３	〃　〃	〃	坏	3.5	12.6	5.6
第　図４	〃　〃	〃	坏	3.5	12.3	5.8
第　図５	〃　〃	〃	高台付坏	3.4	12.6	7.1
第　図６	〃　〃	灰釉陶器	坏	4.1	13.3	6.7
第　図７	〃　〃	〃	長頸瓶			
第29図１	第３号住居跡　カマド堆積土	土師器	坏	5.7	14.4	5.2
第　図２	〃　床　面	〃	坏	4.2	13.6	6.0
第　図３	〃　〃	〃	坏	5.5	14.5	6.3
第　図４	〃　〃	赤焼土器	坏	4.1	12.7	4.9
第　図５	〃　〃	〃	坏	3.7	13.0	5.0
第30図１	第３号住居跡　堆積土	土師器	坏	5.1	15.2	6.3
第　図２	〃　〃	〃	坏	3.9	11.6	3.9
第　図３	〃　〃	須恵器	坏		12.5	
第　図４	〃　〃	赤焼土器	坏	4.0	15.3	5.3
第　図５	〃　〃	土師器	甕		22.5	
第　図６	〃　〃	〃	甕		24.1	
第34図４	５号溝堆積土３層	中世陶器	播　鉢		36.6	

図版番号	出土地点	種別	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)
第34図５		土師器	甕		21.0	
第　図６		中世陶器	火　鉢			
第　図７		〃	播　鉢			
第　図９		土師器	壺			7.4
第　図10		〃	甕		29.0	
第35図１	溝　堆積土	緑釉陶器	椀			7.2
第　図２	〃	中世陶器	甕			
第　図３	〃	〃	甕			
第　図４	〃	〃	甕			
第　図５	〃	〃	甕			
第　図６	〃	漆　器	椀	5.0	14.4	7.1
第９図１	基本層位Ⅳ層	弥生土器	壺	29.1	12.8	8.2
第　図５	〃	〃	壺			8.0
第　図６	〃	〃	壺			
第８図１	〃	〃	不　明			8.9
第７図１	基本層位Ⅱ、Ⅲ層、Ⅲ層	土師器	壺			
第　図２	〃　〃	〃	壺			8.1
第　図３	〃　〃	〃	壺			8.1
第　図４	〃　Ⅱ層	〃	坏	4.1	13.9	5.2
第　図５	〃　〃	赤焼土器	坏	4.0	15.3	5.3
第　図６	〃　〃	土師器	甕		22.5	
第　図７	〃　〃	〃	甕		16.0	
第36図	表土および出土地点不明	〃	壺			
第37図１	〃	〃	壺			9.3
第　図２	〃	〃	坏	4.0	13.2	5.0
第　図３	〃	〃	高台付坏			8.7
第　図４	〃	須恵器	長頸壺			12.6
第　図８	〃	灰釉陶器	長頸瓶			
第　図９	〃	〃	長頸瓶			

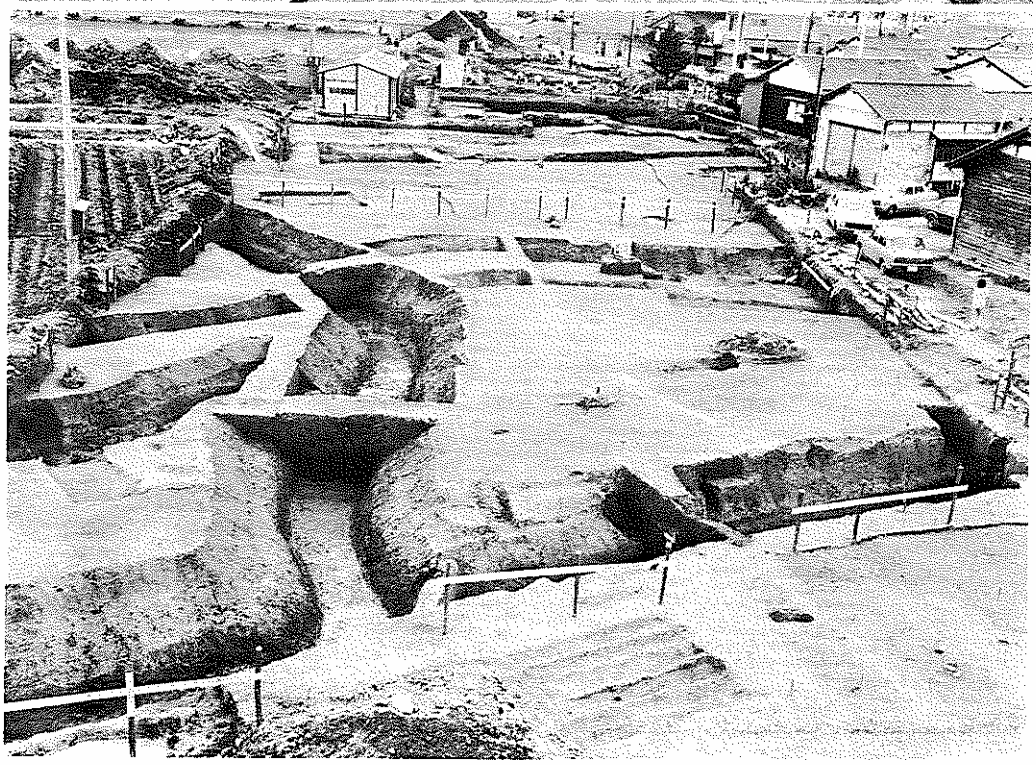
種別	器形	部位	器面調整（外面－内面）	第1号住居跡 堆積土	第1号住居跡 床	第1号住居跡 カマド	第1号住居跡 貯蔵穴	第1号住居跡 ピット1	第1号住居跡 ピット2	第1号住居跡 ピット3	第1号住居跡 不明	第2号住居跡 堆積土	第2号住居跡 床	第2号住居跡 カマド	第2号住居跡 貯蔵穴	第2号住居跡 ピット1	第2号住居跡 ピット2	第2号住居跡 ピット3	第2号住居跡 ピット4	第2号住居跡 不明	第3号住居跡 堆積土	第3号住居跡 床	第3号住居跡 ピット1	第3号住居跡 ピット2	第3号住居跡 不明	2号溝 堆積土	3号溝 堆積土	4号溝 堆積土	5号溝 堆積土	6号溝 堆積土	7号溝 堆積土	8号溝 堆積土	II層 A-8	II層 A-9	II層 A-12	II層 A-20	II層 A-21	II層 B-9	II層 B-18	II層 B-26	II層 B-28	II層 C-22	II層 C-29	II層 D-10	II層 D-15	II層 D-18	II層 D-19	II層 D-23	II層 D-30	II層 D-64	II層 E-13	II層 E-14	II層 E-15	II層 E-17	II層 E-32	II層 E-49	III層 B-58	III層 C-15	III層 C-16	III層 C-18	III層 C-60	III層 D-17	III層 D-31	III層 D-48	III層 D-50	III層 E-49	IV層 B-23	IV層 C-15	IV層 C-57	IV層 D-18	IV層 D-30	IV層 D-49	IV層 E-15	IV層 E-25	IV層 E-27	表土	不明	表採	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ（黒色）－ミガキ（黒色）									6									1																															1																								1		9
			ロクロ－ミガキ（黒色）	50	5	1	8		6	2	2	293	21						2	4	79	2			4									16		2	1	1	1					2									4	3			1		4		1															8	6		529
			ロクロ－不明	1	1							41	1							4	27		1		1									7		1						1																	1																	1	2		90
			不明－ミガキ（黒色）	1				1		1		1		1											3																																																			1			9
			不明－不明									5									5																																7																								16			33
		体部	ミガキ（黒色）－ミガキ（黒色）									5									1																									3				1																														10
			ロクロ－ミガキ（黒色）	52	1	1	2			4		362	19			1		1	1	9	144		6		6				8	5			1	29	3	2	1		3					3			4			1	1	1	12	3				1	2			1														13	5		708
			ミガキ（黒色）－不明									39																																			1																														1			41
			ロクロ－不明	5								12									4													3																																														24
			不明－ミガキ（黒色）																													1																																																	1
			不明－ロクロ									2																																																																		1			3
			不明－不明	1						1		185	4								67				7							1		70	7		1		2							2	3	1					46	6						1																	30	13		448
		底部	回転ヘラケズリ－ミガキ（黒色）	3																	17																																																											20
			回転糸切り－ミガキ（黒色）	9							1	69	2																					10	2	1			1							1						1	3	1				1																			2	1		105
			不明－ミガキ（黒色）									7	1																		1					2			1							1				2																												1		16
			不明－不明																																				1														1																								1	1		4
	高台付坏	底部	回転糸切り－ミガキ（黒色）	1								8																																			3																																	12
			不明－ミガキ（黒色）																		6														2																																															8
			不明－不明	2																	1								2	1					1								1		1																																1			10
	甕	口縁部	ロクロ－ロクロ	7	1		1					54		1							3							1					1	3	1	1	2										1																															5			82
			ロクロ－ナデ									1																																																																						1
			不明－不明	1																																											1																															1	1		4
		体部	ロクロ－ロクロ	7	2					4		143	2							2	42	1			1				2				1	15	3	1			1						2	1	1						19	4										1														8		263
			ロクロ－ミガキ（黒色）																		3																																																											3
			ロクロ－ナデ									1																																																																				1
			ロクロ－不明	9	1															2									1																					1																														14
			ケズリ－ロクロ									344	3		1				2	5	91	1	4		8									26	2	3			1						2	1	1			1			8	6				1	1			1		5												3	4		525
			ケズリ－ミガキ（黒色）									4								1	4																																																								2			11
			ケズリ－ナデ	1								8									1								1																																																1			12
			ケズリ－不明	18	5							20								6	2								2	2	1					1											1																			1											3			62
			不明－ミガキ（黒色）																																																																											1			1
			不明－ロクロ	2								8																		1																																																		11
			不明－不明	12							1	31	3							2	14								16				1	27		1									1	1	1	1					18	7		1																				20	23		181
		底部	ケズリ	1								13		1							1																																												1														2		19
			回転糸切り									1									2																																																											3
			不明	1								10									1								2	2						1																	4	1																							1	5		28
	壺	口縁部	ヨコナデ（内）－ヨコナデ（内）																																																																													2	1	2
		体部	刷毛目（内）－刷毛目																							1	2													1									1	1						1																											8
			刷毛目－刷毛目																								3	1															1							1		1					1	1							3	4	10	2										3			31
			刷毛目（内）－ナデ																																						1																																						8	3		12
			刷毛目（内）－不明																								2																																																					1	7		10
			ミガキ（内）－ナデ																								1																																																					1			2
			不明－刷毛目																																																																																1	1
	高坏	脚部	ミガキ－ミガキ																																																																													1			1
			刷毛目－不明																																																																																1		1
須恵器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ									69	3							1	5				1									2																					6	1																									1		89
		体部	ロクロ－ロクロ									58	1				2				10				1									6												1									2																													81
		底部	回転糸切り－ロクロ									34									2			1	3	1													1																1																													43
			不明－ロクロ																											1																																																				1
			不明－不明																		1																																																										2			3
	甕	体部	ロクロ－ロクロ									3									2												1	2																																															9
			平行－平行																																				1																																									3	1		6
			平行－青海波																																				1																																													2
			ケズリ－ロクロ									2																																																																						2
赤焼土器	坏	口	ロクロ－ロクロ	3	1						1	92	8						6	4	4	1							1	1				1													1																															1		125
		体	ロクロ－ロクロ	8	1		1					19		1						2														1																																															33
		底	回転糸切り	1								12					1				1																										1																															1		17
弥生土器																																																																					2	2	1	3	1	1	2	1	1				14
計				196	18	2	12	1	6	12	5	1962	68	4	1	1	3	1	11	42	541	5	11	1	35	2	8	2	35	13	5	2	5	218	21	16	5	1	14	1	1	2	1	5	7	9	19	4	2	7	1	3	131	33	1	2	1	3	8	1	1	2	3	11	11	2	2	2	1	3	1	1	2	1	1	131	90	2	3,794



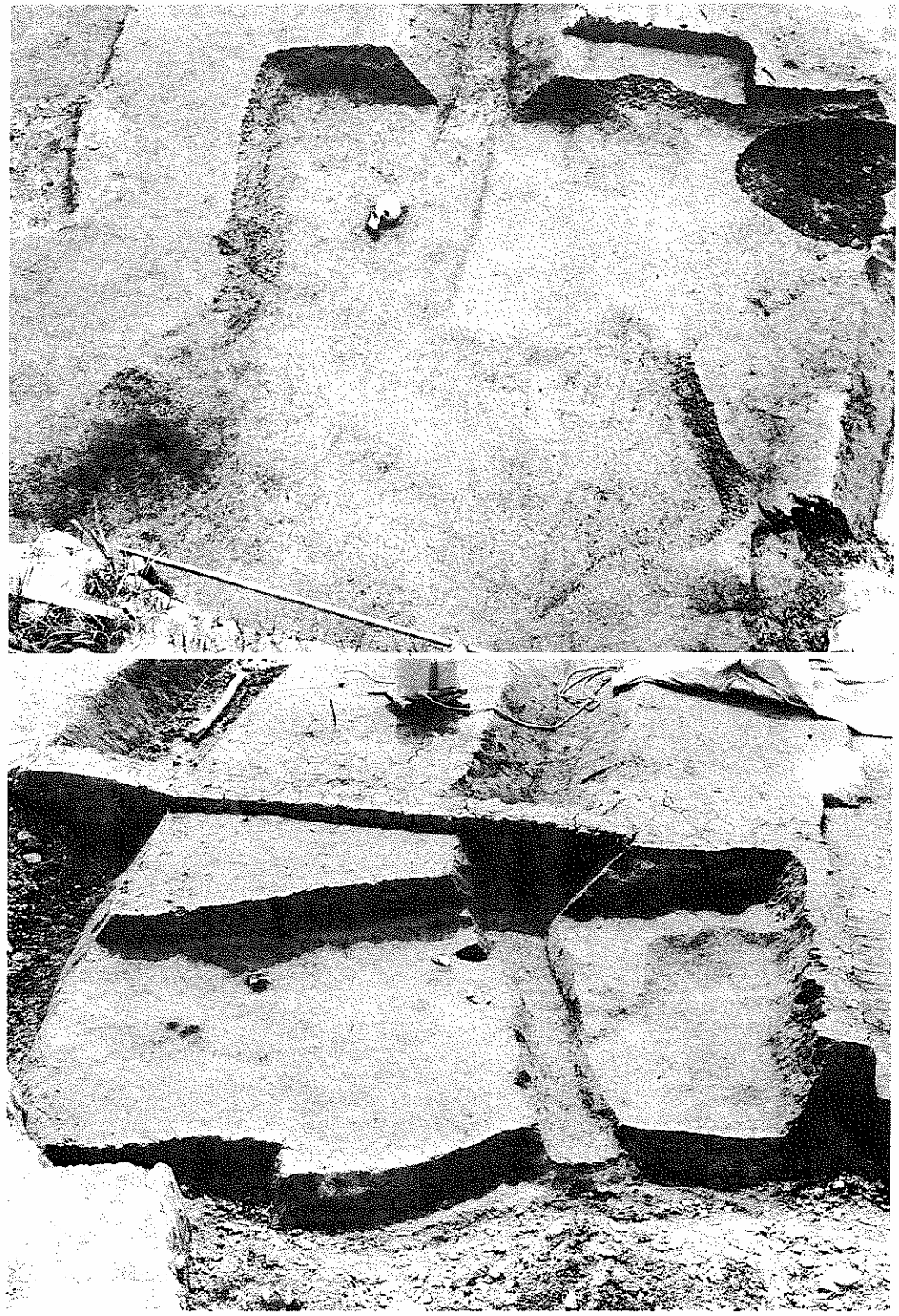
図版１　上：遺跡全景
下：遺跡遠景（南側から）



図版２　上：調査風景
　　下：県道北側調査区近景（南側から）



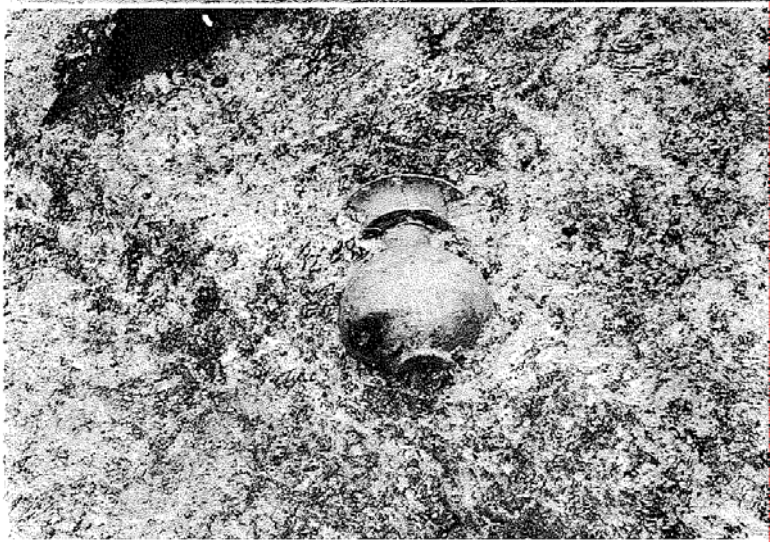
図版３　上：県道南側調査区近景（北側から）
　　下：方形周溝墓



図版 4　上：方形周溝墓張り出し部西側周溝
　　下：方形周溝墓張り出し部東側周溝

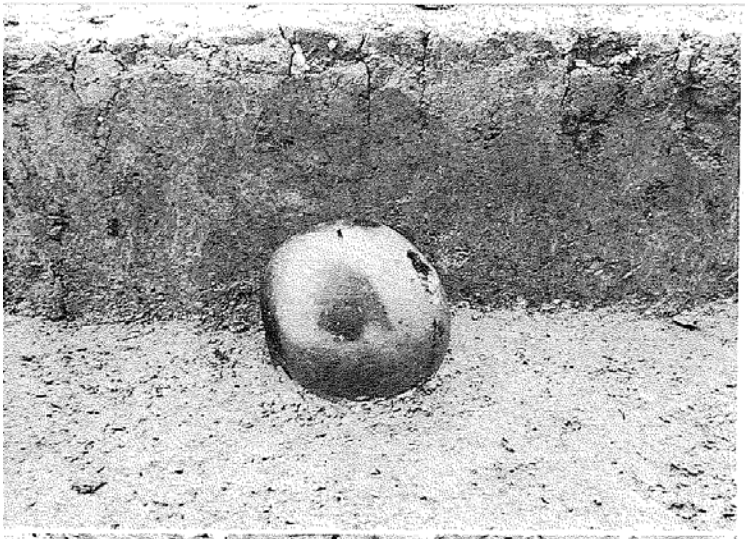
方形周溝墓張り出し部

供献用土師器壺出土状況
（張り出し部東側周溝）



供献用土師器壺出土状況
（張り出し部西側くびれ部）

図版 5



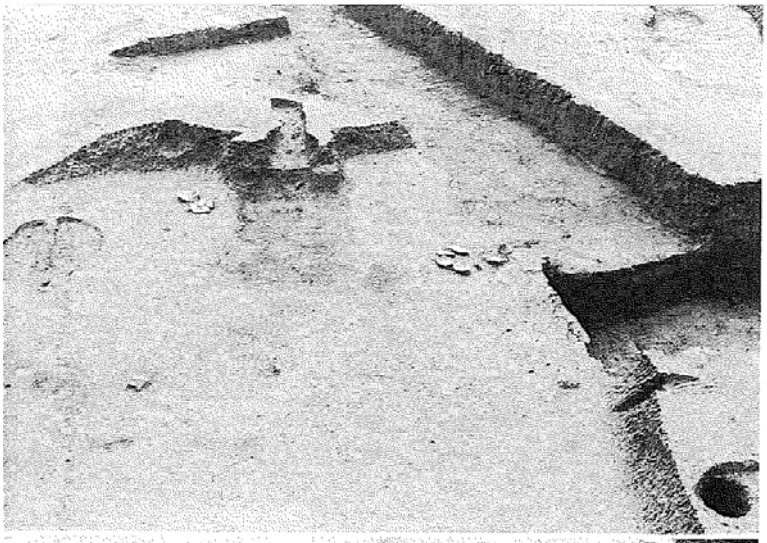
供献用土師器壺出土状況
（張り出し部東側周溝）

高坏出土状況
（台状部東側周溝）

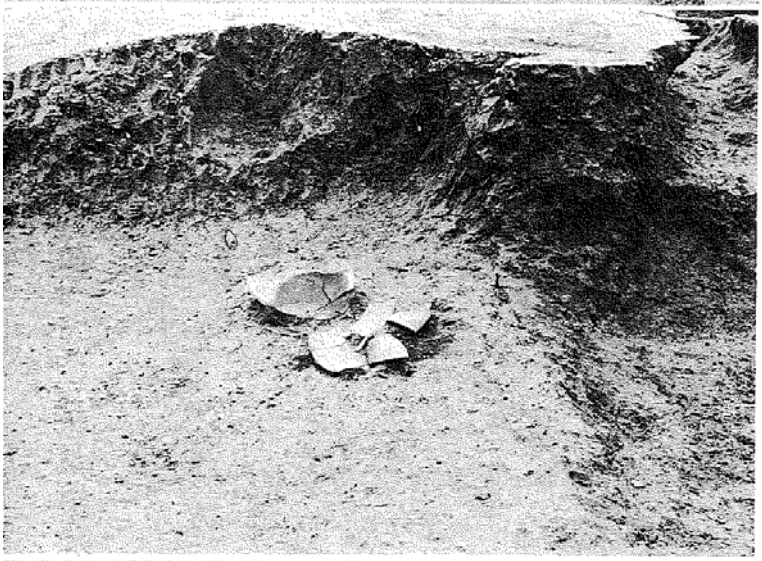
古墳石室
（検出時）

図版 6

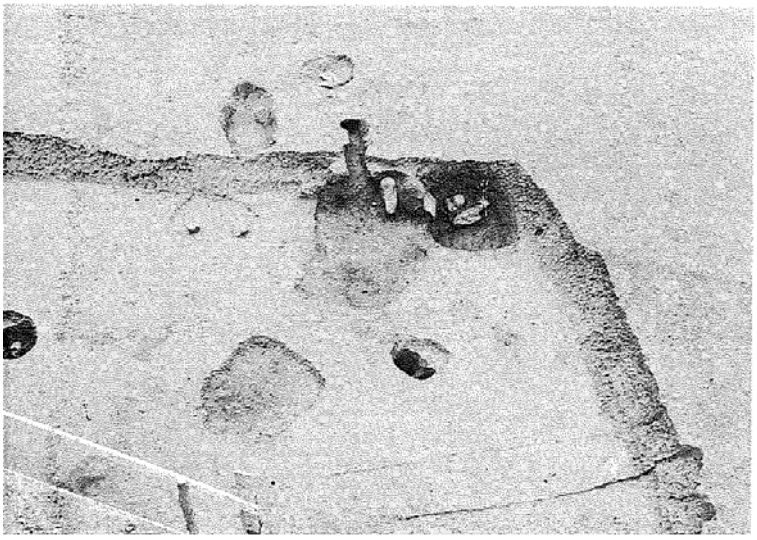
図版７　上：古墳石室
下：同副葬品出土状況（直刀、鉄鏃、轡）



1 号住居跡



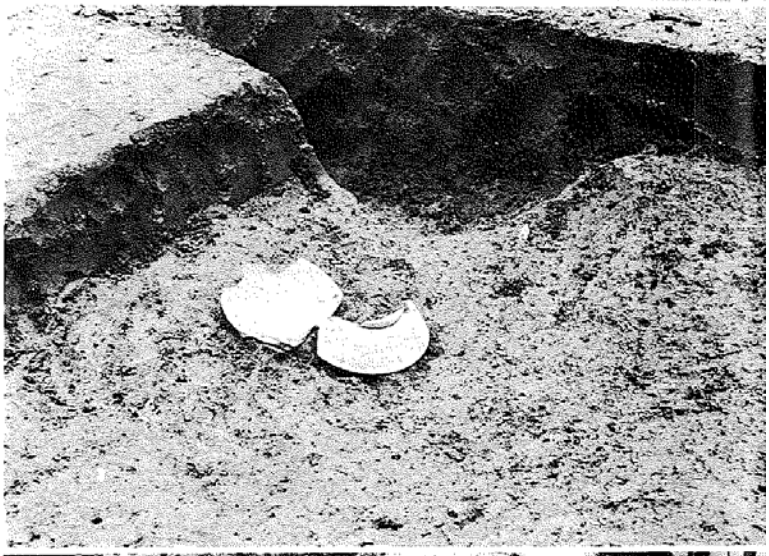
1 号住居跡
出土遺物



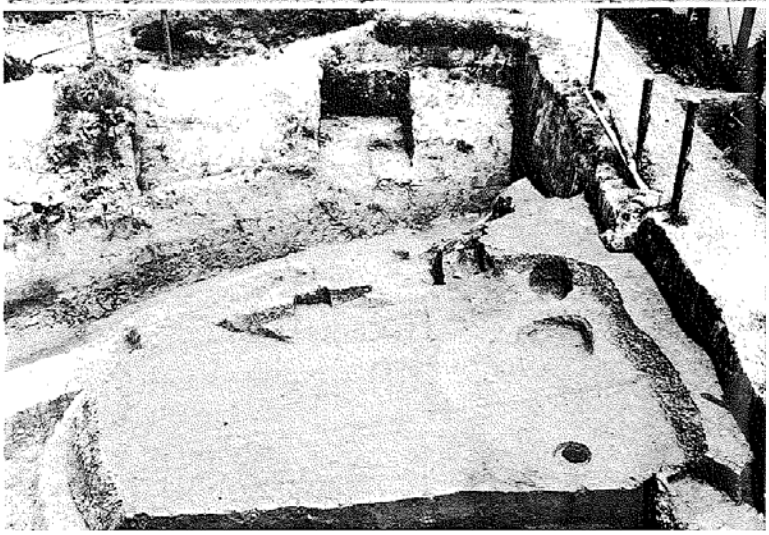
2 号住居跡

図版 8

第２号住居跡
遺物出土状況
(貯蔵穴状ピット)

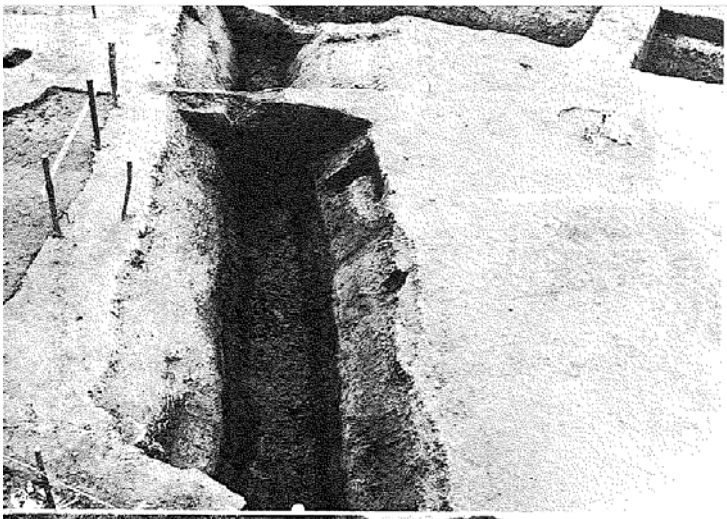


同上遺物出土状況
(灰釉陶器)



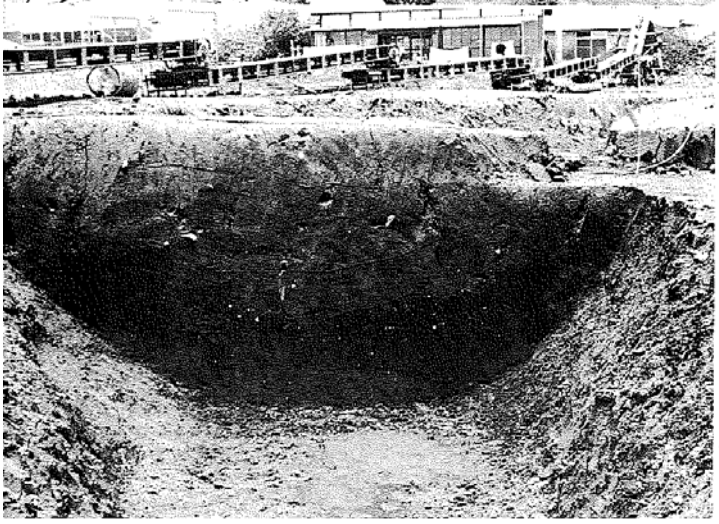
第３号住居跡

図版９



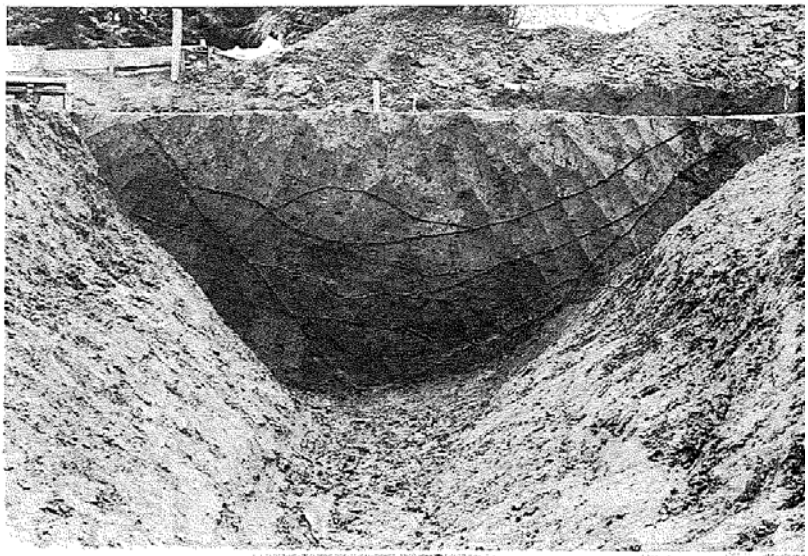
1号溝

3、4号溝

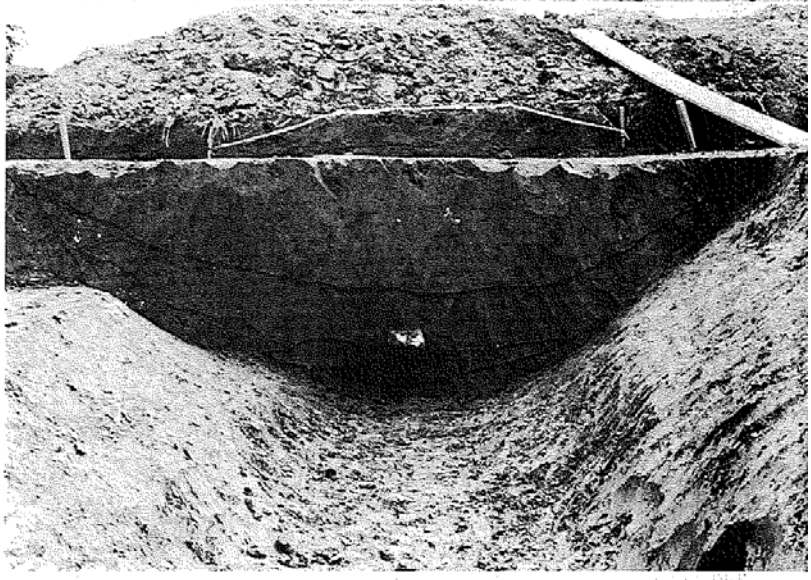


2号溝セクション

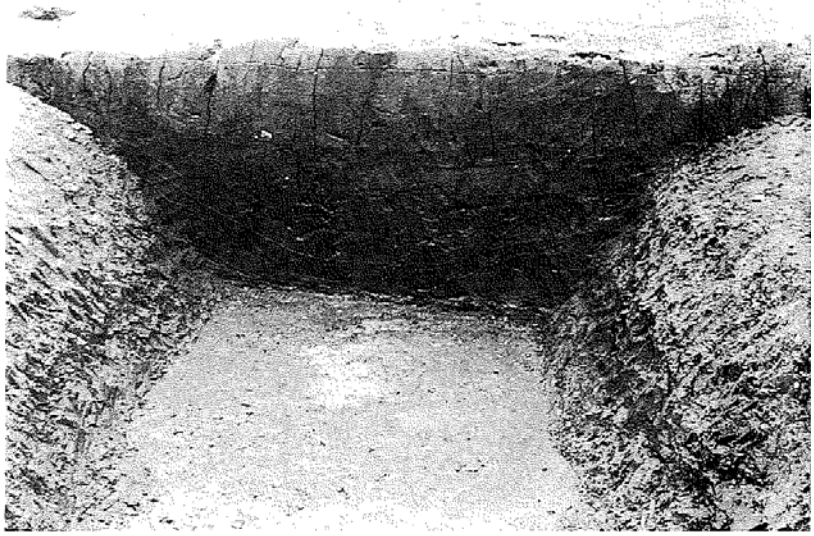
図版10



3号溝セクション

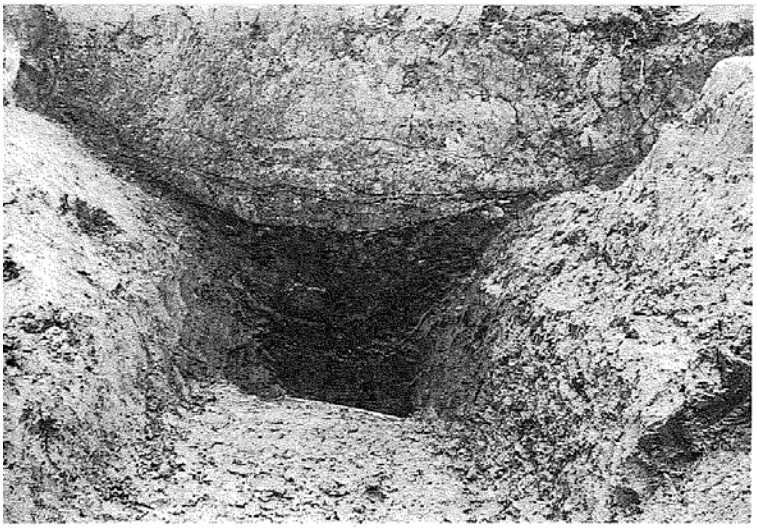


4号溝セクション

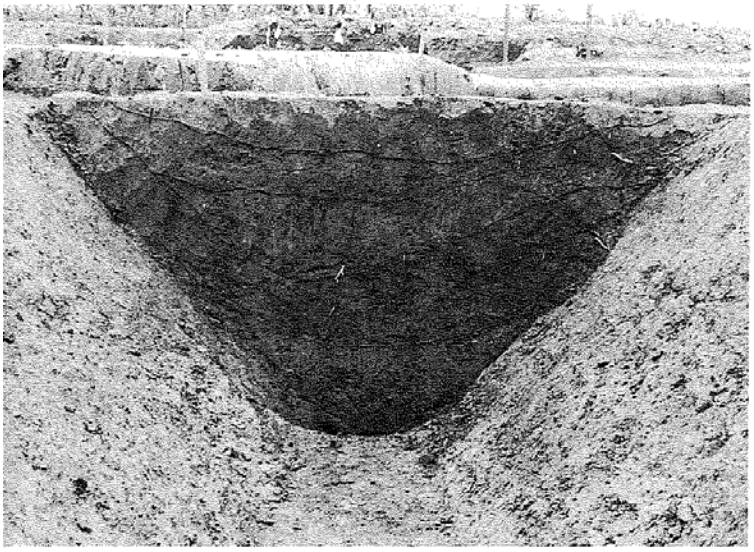


5号溝セクション

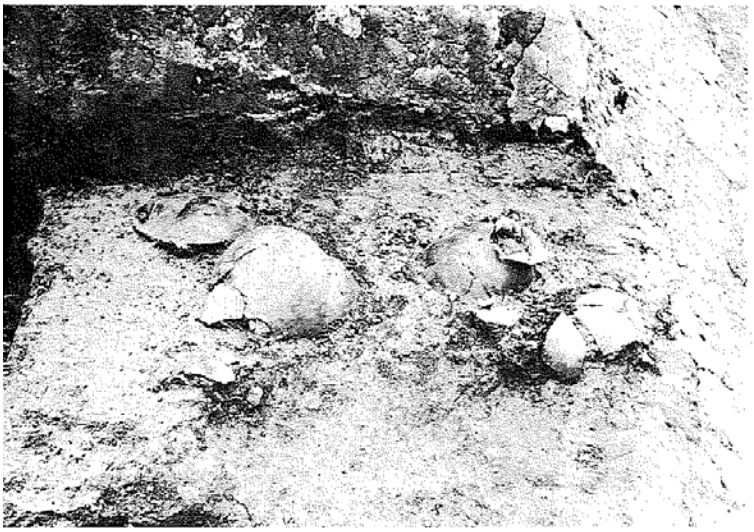
図版11



6号溝セクション



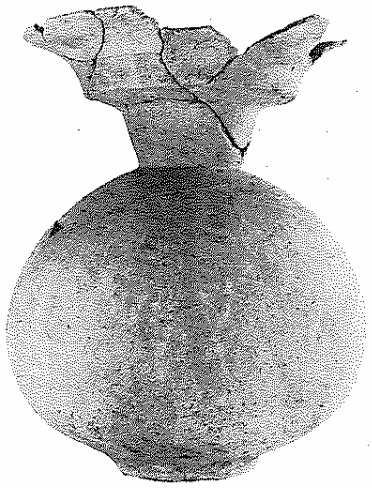
8号溝セクション



第Ⅳ層
遺物出土状況
(弥生土器)

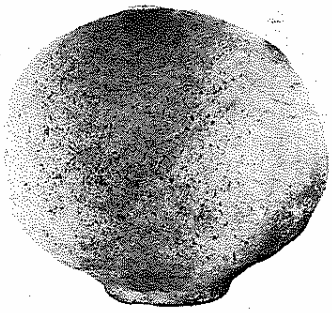
図版12

第12図 1

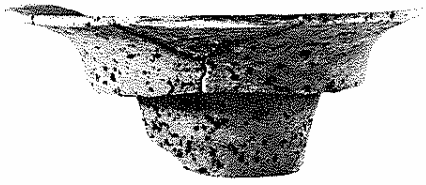


第12図 2

第12図 3



第12図 4

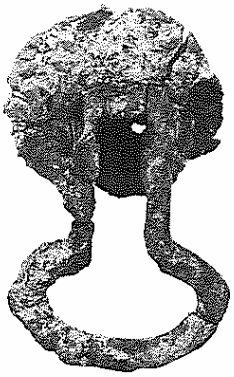


第13図 3

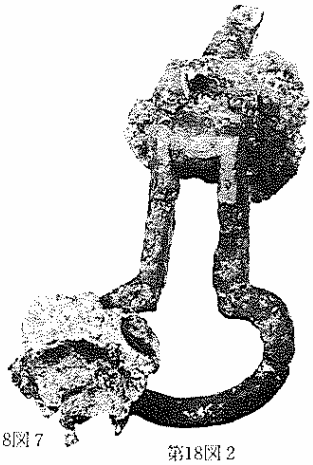
第13図 1

図版13　方形周溝墓出土遺物（土師器壺）

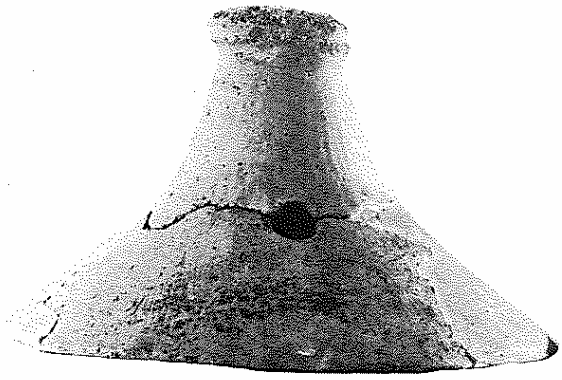
第13図 9



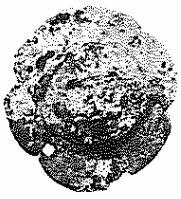
第18図 3



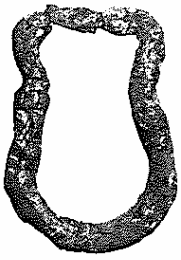
第18図 7　第18図 2



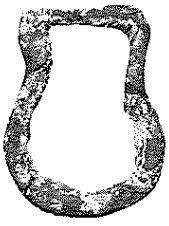
第13図11



第18図 6

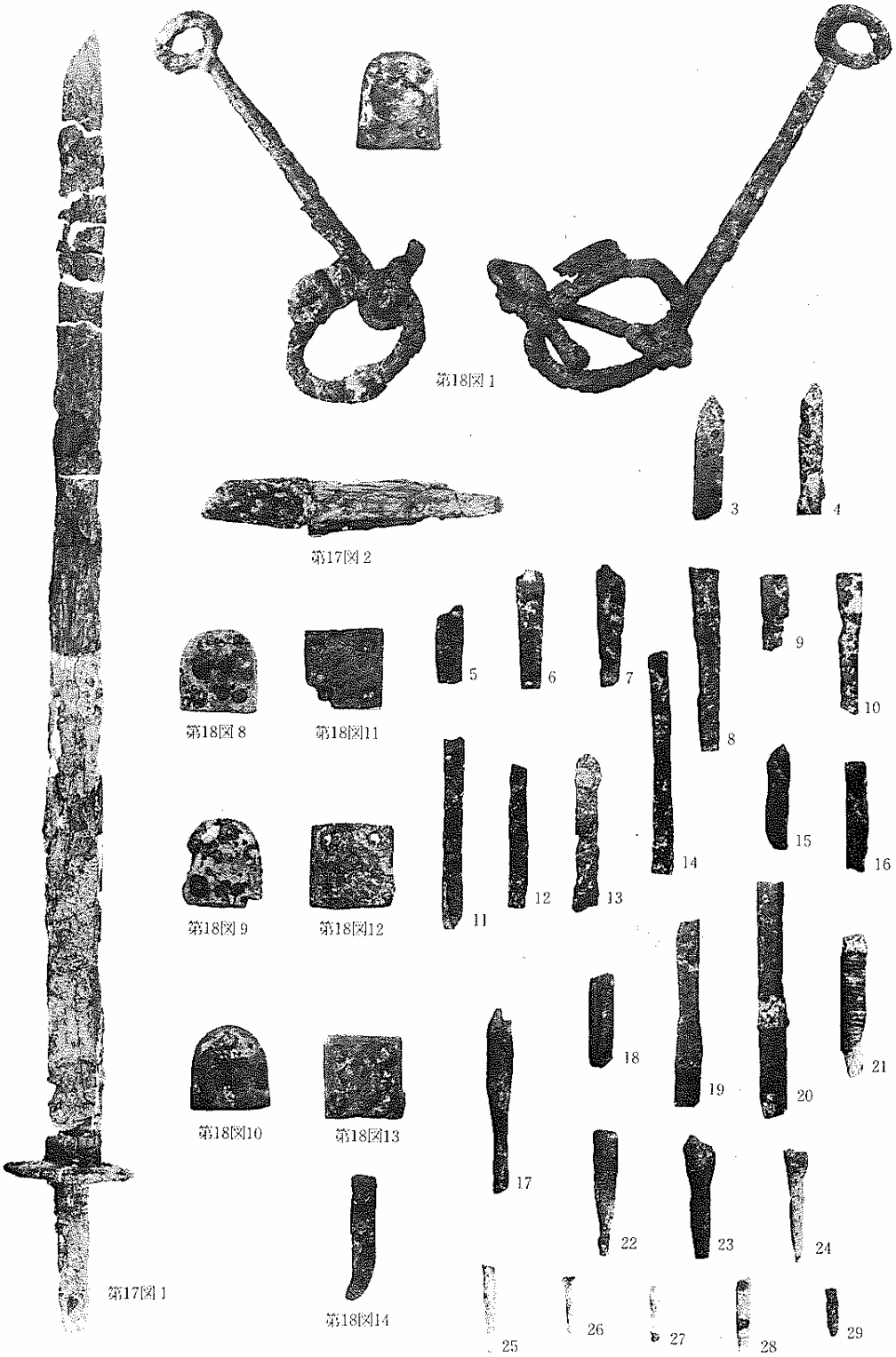


第18図 4

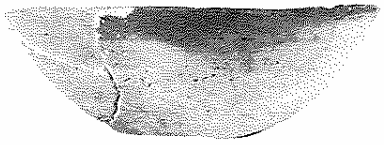


第18図 5

図版14　方形周溝墓、古墳石室床面出土遺物（土師器甕、高坏、鉸具、鞍、飾金具）



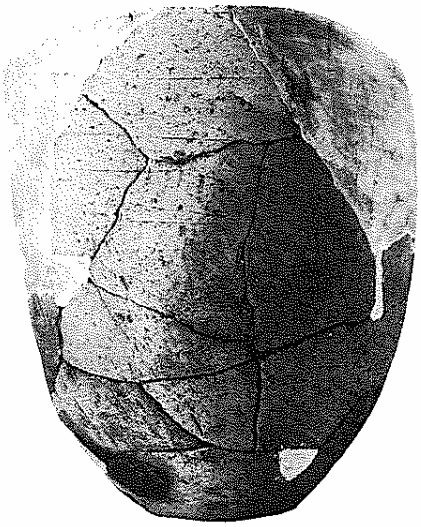
図版15　古墳石室床面出土遺物（轡、飾帯金具、直刀、刀子、鉄鏃）



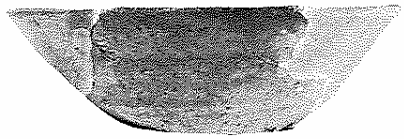
第20図 1

第20図 6

第21図 4

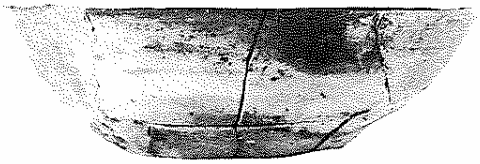


第21図 5



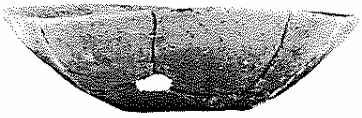
第20図 4

第20図 7

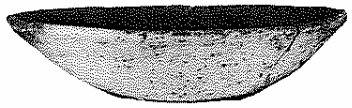


第20図 6

第20図 7

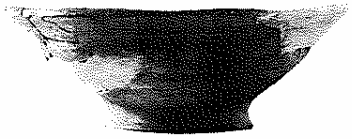


第21図 4



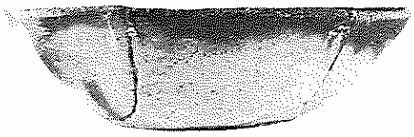
第21図 3

第21図 6

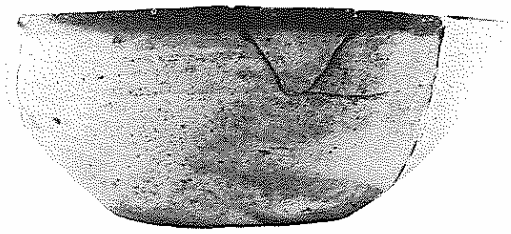


第21図 7

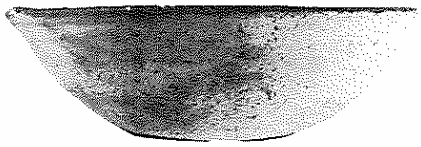
図版16　第１号住居跡出土遺物（土師器坏、甕、赤焼土器坏、高台付坏）



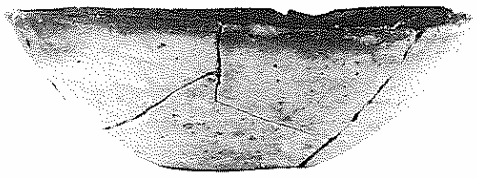
第24図 1



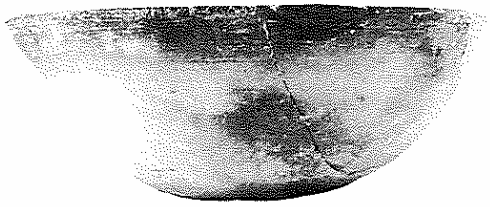
第24図 7



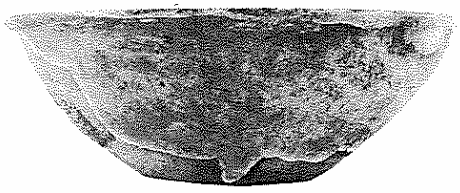
第24図 3



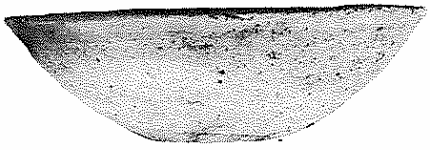
第24図 8



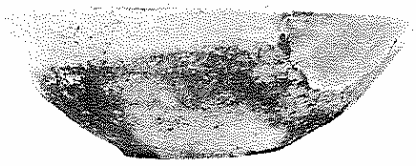
第24図 9



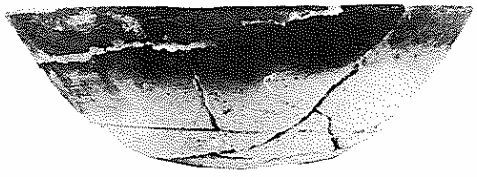
第24図11



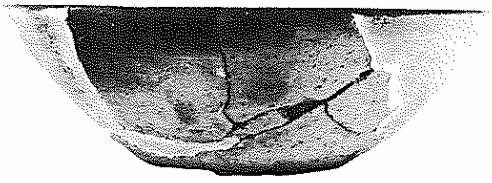
第24図12



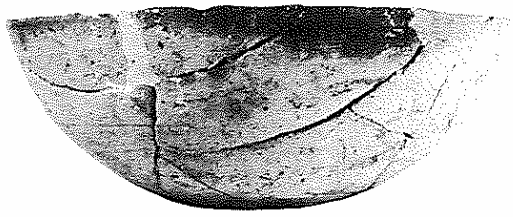
第26図 1



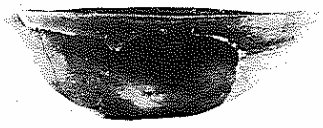
第26図 2



第26図 4

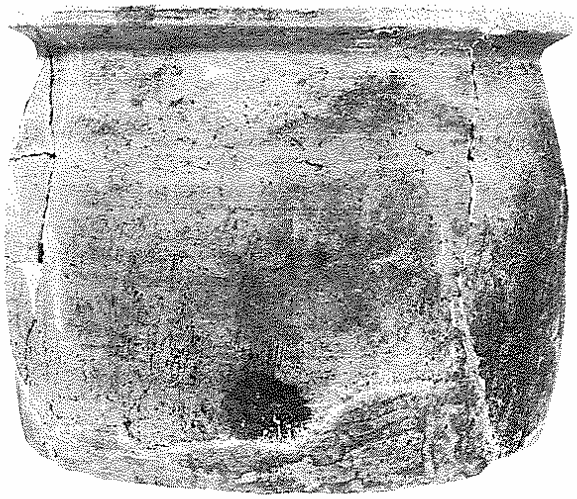


第26図 5

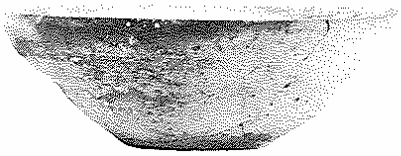


第26図 7

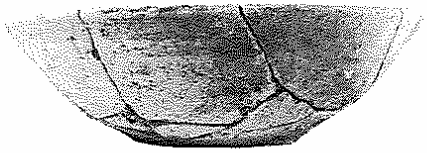
図版17　第２住居跡出土遺物（土師器坏）



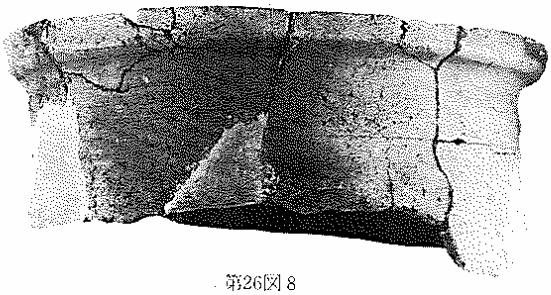
第24図14



第25図 1



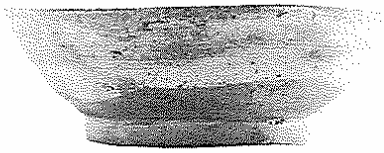
第25図 2



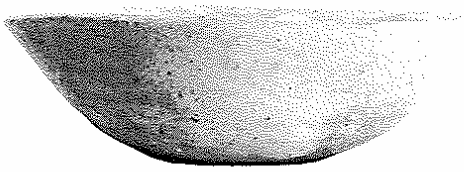
第26図 8

第25図 3

第26図12

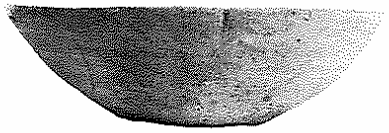


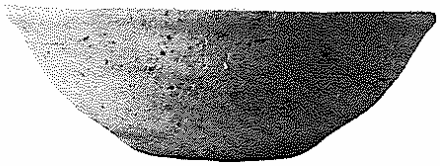
第27図 6

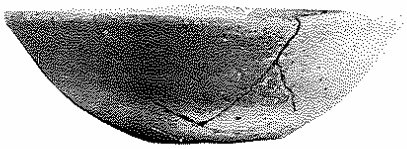


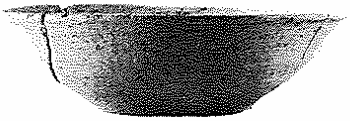
第26図11

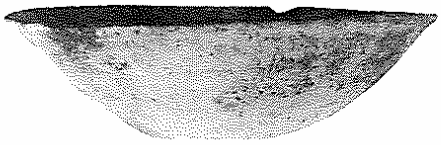
図版18　第２号住居跡出土遺物（土師器甕、須恵器坏、灰釉陶器）

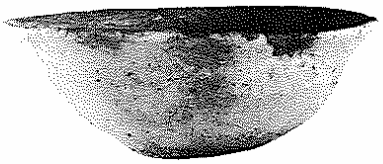

第25図 6

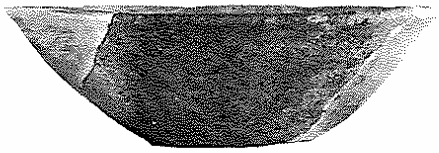

第25図 9

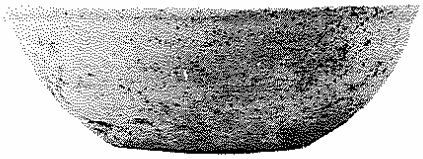

第25図10

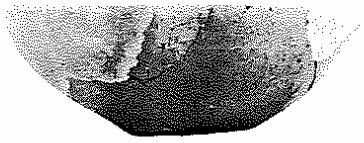

第25図 7

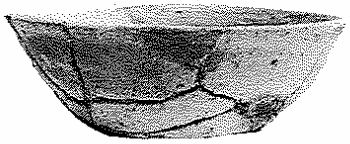

第25図12

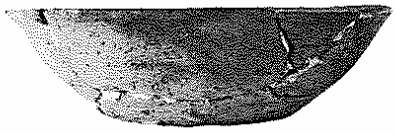

第26図13

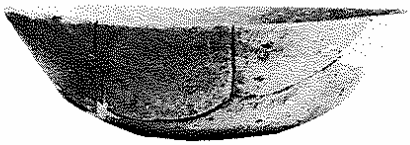

第26図14

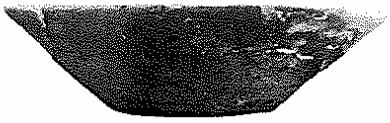

第26図15

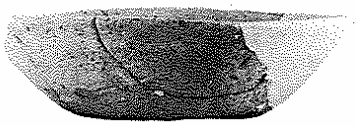

第26図17

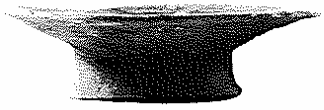

第26図19


第27図 1

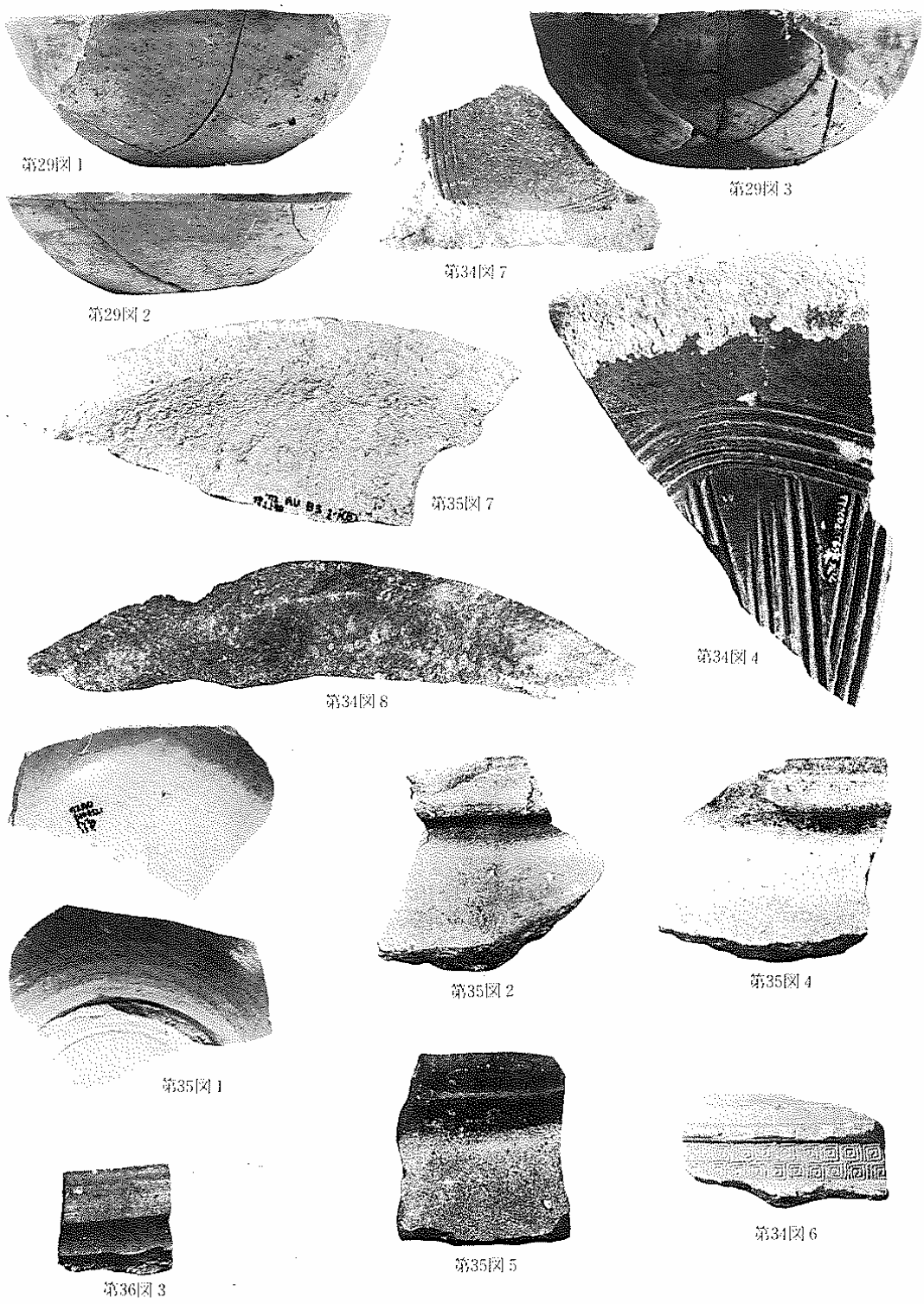

第27図 2


第27図 3

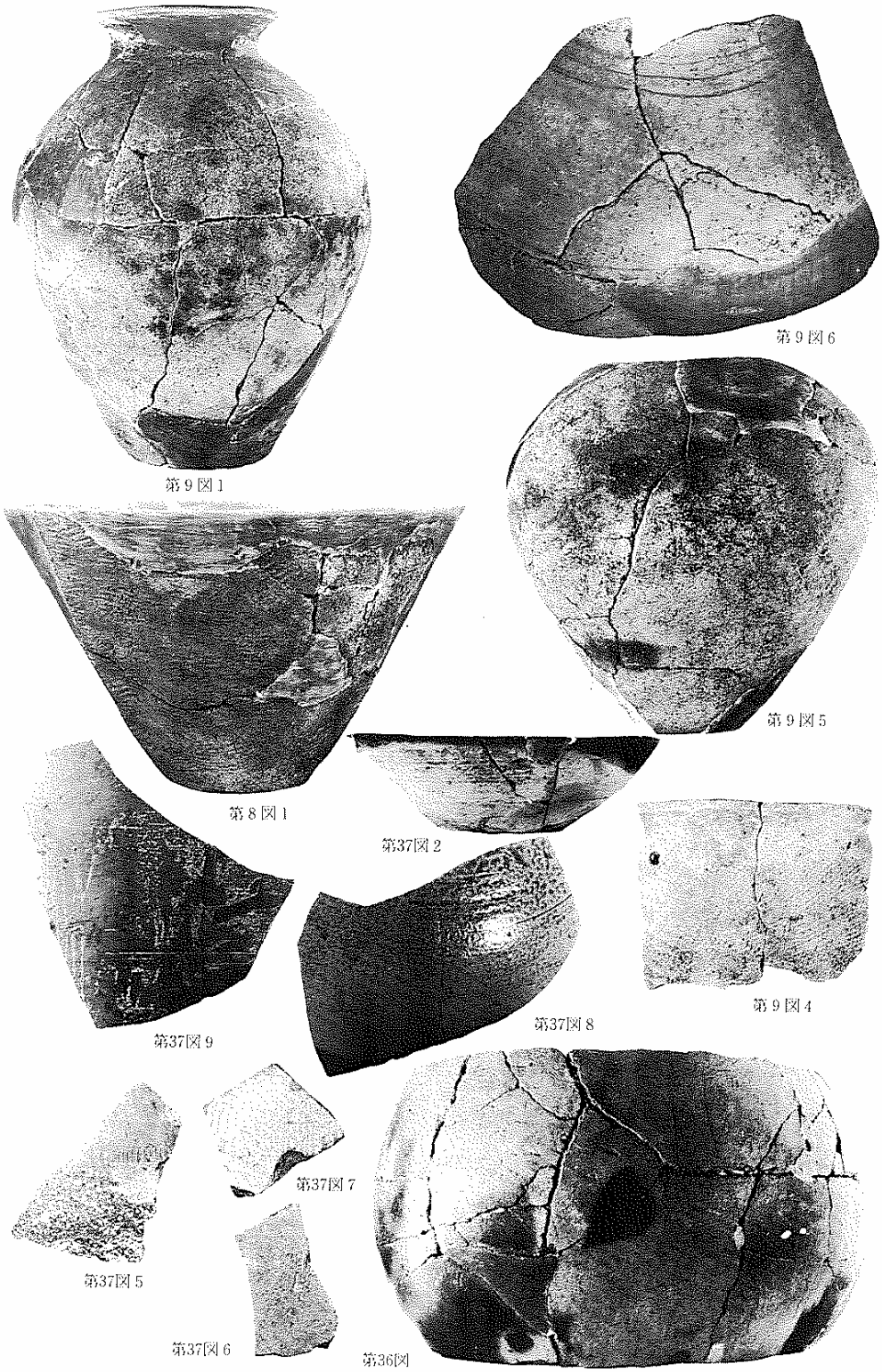

第27図 4


第27図 5

図版19　第２号住居跡出土遺物（赤焼土器坏、高台付坏）



図版20　第３住居跡、溝出土遺物（土師器坏、中世陶器、甕、擂鉢、緑釉陶器椀、石磨臼）



図版21　基本層位第Ⅳ層、Ⅱ、Ⅲ層、表土および出土地点不明出土遺物
（弥生土器、土師器、灰釉陶器、中世陶器）